東国古墳時代埴輪生産組織の研究

－埴輪生産の交流と地域性をめぐって－

日高　慎

東国古墳時代埴輪生産組織の研究

―埴輪生産の交流と地域性をめぐって―

日高　慎

目　次

序　章　埴輪生産組織研究の課題
1.埴輪研究の歴史と論点……1
2.埴輪の意義に関する研究の方向性……11

第1章　人物埴輪の共通表現検討とその有効性
1.問題の所在……14
2.共通表現を認定するための前提……15
3.人物埴輪表現における他人のそら似と共通表現の検証……16
4.共通表現検討の有効性とその応用……24

第2章　人物埴輪表現の地域性
1.問題の所在……32
2.脚部の属性抽出と分類……32
3.各種要素の分布……35
4.人物埴輪表現の地域性とその意義……40

第3章　人物埴輪の共通表現とその背景
はじめに……48
1.人物埴輪における共通表現の摘出……48
2.関東地方における人物埴輪の共通表現とその背景……56
3.結論と課題……64

第4章　人物埴輪の東西比較
はじめに……76
1.埴輪表現の異同について……76
2.西日本地域の埴輪表現……78
3.東海地域の埴輪における西日本的要素の有無……79
4.関東以北地域の埴輪における西日本的要素の有無……80
5.埴輪表現の非共通要素の意味……81
おわりに……83

第5章　埴輪からみた関東地方の地域性
はじめに……96

1.下総型埴輪について…… 96
2.埴輪からみた地域性…… 97
3.地域を越えて供給された埴輪…… 99
4.地域性と交流の意味…… 100
おわりに…… 101

第6章　下総型埴輪と墳丘企画
はじめに…… 103
1.下総型埴輪出土古墳の墳形…… 104
2.墳丘企画の異同の背景…… 106
おわりに…… 108

第7章　下総型埴輪が樹立された前方後円墳形態
はじめに…… 115
1.前方後円墳企画について…… 116
2.内部主体について…… 118
3.副葬品と出土土器について…… 120
4.前方後円墳形態と課題…… 121

第8章　埴輪製作工人の成立と土師部の研究
はじめに…… 126
1.埴輪生産の概観…… 126
2.埴輪生産遺跡と土師関連地名・人名…… 127
3.埴輪生産体制の変革と土師部の成立…… 128

第9章　埴輪樹立からみた地域性と階層性
はじめに…… 133
1.分析の視点と方法…… 133
2.人物埴輪の数と高さの検討…… 134
3.まとめと結論…… 138
おわりに…… 139

第10章　埴輪群像を読み解く
はじめに…… 143
1.瓦塚古墳の埴輪群像…… 143
2.瓦塚古墳埴輪群像のこれまでの見解…… 144
3.形象埴輪群像の意味についての再検討…… 145
4.形象埴輪群像の意味…… 149
おわりに…… 152

第 11 章　形象埴輪群像における動物
はじめに…… 154
1.埴輪の種類と変遷…… 154
2.埴輪群像のなかの動物埴輪…… 155
3.狩猟場面の意味…… 156
おわりに…… 159

第 12 章　横坐り乗馬考
はじめに…… 163
1.馬形埴輪にみる横坐り乗馬…… 163
2.右乗り・左乗りと横坐り乗馬…… 164
3.中央アジア・中国での横坐り乗馬…… 165
4.横坐り乗馬と衣服…… 166
おわりに…… 167

終　章　東国古墳時代埴輪生産組織の考古学的研究
1.埴輪生産の組織…… 170
2.埴輪の意義…… 178
3.埴輪研究の課題…… 182

引用・参考文献一覧…… 194

挿図・表目次

第1章　人物埴輪の共通表現検討とその有効性

図1　共通表現の人物埴輪1……28
図2　共通表現の人物埴輪2……29
図3　他人のそら似の人物埴輪……30
図4　共通表現の可能性がある人物埴輪……31
表1　頭巾状被りもの類例一覧……31

第2章　人物埴輪表現の地域性

図1　足結の分類……43
図2　履の分類……43
図3　台部の分類……43
図4　足結各種の分布……44
図5　履各種の分布……44
図6　台部各種の分布……45
図7　設定される小地域と埴輪窯の分布……45
表1　足結の県別累計……46
表2　履の県別累計……46
表3　台部の県別累計……46
表4　人物埴輪の脚部分類結果一覧……46
表5　関東地方における埴輪窯跡一覧……46

第3章　人物埴輪の共通表現とその背景

図1-①　共通表現をもつ人物埴輪典型例……68
図1-②　共通表現をもつ人物埴輪典型例……69
図2　女子埴輪の島田髷典型例……70
図3　頭巾状被りものの人物埴輪と生出塚埴輪窯の工人集団による埴輪の分布……71
図4　顎鬚をもつ人物埴輪と長方形周堀をもつ前方後円墳の分布……71
図5　垂下帯付き美豆良をもつ人物埴輪の分布……72
図6　首甲を着ける武人埴輪と円形浮文を伴う線刻の挂甲をもつ武人埴輪の分布……72
図7　幅広一枚肩甲の武人埴輪とその系譜をひく人物埴輪および下総型埴輪の分布……73
図8　中空技法の島田髷と各種島田髷の女子埴輪の分布……73
図9　下総型の盾持ち人の盾文様とその祖形……74
図10　下総型埴輪をめぐるその系譜と展開……74
図11　6世紀後半における埴輪を中心とした地域関係……75
表1　下総型埴輪出土古墳の墳形・規模別基数分布……75

第4章　人物埴輪の東西比較

図1　西日本の人物埴輪1……86

図2　西日本の人物埴輪2……87
図3　西日本の人物埴輪3……88
図4　東海の人物埴輪1……89
図5　東海の人物埴輪2……90
図6　東海の人物埴輪3……91
図7　北陸の人物埴輪……92
図8　関東以北の人物埴輪1……93
図9　関東以北の人物埴輪2……94
図10　関東以北の人物埴輪3……95

第5章　埴輪からみた関東地方の地域性
図1　下総型埴輪出土古墳分布図……102
図2　生出塚埴輪窯と生出塚産埴輪出土古墳分布図……102
図3　生出塚埴輪工人集団の供給モデル……102

第6章　下総型埴輪と墳丘企画
図1　高野山類型墳1……111
図2　高野山類型墳2……111
図3　城山類型墳……112
図4　他企画・不明企画の古墳……112
図5　目沼7号墳と日天月天塚古墳の墳丘企画……113
図6　下総型埴輪の出土分布と各類型の分布範囲……113
表1　下総型埴輪出土古墳のデータ一覧……114

第7章　下総型埴輪が樹立された前方後円墳形態
図1　下総型埴輪類型墳（高野山類型）……124
図2　下総型埴輪類型墳（城山類型）……124
図3　埴輪を樹立しない下総型埴輪類型墳……124
図4　野中5号墳の墳丘企画……125
図5　松塚1号墳の墳丘企画……125
表1　本稿で言及する古墳の諸要素……125

第8章　埴輪製作工人の成立と土師部の研究
表1　埴輪生産遺跡と土師関連地名一覧……131

第9章　埴輪樹立からみた地域性と階層性
表1　検討古墳一覧……140
表2　前方後円墳における人物埴輪の数……141
表3　帆立貝形古墳における人物埴輪の数……141
表4　円墳における人物埴輪の数……141

表5　半身人物埴輪の高さ…… 142
表6　双脚人物埴輪の高さ…… 142

第10章　埴輪群像を読み解く
図1　瓦塚古墳形象埴輪配置復元案1…… 153
図2　瓦塚古墳形象埴輪配置復元案2…… 153

第11章　形象埴輪群像における動物
図1　坂靖による埴輪配列の変遷…… 161
図2　梶2号墳出土の人物・動物埴輪…… 161
図3　瓦塚古墳の埴輪配列案…… 162
図4　小丸山古墳出土の装飾付須恵器の小像…… 162
図5　梶2号墳出土の装飾付須恵器の小像…… 162

第12章　横坐り乗馬考
図1　短冊形水平板装着馬形埴輪…… 168
図2　アフラシヤブ丘壁画にみる横坐り図像と騎馬図像…… 169
表1　短冊形水平板装着馬形埴輪一覧…… 169

終　章　東国古墳時代埴輪生産組織の考古学的研究
図1　石橋充による筑波山周辺産埴輪の分布…… 186
図2　顎鬚を蓄えた双脚男子像の諸特徴…… 186
図3　城倉正祥よる顎鬚を蓄えた双脚男子像の分類…… 186
図4　筑波山周辺産の顎鬚を蓄えた双脚男子像…… 187
図5　結晶片岩・海綿骨針化石分布（上）と藤岡産埴輪の供給範囲（下）…… 188
図6　埴輪の供給範囲と遠距離供給先（技術の共有を含む）…… 189
図7　坂靖による埴輪配列の変遷…… 189
図8　石山古墳の埴輪配列…… 190
図9　ヒル塚古墳の埴輪配列（左端の円形が埴輪列を示す）…… 190
図10　井辺八幡山古墳造出周辺における埴輪・須恵器出土状況…… 191
図11　神保下條2号墳の埴輪配列復元…… 191
図12　勢野茶臼山古墳の埴輪配列復元…… 191
図13　今城塚古墳の埴輪配列復元…… 192
図14　塚廻り4号墳の埴輪と配列復元…… 192
図15　城倉正祥による生出塚埴輪製作工人集団をめぐる諸関係…… 193
表1　筑波山周辺産の顎鬚を蓄えた双脚男子像…… 174
表2　場面構成要素一覧…… 180

序章　埴輪生産組織研究の課題

1. 埴輪研究の歴史と論点

1-1　明治から大正期まで－円筒埴輪の意義と形象埴輪の起源－

人物埴輪に対する研究については、すでに江戸時代にも若干の資料を用いてではあるが、論及されている。しかし、その当時は人物埴輪をもって古代人の服装を復元するという意味で間接的に使われているだけであり、積極的にその資料を歴史的遺物にまで高めているものはない。人物埴輪さらには円筒埴輪に関する研究が本格的に行われるようになるのは坪井正五郎の登場を待たなくてはならない。

坪井正五郎は、人物埴輪を集成すると共に、当時の外国人研究者、例えばアーネスト・サトウ（E.Sato）などの意見に耳を傾け、主として円筒埴輪の意義について論を展開させた（坪井1888・1901)。この研究はその後、八木奘三郎（八木 1894・1895）や和田千吉（和田 1897・1902a・1902b・1903)、さらに光井清三郎（光井 1902)、瓦片生（瓦 1903）らによって批判・検討が進められた。その主たる論拠を整理すると、以下のようになる。

円筒埴輪柴垣模倣説：アーネスト・サトウ、坪井正五郎（後に補正)、八木奘三郎

円筒埴輪土留柴垣説：坪井正五郎、瓦片生

円筒埴輪装飾説　　：和田千吉

これらの研究は円筒埴輪についてその起源、性格を論じたものである。これらの中で特に異彩を放つのが、坪井正五郎（坪井 1901）と和田千吉（和田 1902a）の研究である。

坪井は『はにわ考』の中で「埴輪土物配列想像図」を提示し、自らの円筒埴輪土留柴垣説とともに、円筒埴輪列中に形象埴輪が並ぶ姿を復元した。この埴輪配列想像図は、後の埴輪研究の方向性を決定づけたといっても過言ではあるまい。しかし、この研究の他に、もう一つ忘れてはいけない重要な指摘がある。それは、理科大学（現東京大学理学部）に籍を置いていた坪井自身が、当時の『東京人類学会雑誌』の報告を見るごとく、多数の埴輪資料を実査することができたことに起因する。武蔵・常陸・上野・下野から発見された合計 25 個体の各人物埴輪を比較することにより、その「地方特徴」を抽出したのである。

その特徴を簡潔にまとめると以下のようになる。

・武蔵発見の土偶の標式は耳が簡単な突き孔で、左右の眉が判然区別されて居る。

・常陸発見の土偶の標式は外耳が示して有って左右の眉が一続きに成って居る。

・上野発見の土偶の標式は眉の部が不明瞭で、鼻は狭くて付けた儘の形に成って居る。

武蔵のものは埼玉県桶川市川田谷出土の女子埴輪、常陸のものは茨城県鉾田市不二内出土のひざまずく人物、上野のものは群馬県前橋市天川町出土の武人埴輪をそれぞれ指標とし、図を添えている。坪井はさらに人物埴輪に表された身体的特徴すなわち男子・女子の区別や服装、装飾品、顔面装飾など、現在の埴輪総数からすれば数的には劣るものであるけれども、埴輪の観察眼に関しては、現在の埴輪研究に通じる基本的な項目をこの時点で指摘している。また、一般読者や調査者に対して、古墳の存在と埴輪研究を進めるために、埴輪の配列や透孔の方向など9つの注意点を提示している。

和田は、自身が実見した5例をもとに、前方後円墳の場合は人物が皆向かって右側のくびれ部（馬は両くびれ部）から出土し、円墳の場合はほとんど平地の部分から出土していると述べた。当時、古墳発掘の実例はほとんどなく、そのなかでの論ではあるが、形象埴輪がくびれ部から出土するという、重要な指摘を行った（和田 1902a)。これは、形象埴輪配列位置研究の先駆的業績として評価できよう。

明治時代の中頃に至り、それまでの主として円筒埴輪に関する研究から、形象埴輪の起源と意義について盛んに議論が交わされるようになった。

浜田耕作は、中国の俑や石人・石馬との比較から、形象埴輪は大陸に起源があると説いた（浜田 1911)。すなわち、埴輪を墓前に立てるという共通点から石人・石馬にその源流を求め、それが朝鮮半島を経由し九州に定着、畿内に伝播したと述べたのである。

この浜田の説を受ける形で高橋健自は、人物埴輪が日本自生で固有の遺物であることを強調した（高橋 1911・1913)。すなわち、形象埴輪の出現が殉死代用説の真偽はともかくとして、垂仁天皇の御世の頃には陵墓の外部に樹立されていたと考える立場から、九州の石人・石馬（筑紫国磐井の墓）よりも以前に出現していたと考えたのである。また、墳丘を飾るという点では日本の形象埴輪と中国の石人・石馬も同じであり、思想的流入の存在は否定しないが、あくまでも日本の形象埴輪の方が時期的に先行している以上、日本自生のものであるとくり返し強調した。さらに、高橋は人物埴輪の出現はそれに先行する円筒埴輪から段階的に発展してきたものであることを述べた。すなわち、茨城県龍ヶ崎市愛宕山古墳出土の人物埴輪を拠り所として、円筒埴輪から進化発展したものであると述べた。また、殉死と埴輪の関係についても、中国の石人・石馬と同じく墳丘を飾るという思想のもとに完成されたと説き、けして殉死代用の所産ではないと結論付けた（高橋 1922・1925)。

浜田・高橋の一連の論考に対して文献史学の立場から喜田貞吉は、殉死代用説を否定した上

で、石人・石馬などの大陸墓制の影響なのか日本自生なのか明言は避けつつも、生前に仕えていた近習や日常使用の器物に至るまでを、死後においても使用すべく墓に供えたものであると述べた（喜田 1921）。当時、雑誌『民族と歴史』を主宰していた喜田は、この論文の前後に「土師部考」を 3 号にわたって連載していた。「埴輪考」もその「土師部考別編」として発表されたものであり、当時学会の重鎮であった喜田が文献を駆使して埴輪の意義を論じたものとして注目される。

1-2　昭和初期から戦前まで－形象埴輪の起源から埴輪の意義論へ－

それまで展開されてきた数々の論をまとめる形で、高橋健自が『日本服飾史論』、『埴輪及装身具』を世に送り出した（高橋 1927・1929）。当時の資料を明確に把握し、詳細な各論を行っており、極めて高く評価される。また、この本にはふんだんに埴輪の写真が掲載されており、高橋が編集した『日本埴輪図集』（高橋 1920）の仕事がここで生かされている。埴輪の意義に関しては、それまでの墳丘表飾説を強調しつつ、樹立の意味については死者の霊を慰めるとともに、衆人に墳墓の壮観さを仰がせるものであると述べた（高橋 1929）。さらに、人物埴輪の着衣についてそれまで主張してきたことを進め、袈裟式衣や『魏志倭人伝』に記されている貫頭衣という単純な着衣と、男子立像にみるような衣袴との関係について、衣袴の型式はそれ以前の原始衣に比べるとその差が余りに著しく、袈裟式衣や貫頭衣が自然に変化したとは考えられないと述べた（高橋 1929）。そこで「胡服」の登場となったわけである。この見解には高橋自身かなりの自信があったようで、埴輪関係の論文には必ずといっていいほど、中国の北魏正光 6 年（525）画像石を掲載しており、そこには足結をした馬子の姿が描かれている。さらに北周建徳 2 年（573）の画像石を提示し、左衽垂領で筒袖の人物が人物埴輪につながると述べた。これに関しては、後に後藤守一の反論がまっている。

この頃後藤守一は浜田耕作の意見を取り入れて、石人・石馬の影響をもって形象埴輪が成立したとの立場を採っていた（後藤 1927）。しかし、高橋健自の説が提示され、当の高橋が亡くなった後に「埴輪の意義」を発表する（後藤 1931）。この中で、石人・石馬の影響ではなく、むしろ中国の明器泥象との関連を述べた。この当時後藤は、帝室博物館から埴輪図録編纂の命を受けており、この一環で相川龍雄との交流があったらしく、論文の中に当時相川龍雄が集めた埴輪をしばしば使用している。また、意見の変化には、群馬県高崎市保渡田八幡塚古墳と上芝古墳が発掘調査され、形象埴輪の様相が古墳において極めて良好に確認できたことも関係があろう。

後藤の見解を受ける形で、浜田耕作が帝室博物館の講演の中で、墳丘の外に並べるということで石人・石馬の影響を、一方で土製の仮器という要素を中国の明器泥象に求める折衷案を提示した（浜田 1931）。

この前後に、続々と埴輪配列研究の基礎となるべき重要な論考、報告が相次いだ。柴田常恵の群馬県高崎市上芝古墳の概報（柴田 1929）、島田貞彦の栃木県足利市葉鹿熊野古墳を中心とした配列研究（島田 1929）、福島武雄らによる上芝古墳・八幡塚古墳の発掘調査報告書（福島ほか 1932）、さらに後藤守一による群馬県伊勢崎市赤掘茶臼山古墳の発掘調査報告書（後藤 1933）などである。これらの論考・報告は、いまなお埴輪配列研究の中核をなすといっても過言でないはどのものであり、特に八幡塚古墳は後述する水野正好の論考の元にもなった。

埴輪配列が良好に残っていた古墳が明らかにされた後、後藤守一が積極的に埴輪の意義について論及するようになる。前述の「埴輪の意義」の中で後藤は、各種の形象埴輪それぞれに、その意味するところを述べた。そこで後藤は、端然と立つ男子殊に武装男子像の多くは、警護あるいは永遠の旅に随従する様子を表現しており、奏楽・歌舞の一群は上古時代に霊前に歌舞する風習があったことからも想像できるとし、女子の多くが奉仕の姿態をとるのは神女の如きもの、農民の一群は古墳築造に奉仕した姿であると考えた（後藤 1931）。この見解は、その後の埴輪研究に対して極めて大きな影響を与え、後藤の見解を下敷きにして幾多の研究が進んできたと言えよう。

後藤の埴輪列に対する評価は、埴輪の列に意義を持たせ、伊勢皇太神宮式年遷宮の絵を示して、人物・動物埴輪などは葬式の行列であるとの見解を出した（後藤 1933・1937）。その後の幾多の論考にも、一貫して葬列を表したものであると主張した。また、後藤は自ら形象埴輪の種類ごとに出現の時期が異なることを提示して、人物埴輪が器財埴輪よりも遅れて出現していることを確認しているにも関わらず、人物埴輪の出現が殉死の代用品であるとの見解も述べている。後藤守一のもう一つの業績は人物埴輪の着衣、帽、天冠に対する研究である。いずれの研究も埴輪のみにとどまらず、中世の絵画資料におけるそれにまで目配りをした緻密なものである。それまで袈裟衣着用埴輪として呼称されていた着衣をタスキと意須衣に分割し、文献をも駆使して考察した（後藤 1936）。また、以前に高橋健自が中国画像石の例をもって「胡服」と関連づけたことに対し、高橋の死後発掘された高句麗壁画古墳の図に足結の表現がないことや、高橋が提示した垂領の人物埴輪は栃木県真岡市若旅大日塚古墳1例であることの不思議さなどを疑問とし、その類似性と同一系譜は認めながらも日本において発展していったものと考えた（後藤 1941）。帽、天冠についての研究は、それぞれに人物埴輪の図を載せて説明してい

るが、今日資料の所在が確認できないものも含まれている。また、論文の性格上通史的な叙述となっており、アジア的視野で論を展開させているが、人物埴輪についてはその説明にとどまっており、出土地などの記載がない（後藤 1940・1941）。しかし、その形態分析には極めて詳細な知識を披露しており、他の追従を許さないものである。

後藤の葬列説に対して小林行雄は、後藤自らが提示した資料中の、琴弾きや座像の人物埴輪が葬列を表しているとは解釈できず、むしろ神を祭る儀礼の場に臨んでいる人々の姿と考えたほうが妥当であるとの見解を示した（小林 1944）。すなわち祭祀儀礼説である。この論文で重要なことは、祭祀それ自体の内容について、小林が不明としたところである。昨今の形象埴輪論が幾多の祭祀復元を行っていることを考えると、小林が述べたことは極めて論理的で、かつ基本的な所見であると考えられる。小林は以後の埴輪論の中でも、この基本的な考えを踏襲している（小林 1960・1974）。ちなみに私は、形象埴輪が表している場面について、小林氏が述べるような神を祭る儀礼であると考えている（第 10 章参照）。

1-3　戦後から昭和末年ころまで－形象埴輪の意義論－

終戦後間もない昭和 22 年(1947)に末永雅雄が『埴輪』を出版する（末永 1947）。この中で、埴輪の配列が分かる 25 例を提示し、さらに古墳以外の出土を見た埴輪についてもその概略を述べている。個別の埴輪については、挿図をふんだんに使って読みやすいものとなっている。また、形象埴輪の起源については、大陸との関係上影響されて出現した可能性を述べた。同書はその後、昭和 62 年(1987)に至り、増補改訂し復刊された（末永 1987）。

この 2 年後、奈良県桜井市外山茶臼山古墳が発掘調査され、墳頂部で底部穿孔の壺形埴輪が方形に並んで出土した。この発掘の後昭和 30 年代にかけて、円筒埴輪論を中心とする幾多の論文が発表されることになる。これらについて詳述しないが、昭和 42 年(1967)に至り近藤義郎・春成秀爾によって、その起源が決定づけられた（近藤・春成 1967）。

このような趨勢の中で、金谷克己は形象埴輪について起源を海外に求める考えに疑問をなげかける。九州の石人・石馬は大陸の影響をとしてとらえることもできようが、その種類、表現方法などに形象埴輪とはかなりの隔たりがあると述べ、石人・石馬影響説を退けた。また、明器泥象に求める考えに対しては、出土位置の相違、大きさの相違、種類の相違などを上げ、両説の成り立たないことを示した。これらのことから、形象埴輪は日本独自に発展したもので、その発展の中で関東の人物埴輪の多様さについては明器泥象の影響があった可能性を述べた。さらに、形象埴輪の性格については未来観念の発露と考え、被葬者に随っていく姿とすべきで

あろうとした（金谷 1951）。この後、金谷は形象埴輪のそれぞれに意味をもたせるべく、意義付けを行った。そして、埴輪の樹立という行為にはそのことをもって、「死者埋葬の儀の終結」を意味し、送る者達の「表飾的な満足と、哀惜」とを表すものであったと述べた（金谷 1958）。重要なことは、埴輪を樹立する時が、すなわち儀礼の終了時であるとの認識である。この後、他の論考をもまとめた形で、金谷の死後『はにわ誕生』という単行本が刊行されている（金谷 1962）。

これらの論考の後、三木文雄が『はにわ』を著す。三木は村井嵓雄らの協力を得て、埴輪出土分布地名一覧を作成し、かつ形象埴輪の年代的推移を述べた。さらに、その推移の中で形象埴輪の配置における変化をも考慮し、横穴式石室の前面に配置される例などをあげて、形象埴輪の意義的変化を考えた（三木 1958）。浅田芳朗はそれまでの研究を簡潔にまとめ、石製模造品などが実物の仮器化であるということから、形象埴輪も実際に執り行われた墓前祭での施設と人物とを仮器化したものであると述べた（浅田 1958）。

同年、文献史学・民俗学の立場から、和歌森太郎が主として後藤守一の葬列説を批判し、殯説を提示した。それは、埴輪とは別にして古代に殉死の風があったことは想定でき、大化 2 年の詔にはこれも絶対禁止している通りであり、形式化してその殯の印象を永遠に故人とともにとどめるべく、古墳に添えたのであろうと考えた（和歌森 1958）。和歌森の殯説は、民俗学的な見地から詳細に分析した上での結論であり説得力がある。この説は、その後の考古学者に対して多大な影響力を与えた。

森浩一は研究ノートとして、「形象埴輪の出土状態の再検討」を『古代学研究』に発表する（森 1961a）。この論文は現状で古墳の墳丘でない所から出土するものを特に扱い、1）大古墳の墳丘外部に伴うもの、2）古墳石室内に副葬されたもの、3）古墳に関係ない出土例、というように判別した。つまり、1）は中国の石人・石馬に、2）は中国の明器に似ていることを指摘した。その上で前述の浜田耕作の説に対して「なお魅力と可能性をもっている」としたのである。3）は奈良県磯城郡三宅町石見遺跡が水辺での祭祀という見地からのものである。それまでの研究が、埴輪は古墳の裾からしか出土しないという概念であったことに対して再考を促している。

滝口宏らは昭和 31 年（1956）に千葉県山武郡横芝町殿塚古墳・姫塚古墳の発掘を行った。その報告の意味をもつ『はにわ』を 1963 年に刊行した（滝口 1963）。前者は出土状態があまり良くないのだが、後者は極めて良好な資料を提供した。その出土状態から埴輪の持つ意義を論じ、埴輪列は葬列を表したと考えた。葬列を表しているという考えは後藤守一がかつて述べた

ところだが、この姫塚古墳の発掘によって再浮上した。さらに、本古墳が形象埴輪再終末に属することから、埴輪配列の変遷が形象埴輪の表す意義をも変化させていたことを示唆している。

昭和 42 年(1967)、近藤義郎・春成秀爾は「埴輪の起源」を『考古学研究』に発表する（近藤・春成 1967)。すなわち円筒形埴輪の起源が、今の中国地方を中心に分布する特殊器台と特殊壺に求められるとしたものである。それは立坂型から都月型への型式学的変遷であったわけだが、それまでの円筒埴輪研究に新たな光を当てた。その後、この一群の遺物に関しては幾多の研究者から再検討が加えられているが、大筋での変更はない。

円筒埴輪の研究で忘れてはならないのは、轟俊二郎の研究である（轟 1973)。轟は、東京大学が発掘調査した千葉県我孫子市の高野山古墳群などを含む我孫子古墳群の埴輪整理の過程で、その地域特有の円筒埴輪があることを発見した。いわゆる「下総型円筒埴輪」である。その詳細な分析は、他の追従を許さないものであり、私の研究もこの轟論文に啓発されるところが大きく、地域性の抽出と、その分布研究には学ぶべき点が多い。

さらに、円筒埴輪研究で一線を画するものは、川西宏幸の研究である(川西 1978・1979・1988)。古墳の築造年代をある程度明確にした稀有な研究といえる。円筒埴輪の製作技法をベースとした汎日本的な編年研究であり、その細かな部分での再検討および追補はされるべきであるが、大枠は変わることがないだろう。

昭和 46 年(1971)、水野正好がその後の形象埴輪研究の方向性を、決定付けた論文を『古代の日本』に発表する（水野 1971)。すなわち「埴輪芸能論」である。水野は形象埴輪に表された世界について、まず形象埴輪が並んでいる様を連想する。そこから、「何を、なぜ目に付きやすくするのか。何を、なぜ衆人に見せようとするのか」という基本的な問いかけを出発点として、「埴輪世界の構造」的把握を試みた。すなわち、人物埴輪は豪族の職業集団であり、朝廷でいうならば「部」の一部にあたる性質をもつと考え、馬飼部を始めとしてそれぞれに職掌を与えた。そして、総体として人物埴輪のもつ意義は、葬られた死せる族長の霊を、新たな族長が墳墓の地で引きつぐ祭式が埴輪祭式であると結論付けた。また、葬列として滝口が述べた千葉県姫塚古墳の配列状態も、そこに加わる人物の状態からは、列であっても葬列と言い切るのは難しいと述べた。さらに、これらの形象埴輪群はその前代の祭式（実際に人が行っていた）を人物埴輪でもって形象化したもので、その出現の背景を 5 世紀中葉以後の渡来系の文物・人との関わりの中で理解しようとした。埴輪芸能論はともかくとして、時代背景に関しては聞くべき意見である。水野は昭和 49 年(1974)、上述の人物埴輪論に加えて円筒埴輪、人物以外の形象埴輪を含めた形象埴輪論を展開させる（水野 1974)。すなわち「埴輪体系の把握」である。

その具体的な構造については述べないが、ここで強調したいことは「政治の表示」として人物埴輪・動物埴輪をとらえたことである。政治として人物埴輪・動物埴輪を把握したため、当然の帰結として、その埴輪祭式を「各地の首長を容認する手段として各地に埴輪祭式を拡げ配布していくのであって、政治色のきわめて強いもの」と述べることになった。前説では政治という言葉こそ使ってはいたが、具体的復元は行っていなかったことからすれば、かなり進んだ意見である。

一連の水野の論は、踐祚大嘗祭との関連を根拠にそこから発展したものとして、古墳時代の即位儀礼を復元しようとしている。しかし、このことに関しては、文献史学の岡田精司が詳細な文献批判を行った上で、大嘗祭が律令以前からの就任儀礼であった証拠はまったく認められないと説き、さらに考古学者の間では、大嘗祭を古墳祭祀や人物埴輪と結びつけて論じる傾向があるが、古代の葬制と神祇祭祀は別個のものであり、古代首長の儀礼は地域ごとに個性に富んだ儀礼がおこなわれていた可能性が大きいと述べた(岡田 1983)。極めて重要な指摘であり、考古学者が文献を用いるときに注視すべき点を示したものである。形象埴輪の意義を語る場合、聞くべき意見と考える。

昭和 49 年(1974)、小林行雄は『埴輪』を著す（小林 1974)。これは、それ以前に刊行された『埴輪』(小林 1960) を下敷きにしたものであるが、新著に近いものである。極めて重要なことは人物埴輪における作者の違いを見出だしたことである。すなわち、「作風」と小林が呼んだ違いである。一古墳の中での埴輪の違い、また一古墳の中での共通性を抽出した。この研究の進展は、その当時関東地方（主として千葉県）での古墳の発掘が盛んになり、形象埴輪の様相が判明してきたことにある。

増田精一は全身立像を誄に、半身像の女子埴輪を殯にあて、その違いを指摘した。すなわち殯は生を求める行動であり、誄は死者を死と認めて葬る儀式であるとした。『日本書紀』に記されている殯の儀礼の一環で、女子と男子の役割分担の存在があり、このことに意義を見出だし、女子を中心に執り行なう儀礼がすなわち殯であり、「氏族を代表する」男子による奏上を中心とした儀礼を誄とした。つまり、人物埴輪の半身像（琴弾き、歌舞、裸像など）が殯の光景を表しており、最後に執り行なう儀礼を全身像の男子にあてたのである（増田 1976)。天皇崩御の際、この両者が存在していたであろうことは十分に考えられることであるが、それを遡らせて人物埴輪に当てはめることができるのかどうかは不明であると言わざるを得ない。

今日まで、一貫して人物埴輪の研究を進めているのが市毛勲である。市毛は人物埴輪の顔面赤彩を詳細に分析し、目を中心とした赤彩、頬を中心とした赤彩、線刻によるものなどに分け、

地域性とともにその系譜を述べた。さらに、朱という問題からその生産地をも含めた総合的研究を行った（市毛 1964・1968・1969・1976・1984)。また、製作技法の問題として目と口の形態に着目し変遷を論じたが（市毛 1980)、その相関関係にやや感覚的な部分もある。市毛の一連の研究で異彩を放つのが論文「人物埴輪における隊と列の形成」である（市毛 1985)。市毛は人物埴輪の配列状況を検討し、そこに隊（一定の範囲内に立て並べられるもの）と列（墳丘中段などに一列に立て並べられるもの）の 2 種を指摘した（この見解は市毛 1964 においてすでに指摘しているが、まとまって論じたものはこの論文である)。さらにこの 2 種を 10 類型に分割し、それぞれに当てはまる配置の古墳をあげ、考察を加えた。すなわち隊から列へ（墳丘外から墳丘内へ)、そして近畿地方における列配置には東国の影響が読み取れることを指摘した。さらに、東国におけると但し書きをつけながらも、隊を「殯葬の儀礼」に、列を「葬列」に考えた。

市毛自身も述べていることだが、人物埴輪を中心とする古墳造営に際して、どのような人々の関与があるのか、このことを明確にし得ない限り、この後述べる各研究者の所見は検証のできない議論と言わざるを得ない。市毛は、人物埴輪に表された服飾についても論じている（市毛 1991a)。しかし、その分類の中で、特に佩刀の人・平装の人という概念には、かなりの問題を孕んでいる。それは、天冠を被るかどうか、刀を佩いているかどうかということに力点を置くあまり、椅子に座った人物を馬子と考えられる人物と同様に扱っている。天冠そのものがどのようなものを指すのかを明確にせずには論じられないところである。また、この論文では職掌という言葉が頻繁に使われている。人物埴輪を分類する際、水野正好を始めとしてこの職掌という言葉を多用する傾向がある。しかし、この言葉を使うことによって、逆にその性格自体が不明確になるとともに、一括して論じられてしまい、先にみたような疑問が露呈してくるのである。

昭和 55 年(1980)に、群馬県太田市塚廻り古墳群の報告書が刊行された（石塚ほか 1980)。この中で橋本博文は「埴輪祭式論」を著した（橋本 1980)。基本的に水野正好の意見に連なるものであるが、この他に殯、誄をも含めた総合的な解釈を述べた。橋本の研究は、埴輪の配列とその構成要素である人物埴輪の姿態を結び付け、地域ごとの変遷と個性を抽出した点で特筆されるものである。さらに、埴輪のそれぞれに意味を持たせ、総体として首長権継承儀礼を復元した（ちなみに、4 号墳の女子埴輪の解釈は橋本 1981a で変更している)。

杉山晋作はやや異なる見地から人物埴輪の意義を論じている（杉山 1986・1991)。それは群馬県高崎市観音山古墳出土の胡座男子の腰帯に鈴が付いており、副葬品にも同様な鈴付大帯が

存在していたことを主たる論拠にして、その人物埴輪が被葬者自身であると述べた。つまり、人物埴輪に表された世界とは、古墳の被葬者の活動のうちもっとも記念すべき業績を場面として残す顕彰碑的意図をもってたて並べられたものであるとした（杉山 1986)。ここには関東地方における形象埴輪の出土が、大前方後円墳から極めて小さな円墳まで、数の多少はあっても存在することに意義を見出そうとしたことに由来する。すなわち、その当時の首長というべきものが、前方後円墳ではなく小型の円墳に葬られたとは考えられないという立場から、首長権継承儀礼としては把握しきれないと考えたのである。小型円墳の埴輪群像に一定の解釈を加えた点で、特筆される。これより前に、杉山は千葉県山武郡域の各古墳出土の人物埴輪を、詳細に分類・分析した（杉山 1976)。基本的に小林行雄の述べた作風（小林 1974）に通じるものであり、小林の述べた木戸前像と姫塚像をさらに検討し、その相関関係を論じたものである。さらに各部位における他要素の流入などを示唆しており、聞くべき意見が多い。杉山はこれらの詳細な検討によって、製作時期の近接する埴輪の前後関係を見出だすことができるのではないか、という重要な指摘を行っている。私の研究方向もこの延長線上のものである。

若松良一は埼玉県行田市瓦塚古墳の報告書において、その埴輪群像を積極的に配置復元し、その意義を説いた。そこには高床式吹き抜け建物と寄棟の建物との解釈に意義を見出だそうとしている。さらに人物埴輪をA群、B群に分け、B群が無き首長の霊をゆさぶり、再生を願うたまふりの歌舞を行ったとしたのである（若松 1986a)。この見解はすなわち殯であり、その後の若松の一貫して述べるところである（若松 1992b など)。

さらに若松は人物埴輪の編年研究を積極的に進める（若松 1986b・1987・1992a)。人物埴輪の腕の製作技法は、埼玉古墳群における詳細な検討結果を元に述べられており（若松 1986a)、首肯されるものである。しかし、その後の編年的検討には難点もある。例えば「オタマジャクシ理論」とされる人物埴輪の発展形態（若松 1987）は、腕のない武装男子については甲冑形埴輪の一形態と考えることもでき、女子埴輪で腕のないものはむしろ特異なものと捉えた方がいいと思われるので、発展していった結果として腕の表現が出てきたのか、なお検討を要する。

川那辺隆徳は近畿と関東の埴輪配列を比較検討し、その共通性を見出だした。そして、関東の埴輪配列がいずれも近畿のそれに起源があるものと解釈した（川那辺 1987)。小畑三秋は日本各地の埴輪配列の分かる資料を網羅的に集成し、その変遷を考えた（小畑 1990)。さらに、これまで見てきたような幾多の研究の上に立ち、その配列状況と構成される形象埴輪の種類から、それぞれの古墳を殯、首長権継承儀礼、葬列の3種に分けた。この見解は一見合理的に思われるが、その設定の際に、資料批判を経ずして人物埴輪を分類しており（分類は水野正好の

ものを全面的に採用している)、かつ市毛勲の研究のところでも述べたが天冠などの細かな設定に疑問点が多い。

1-4　近年の研究動向－意味論から埴輪それ自身の研究へ－

川西宏幸はかつて、工具（ハケメ）とくせとが同じであることをもって、同じ工人の製作品を見出す必要性を説いた（川西 1977)。これより以前、ハケメの粗密（あるいはそれの数値化）に関して、計測点の違いや工具の当て方の角度による違いに注意を促している（川西 1973)。

平成 7 年(1995)、犬木努が円筒埴輪研究に新たな視点を提示した（犬木 1995)。埴輪同工品論である。埴輪は当然ながらそれを製作した個人（工人・製作者）がおり、それらが集まって埴輪製作工人集団を形成し、さまざまな工人集団の製品が古墳という墓に供給され樹立されるわけである。

生産と流通を考えていくならば、あるいはその組織体制を考えていくならば、最小基準であるところの個人に行き着き、同工品の認識と各古墳に供給された埴輪との関係を論じることは当然の帰結といえる。犬木の諸研究は（犬木 1996・1997a・2005 など)、川西の重要な指摘を具現化し、下総型埴輪というまとまりの中に個人（工人）の具体像を示した点で極めて大きな成果であるといえる。同工品論はその後、大きな研究の流れとなっており、続々と各地で研究成果が示されている（小橋 2004・2005、城倉 2004・2005a・2005b・2005c・2007a、2008・2009・2011、廣瀬 2003 など)。今日の埴輪研究の中心に躍り出た感が強い。

2．埴輪の意義に関する研究の方向性

現在の形象埴輪の意義に関する研究は、埴輪配列から何を見出だすのかという点に集約されるであろう。埴輪配列とその構成要素の検討から、人物埴輪出現以降の形象埴輪群像の意味するところには、おおむね以下の諸説が存在する。

1、葬列……後藤守一、滝口宏、市毛勲（殯を含む）

2、殯……和歌森太郎、増田精一、若松良一、橋本博文

3、殯宮儀礼……森田克行

4、首長権(霊)継承儀礼……水野正好、橋本博文、須藤宏

5、1・2・4 の存在……小畑三秋

6、披葬者の顕彰碑的性格のもの……杉山晋作、和田萃

7、供養・墓前祭祀……高橋克壽、車崎正彦、梅沢重昭

8、他界における王権祭儀……辰巳和弘

9、集落・居館での祭祀→墓前祭祀→生前の儀礼……坂靖

10、神宴儀礼……小林行雄、森田悌、日高慎

11、殉死の代用から来世生活……増田美子

12、死後の世界における近習……塚田良道

このなかで橋本博文は上記 4 の妥当性と 1・2・5・6 の所見についてその疑問点を提示しているが（橋本 1992)、それは同一遺物に対する解釈の違いによっており、結論的には「やや説得力にかける」という抽象的な表現にとどまっている。また、階層性という言葉を用いて、古墳の規模と人物埴輪の数を論じている。第 9 章で再検討を試みているので、その問題点を含めた私の見解は後で述べることにする。

これらの研究には主張する意見の違い、または解釈の違いに拠っているところが極めて大きい。つまり、文献をも駆使して積極的な解釈を行おうとしたために、かえって埴輪それ自体の分析が、なおざりにされていると考えられる。仮に上記 1～12 までのいずれかに妥当性が存在するとしても、手順として埴輪そのものの研究をまず行うべきではないのか。

それは、政治性とは何かという根本的な問題にも関わってくるし、埴輪の生産と流通という問題にも関わってくる。つまり、どのような生産体制で埴輪が供給されていたのか、もっと具体的にいえば、注文製作なのか作り置き製作なのかという問題である。そのことがなぜ重要なのかと言えば、埴輪に表された「儀礼」がすべての古墳に共通していたのかという素朴な疑問にもつながるからである。

埴輪儀礼を復元するためには、まずどのようなことをすべきなのか。地味な検討ではあるが、各地の埴輪を詳細に分析することが不可欠であろう。それは、市毛が行ったような「平装の人」という分類（市毛 1991a）だけでは、解明することができない。また、設定の根拠なくしての「職掌」という言葉の範疇には、躊躇せざるを得ない。それでは、どの様な分析方法でその問題を解くことができるのであろうか。それは、製作技法を中心とした人物埴輪の総体的検討が最も有効な手段であろう。しかし、現状はそれ程甘くない。人物埴輪は考古学的な価値と同様に、美術史的価値も高いものである。よって個人で所蔵している資料がかなりある。また、復元を行った結果、技法の観察を行えないもの、破片になってしまって全体像が不明となっているものもある。実見できればある程度判明してくるであろうが、見ることのできない資料の方が多いことは否めない。

よって、第1章以下で人物埴輪の各部位を分類し、その中で地域性、共通性を見出だしたい。さらに、第6章および第7章で古墳造りと埴輪作りの関係を墳丘企画等から論じてみたい。また、第8章では埴輪生産遺跡の全体像を把握するために、全国的な集成と埴輪生産遺跡の特徴について概観し、生産組織の変革期を考えたい。この基礎的検討行うことにより、人物埴輪の様相が判明してくると考えられる。その後、私の考える埴輪の意義について第9章から第11章で述べることにする。また、今後の埴輪研究には東アジア的視野からの検討が必要と考えているので、その一端を第12章で述べてみたい。

第1章　人物埴輪の共通表現検討とその有効性

―頭巾状被りものをつける人物埴輪をもとにして―

1. 問題の所在

人物埴輪は、表現された各部位の分類とともに共通表現をもつ人物埴輪の分布から、埴輪製作工人集団の動向を探ることができると考えている（第2・3章参照）。人物埴輪表現には特定の埴輪製作工人集団だけに認められる共通表現が存在し、その分布域を抽出することで埴輪の生産と供給の具体像を描けると考える。ただし、特定部位の共通表現を扱う場合、その表現が果たして工人集団を特定する独特のものであるのか、それとも古墳時代社会（ここでは関東地域）において同時代的に共通する要素（習俗・風俗）であるのか、ということが常に問題となる。つまり、設定された「共通表現」が、他人のそら似であるのか否かを明確に説明できなければならないわけである。また、犬木努が拙論（日高1995）に対して、「部位毎に設定された類型の分類単位としての等価性についての吟味、あるいは各類型の個体内での共伴関係について概念化する作業」の必要性を指摘しているが（犬木1997b：28頁）、筆者もまったく同意見である（日高1997a：73頁）。

そこで、本章では人物埴輪表現の分類をおこなう上での留意点と共に、主として「他人のそら似」の排除基準・手段を具体的な資料に基づいて論じ、共通表現検討の有効性について述べていきたい。

人物埴輪表現の検討に際して、まず人物埴輪分類に対して若干の説明をしておきたい。人物埴輪の分類は、後藤守一が基本的な分類を提示（後藤1942）して以降、研究が深化されてこなかった。しかし、市毛勲によって人物埴輪の名称（農夫・武人・貴人など）への評価に対する疑問から、形態と姿態をもとにした分類案が提示され（市毛1991）、さらに塚田良道が①性差、②全身と省略（半身）、③立像と坐像、④服装（および立坐の細分）をもって分類案を提示するに至っている（塚田1992、1996）。塚田の諸論は、今後の人物埴輪研究の基本的な視点・姿勢を示した点で極めて重要である。さて、筆者のいう人物埴輪表現とは、塚田の④服装に内包される検討項目といえ、塚田も独自の観点から服装の分類をおこなっている。しかし、筆者は埴輪の生産と供給先を具体的に描くという立場から、服装の部位（髪形、首飾りなどを含む）ごとの分類をおこなっており、人物埴輪表現の検

討とは、地域性つまり埴輪製作工人集団ごとの表現様式を抽出することを目的としている[1]。そのため、人物埴輪の分類としては、男子、武装男子、盾持ち人、女子の４種類に大別している。

2. 共通表現を認定するための前提

具体的な検討に移る前に、作業の前提を説明しておこう。埴輪製作工人集団独特の表現様式を抽出するためには、生産地である埴輪窯跡および工房跡などを包括した埴輪製作遺跡の把握が必須である。まず、埴輪製作遺跡出土の製品を検討の俎上にあげ、埴輪表現のなかに特徴的といえる要素を抽出する。その際必要なのは、埴輪表現の組み合わせの総体として共通表現を設定することである。

埴輪に表現された各部位は、古墳時代に実際に存在したものであり、けして古墳時代人の想像力によって創出された存在ではない。それは、同時代の中国大陸における鎮墓獣のごとき人と獣を合体させたような形象埴輪が存在しないことや、銅鏡にみられる聖獣や神仙などを形象化した例がないことなどからも首肯されるであろう[2]。また、埼玉県行田市酒巻14号墳出土の馬形埴輪における蛇行状鉄器・旗の形象化は、同市埼玉将軍山古墳出土蛇行状鉄器の存在に呼応するのか否かということもあるが、埴輪製作工人の知識（情報）の正確さを示す例といえる。

このように考えてくると、人物埴輪の服飾なども基本的には実際のそれを形象化しているはずである、との結論に至る。しかしながら、形象埴輪に表現された各部位は少なからず変形されており、例えば、馬形埴輪の杏葉などの複雑な馬具表現は、実際にどのような種類を形象化しているのか不明なものもある（比佐1992）。この変形は、埴輪製作工人（集団）の主体的な造形作業の結果を示すものと考える。それは、埴輪製作が馬具や武具などを保有する階層の人々からの発注によってなされていたならば、あるいは実物を目の前にして形象化がなされていたならば、実物を忠実に再現したものとなってよいはずだからである。ここに、埴輪製作工人集団の特徴（共通表現）を抽出する鍵があると考える。情報の不正確さによってできあがった共通表現は、別の工人集団の製品に偶然でもない限り現れることがない、としてよかろう。同一埴輪製作工人集団の製品には、同じ変形を受けているものが存在するというわけである。

しかし、実物の現存していないものが形象化された場合、どれほどの変形がなされているのかという判断が甚だ困難なことも事実である。また、同時代的に共通する習俗・風俗的な要素は、当然同一の表現となることも予想される。それらを、他人のそら似であるのか、同一埴輪製作工人集団の製作品であるのか判断するには、部位毎に分類された各表現が合致しているか否かで検証すればよいと考える。なぜならば、前述したように同じ習俗・風俗的要素が、別々の埴輪製作工人集団において同じ変形を受けて表現されるということは考えにくいからである。つまり男子埴輪の場合でいうと、被りもの・美豆良（髪形表現を含む）・首飾り・籠手（手甲）・足結・台部（靴・裸足などの表現を含む）などに同一の変形を受けて成立した共通表現が相互に見出せれば、それは同一埴輪製作工人集団の製作品としてよいと考えるわけである。さらに、同一埴輪製作工人集団独特の製作技法（例えば透孔配置の共通性など）で追検証すれば、より補強されるであろう。また、市毛勲によって追求されてきた人物埴輪の彩色方法の違い（市毛1984など）も有効な手段となり得るはずである。

本章の冒頭で述べたように、まず埴輪製作遺跡出土の埴輪で検討しその埴輪製作工人集団固有の共通表現を確定させる。そして、古墳出土埴輪のなかに共通表現を探し、その面的な広がりを抑えていくわけである。しかし、埴輪製作遺跡出土埴輪がはっきりと判明しているのは、残念ながら埼玉県鴻巣市生出塚遺跡のみといっても過言ではない。他の埴輪製作遺跡（窯跡）は、その存在とごく一部の資料が判明しているにとどまっており、埴輪製作遺跡からのアプローチは現状では不可能である。しかし、供給先である各々の古墳出土資料中に共通表現を見出し、その面的な分布を抑えていくことでおのずと製作遺跡の特定もできるはずである。もちろん、胎土・重鉱物分析などの成果を組み合わせていかなければならないことはいうまでもない。

3. 人物埴輪表現における他人のそら似と共通表現の検証

3-1 生出塚埴輪窯跡出土の頭巾状被りものをつけた人物埴輪

生出塚埴輪製作工人集団を特徴づける共通表現の一つとして、人物埴輪の頭巾状被りものがあげられるが、第3章において詳述するが、その大きな特徴として頭巾状被りものをつける人物埴輪には、美豆良（上げ・下げを問わず）が伴わないことがあげられる。以下、

共通表現と考えられる人物埴輪について、他人のそら似であるのか、それとも共通表現として同一埴輪製作工人集団の製作品であるのか、どのようにして認識するのかを説明したい。

実際に、頭巾状被りものが古墳時代においてどれだけ一般的であったかは知る由もないが、関東地域において、頭巾状被りものをつけた男子埴輪は29遺跡35例を数える。出土地は茨城県、埼玉県、群馬県、千葉県、栃木県、東京都に及ぶ。これらの人物埴輪資料の頭巾状かぶりもの以外の諸要素を分類すると以下のようになる。

美豆良の形状をもとにした分類

A類：ボリュームのある左右方向のＬ字形

A’類：板状で左右方向のＬ字形

B類：ボリュームのある前後方向のＬ字形

B’類：板状で前後方向のＬ字形

C類：丸棒先端肥大

D類：頭部側面の孔から出す丸棒先端肥大

E類：細丸棒

E’類：先端が分かれた細丸棒

F類：垂下帯あり

G類：上げ美豆良

H類：逆Ｔ字形

Ｉ類：美豆良なし

首飾りの分類

A類：突帯に円形浮文のみ

A’類：円形浮文のみ

B類：突帯に勾玉あり

B’類：突帯なしで勾玉あり

C類：突帯のみ

D類：竹管文

E類：数珠状

F類：なし

その他にＡＡ、ＡＡ’、Ａ’Ａ’の組み合わせ

この他、後頭部小孔の有無、垂髪の有無、鉢巻状表現の有無についての結果をまとめたものが、表１である。

これらのうち、生出塚埴輪製作工人集団の製作品として認識したのは、8・11・13・14・15～19・25・26・27・31・32である。まず、生出塚埴輪窯跡出土の5点（山崎1987a・b、1994）の特徴としては、美豆良はなく、首飾りは円形浮文のみか、首飾りなしであり、後頭部の小孔はあるものとないものがある。垂髪は双脚の人物になく、半身像にはあるようである。ただし、残存状況によって不明のものもあることから、半身像でも後頭部の小孔や垂髪がない個体がある可能性もある。鉢巻の表現をもつものは出土していない(図1－1～5)。

以上が、生出塚埴輪窯跡出土資料の特徴であるが、その他の古墳出土品が他人のそら似ではなく、共通表現をもつ生出塚埴輪製作工人集団の製作品であることを順次検証していこう。

3-2　古墳出土資料にみる共通表現の認識

行田市南河原町出土資料（表1－6、図1－6：東京国立博物館1986）

本例は左肩より上のみの資料である。美豆良はなく、首飾りは円形浮文を貼りつけるものである。後頭部の小孔と垂髪があり、いずれも生出塚埴輪窯跡出土資料と共通した特徴を有する。出土した古墳などの状況は不明であるが、生出塚から出土している頭巾状被りものをつけた人物埴輪と異なるところはなく、共通表現として認識できるであろう。

東松山市弁天塚古墳出土資料（表1－8、図1－9：金井塚1984）

本例は右肩より上のみの資料である。美豆良はなく、首飾りは円形浮文を貼りつけるものである。未見であり、後頭部の状況は不明だが、何よりも両目の形に特徴がある。やや垂れ目になっており、生出塚埴輪窯跡出土の資料に類例が数多く認められる。生出塚から出土している頭巾状被りものをつけた人物埴輪と異なる表現はなく、共通表現として認識できる資料と考える。

東松山市三千塚古墳群出土資料（表1－9：金井塚1994）

本例は写真のみ現存するもので、現在所在不明の資料である。美豆良はなく、首飾りは円形浮文を貼りつけるものである。後頭部の状況は不明であるが、生出塚から出土している頭巾状被りものをつけた人物埴輪と異なるところはなく、共通表現として認識できるで

あろう。弁天塚古墳も三千塚古墳群中の古墳であり、その他にも双脚人物像で生出塚工人集団の製作品と思われる資料も存在したようである（金井塚1994：55頁-26）。

川越市南大塚4号墳出土資料（表1－11、図1－7：田中ほか1988）

本例は頭部のみの資料である。美豆良はなく、後頭部の小孔と垂髪が存在する。いずれも生出塚埴輪窯跡出土資料と共通した特徴を有する。また、本古墳から出土している円筒埴輪についても、底部調整や最下段突帯が高さの約2分の1の位置にくる点、内面のハケメ調整など生出塚埴輪窯跡出土資料と共通する特徴を有することからも補強されよう。

行田市白山2号墳出土資料（表1－13・14、図1－8・10：門脇ほか1994）

両例ともに同一の表現であり、美豆良はなく、首飾りは円形浮文を貼りつけるものである。後頭部には小孔があり、その直下から垂髪が表現されている。生出塚から出土している頭巾状被りものをつけた人物埴輪と異なる表現はなく、共通表現として認識できる資料と考える。また、本古墳から出土している円筒埴輪についても、南大塚4号墳例と同様の特徴を有しており、生出塚から供給されたものと考えられる。

千葉県市原市山倉1号墳出土資料（表1－25・26・27、図2－1・2：米田1976、小橋ほか2004）

双脚像の人物埴輪（図2－1）は、美豆良がなく、首飾りは円形浮文を貼りつけるものである。後頭部に小孔はあるが、垂髪がなく、なおかつ鉢巻状の突帯が表現されている。以上の特徴のうち、鉢巻状の突帯は生出塚埴輪窯跡からは出土していない。しかし、生出塚出土の双脚人物像には山倉例と同様の位置に赤彩を施している。なおかつ、生出塚の双脚人物像も後頭部に小孔はあるが、垂髪がない。つまり、山倉1号墳例が生出塚例と極めて近似すると考えてよく、共通表現として認識できる資料である。

半身像の2体はほぼ同形態で、両例とも美豆良がなく、首飾りは円形浮文を貼りつけるものである（図2－2）。後頭部に小孔はあるが、垂髪がない。半身像で垂髪がないという特徴は、今のところ生出塚埴輪窯跡では明確に確認できないが、後頭部を欠損している資料に同様のものがある可能性もあろう。しかし、垂髪以外の特徴は生出塚例と共通することから、共通表現として認識した。また、本古墳から出土している円筒埴輪についても、南大塚4号墳例と同様の特徴を有しており、生出塚から供給されたものと考えられる。

東京都北区赤羽台4号墳出土資料（表1－31：谷口ほか1997）

本例は左手を欠損しているほかは完存している資料である。美豆良はなく、首飾りは円

形浮文を貼りつけるものである。後頭部に小孔があり、その直下から垂髪が表現されている。生出塚から出土している頭巾状被りものをつけた人物埴輪と異なる表現はなく、共通表現として認識できる資料と考える。また、本古墳から出土している円筒埴輪についても、生出塚埴輪窯跡から出土しているものと調整技法など共通しており、生出塚から供給されたものと考えられる。

同赤羽台4号墳出土資料（表1－31：谷口ほか1997）

本例は頭部のみの資料である。美豆良はなく、首飾りは不明、後頭部孔には小孔があり、その直下から垂髪が表現されている。口が笑っているような切り方であり、生出塚から出土している頭巾状被りものをつけた人物埴輪とはやや異なる表情ではあるが、もう一個体と胎土なども共通しており、共通表現として認識できる資料と考える[③]。

以上、筆者が生出塚埴輪製作工人集団の共通表現をもつ頭巾状被りものをつける人物埴輪として認識した資料を検証した。頭巾状被りものをつける人物埴輪としては、他に16例が存在する。筆者は、一部を除いて生出塚埴輪製作工人による製作品ではなく、他人のそら似であると考えている。次にはその根拠を具体的に示していこうと思う。

3-3　他人のそら似の諸例

茨城県取手市大日仏島出土資料（表1－1、図3－１：東京国立博物館1980）

本例は胸部から顔面部までの資料である。被りものの上端は欠失しているが、頭巾状被りものをつける人物埴輪となることは疑う余地がない。美豆良の剥離痕があり、首飾りは突帯のみを巡らすものである。本例が他人のそら似であると認識した理由は、まず、頭巾状被りものがかなり幅広のものとなる可能性が高いこと、美豆良をもつこと、首飾りが突帯として表現されていることなどである。いずれも生出塚埴輪窯跡出土資料にはない表現であり、共通表現として認識すべきものではないと判断した。

茨城県行方市三昧塚古墳出土資料（表1－2、図3－2：斉藤ほか1960）

本例は首から顔面部にかけての資料である。部分的に欠失しているところもあるが、頭巾状被りものをつける人物埴輪である。美豆良はなく、首飾りは不明、後頭部孔・垂髪・鉢巻はない。本例が他人のそら似であると認識した理由は、後頭部孔と垂髪の両方がないという特徴と、同時に出土している腕が中空となっている点である。生出塚埴輪窯跡から出土している各種人物埴輪の腕の作りはすべて中実であり、積極的な要素ではないが、総

合すると共通表現として認識すべきものではないと判断した。

茨城県那珂市畑中古墳群出土資料（表1－3、図3－3：那珂町史編纂委員会1988）

本例は頭部のみの資料である。美豆良は欠失しているが、剥離痕からその存在が確認できる。首飾りは不明であり、後頭部孔・垂髪はなく、後頭部で交差する鉢巻の表現がある。本例が他人のそら似であると認識した理由は、まず、美豆良の表現があること、生出塚埴輪窯跡出土資料には鉢巻の表現が伴わないこと、さらに後頭部孔・垂髪の表現がないこと、である。つまり、どれをとっても生出塚埴輪窯跡出土資料と共通する表現がないわけである。類似するのは、ただ一点頭巾状被りものということだけである。よって、他人のそら似であると判断される。

茨城県那珂郡東海村石神小学校出土資料（表1－4、図3－5：大塚1974）

本例は頭部のみの資料である。美豆良はなく、首飾りは不明、後頭部孔・垂髪はなく、鉢巻の表現がある。本例が他人のそら似であると認識した理由は、まず、生出塚埴輪窯跡出土資料には鉢巻の表現が伴わないこと、さらに後頭部孔・垂髪の表現がないこと、である。さらに、頭巾状被りものを表現していると考えられるが、その表現の前面が二股（V字状）を呈している。これは、生出塚埴輪窯跡出土資料にまったく認められない特徴であり、総合すると他人のそら似であると判断される。

埼玉県大里郡寄居町小前田9号墳出土資料（表1－5、図3－9：瀧瀬1986）

本例は台部を欠失しているほかは完存している資料である。美豆良は細い丸棒であり、首飾りは円形浮文を貼りつけるもので、後頭部孔・垂髪・鉢巻はない。本例が他人のそら似であると認識した理由は、まず、美豆良の表現があること、後頭部孔・垂髪の表現がないこと、である。また、同古墳から出土している女子埴輪の島田髷における中空技法は、群馬県域の埴輪製作工人集団との関係が想定される（第3章参照）。よって、本例は他人のそら似であると判断される。

埼玉県比企郡嵐山町古里古墳群出土資料（表1－7、図3－4：若松1988）

本例は胸部より上のみの資料である。美豆良は欠失しているが、おそらく細い丸棒となろう。首飾りは円形浮文を貼りつけるもので、後頭部孔・垂髪・鉢巻はない。本例が他人のそら似であると認識した理由は、美豆良の表現があることである。生出塚埴輪窯跡出土資料では、美豆良は頭巾状被りものの人物埴輪には伴わないことから、他人のそら似であると判断される。

埼玉県本庄市風洞出土資料（表1－10：金井塚1994）

本例は復原部分も多いが、完存している資料である。高田儀三郎が復原作業をおこなったものであり、細い丸棒の美豆良をつけ、首飾りは円形浮文を貼りつけている。後頭部の状況は未見のため未詳であるが、鉢巻の表現がある。本例が他人のそら似であると認識した理由は、美豆良の表現があること、鉢巻があること、である。生出塚埴輪窯跡出土資料では、美豆良は頭巾状被りものの人物埴輪には伴わず、鉢巻の表現もないことから、他人のそら似であると判断される。

埼玉県桶川市若宮出土資料（表1－20、図3－8：東京国立博物館1986）

本例は両腕を欠失しているほかは完存している資料である。美豆良は欠損しているが、おそらく細い丸棒となろう。首飾りはなく、後頭部孔・垂髪・鉢巻はない。本例が他人のそら似であると認識した理由は、美豆良の表現があること、後頭部孔・垂髪の表現がないこと、である。腰帯は、生出塚埴輪窯跡出土資料には存在しない特徴であることからも、他人のそら似であると判断される。

群馬県高崎市観音山古墳出土資料（表1－21、図3－6：梅沢ほか1979・1998）

本例は頭部のみの資料である。美豆良はなく、首飾りは不明である。後頭部孔・垂髪は存在せず、斜行する線刻を施した鉢巻がある。本例が他人のそら似であると認識した理由は、後頭部孔・垂髪の表現がないこと、鉢巻があること、そして、頭巾状被りものに模様として線刻が施されていることである。頭巾状被りものに線刻が施されている点は、生出塚埴輪窯跡出土資料には存在しない特徴であることや、背負いの靫が本例に伴うことなどから、他人のそら似であると判断される。なお、本例と後述の今井神社2号墳出土資料は同一埴輪製作工人集団の製作品と考えられる。

群馬県藤岡市三本木出土資料（表1－22、図3－12：梅沢ほか1979）

本例は足結より下および右腕を欠失しているほかは、ほぼ完存する資料である。美豆良はなく、首飾りは円形浮文を貼りつけている。後頭部孔・垂髪はなく、幅広の鉢巻がある。本例が他人のそら似であると認識した理由は、後頭部孔・垂髪の表現がないこと、鉢巻があること、である。また、頭巾状被りものも、両側が開口する形状であることなどからも、他人のそら似であると判断される。

群馬県前橋市今井神社2号墳出土資料（表1－23、図3－11：石坂ほか1986）

本例は欠失している部分も多いが、ほぼ完形に復元された資料である。美豆良はなく、

首飾りは円形浮文を貼りつけている。後頭部孔・垂髪は存在せず、斜行する線刻を施した鉢巻がある。本例が他人のそら似であると認識した理由は、後頭部孔・垂髪の表現がないこと、鉢巻があること、そして、頭巾状被りものに模様として線刻が施されていることである。これらの諸特徴は前述の通り、観音山古墳出土資料とほとんど同一の表現であり、本例も靭を背負っている。これらのことから、生出塚埴輪製作工人集団の製作品ではなく、他人のそら似であると判断される。

群馬県太田市オクマン山古墳出土資料（表1－24、図3－7：梅沢ほか1979）

本例は欠失している部分のまったくない完形品である。美豆良は上げ美豆良、首飾りはない。後頭部孔・垂髪は存在せず、鍬を右肩に担ぐ姿態をとる。本例が他人のそら似であると認識した理由は、まず、上げ美豆良があること、後頭部孔・垂髪の表現がないこと、である。生出塚埴輪窯跡出土資料では、上げ美豆良は頭巾状被りものの人物埴輪には伴わないことや、頭巾状被りものの形態も両端が上方にやや突出する形態をもつことから、他人のそら似であると判断される。

千葉県流山市東深井7号墳出土資料（表1－28、図3－10：流山市立博物館1985、城倉2006a）

本例は頭部のみの資料である。美豆良はなく、首飾りは突帯にやや垂れた円形浮文を貼りつけている。後頭部孔・垂髪・鉢巻は存在しない。本例が他人のそら似であると認識した理由は、首飾りの表現で突帯と円形浮文を併用していること、そして、頭巾状被りものの上端が非常に大きく開いていること、である。両方の特徴は生出塚埴輪窯跡出土資料には認められないものであり、他人のそら似であると判断される。

同東深井7号墳出土資料（表1－29、図3－13：轟1973、塚田1995、城倉2006a）

本例は復元部分もあるが、ほぼ完形に復元されている双脚人物像である。美豆良は下端が二股になった細い丸棒であり、首飾りは突帯に円形浮文を貼りつけている。後頭部孔・垂髪・鉢巻はない。本例が他人のそら似であると認識した理由は、まず、美豆良があること、後頭部孔・垂髪の表現がないこと、頭巾状被りものの形態の後ろ側までなく前側だけとなっていること、である。筆者のいう頭巾状被りものとはならない可能性もあるので、比較対象外とした方がよいかもしれない。ちなみに、塚田良道は本例の右手に塵尾を持つという可能性を指摘している（塚田1995）。

以上、他人のそら似として認識すべき資料の特徴を述べてきたが、その他に他人のそら

似とすべきか否か態度を保留している資料を述べることにする。

3-4 共通表現の可能性がある例

埼玉県行田市酒巻14号墳出土資料（表1－12、図4－１：中島ほか1988）

本例は馬形埴輪の側に立つ馬曳きの人物埴輪である。美豆良、首飾り、後頭部孔、垂髪、鉢巻のいずれもなく、極めて簡素な作りである。本例を共通表現であるのか、他人のそら似であるのか保留した理由は、頭巾状被りものの両端が突出するもので、後頭部孔・垂髪などがないという他人のそら似とすべき表現であるのだが、一方で本古墳から出土している筒袖の人物埴輪と山倉1号墳出土の筒袖の人物埴輪が共通しており、生出塚埴輪製作工人集団との関係がある製作品と考えることが素直な見解である。生出塚埴輪窯跡で本例のような埴輪は出土していないが、ここでは共通表現である可能性を指摘しておきたい④。

栃木県足利市丸木古墳群出土資料（表1－30、図4－2：足利市文化財総合調査団1982）

本例は頭部のみの資料である。美豆良はなく、首飾りは不明、後頭部孔、垂髪、鉢巻の表現はない。本例を共通表現であるのか、他人のそら似であるのか保留した理由は、後頭部孔・垂髪の表現が存在しないということ、頭巾状被りものから顎部までの長さが極めて寸詰まりのつくりであること、である。生出塚埴輪窯跡出土資料に、これほどまで寸詰まりのものはなく、他人のそら似である可能性がある。しかし、前述したとおり生出塚埴輪製作工人集団の製作品でも頭部孔がないもの、垂髪がないものもあり、他人のそら似とする積極的根拠も提示できない。橋本博文は色調や焼成などの特徴から、生出塚埴輪製作工人集団の製作品である可能性を想定しているが（橋本1996：3頁）、ひとまず他人のそら似である可能性を指摘しておくことにする。

4．共通表現検討の有効性とその応用

ここまで、共通表現の認定（他人のそら似の排除基準・手段）方法を、具体的な資料を用いて検討してきた。どちらにすべきか態度を保留した資料も存在したが、それ以外の資料の基準は理解して頂けたと思う。それでは、これらの結果をもとにして、埴輪の生産と供給の関係をどのように描けるのか、考察していきたい。

筆者は関東地方における古墳時代後期（6世紀）の埴輪の生産と供給について、生出塚埴

輪製作工人集団の製作品や茨城県東茨城郡茨城町小幡北山埴輪製作工人集団の製作品などの分布域をもとに、おおよそ50km内外が安定供給範囲であると考えている（第5章参照）。そして、大量供給先である大規模古墳（群）の存在が、安定供給を支えていたと考えている。つまり、そのような大規模古墳（群）の被葬者が後ろ盾となって、埴輪製作工人集団の製作活動が成り立っていたのである。また、その範囲を超えて点的に分布する共通表現の埴輪の存在もある。

筆者は、埴輪生産が埴輪製作工人集団の完全独立のもとになされていたとは考えていない。埴輪製作そのものは、生産量とそれにみあう大量供給先という関係があって、はじめて成り立つもので、けして埴輪製作工人集団の独断での生産はあり得ないと考えている。つまり、埴輪製作工人集団を統轄する首長（大規模古墳の被葬者）の存在が不可欠なのである。生出塚埴輪製作工人集団の場合は埼玉古墳群の被葬者達であり、小幡北山埴輪製作工人集団の場合は玉里古墳群の被葬者達であり、群馬県藤岡市本郷埴輪製作工人集団の場合は前橋市大室古墳群や高崎市観音山古墳の被葬者達である。もちろん、比較的短期間のうちに埴輪の生産をごく小規模におこなっている埴輪製作工人集団の存在を否定するものではない。例えば、群馬県太田市成塚住宅団地遺跡Ｂ工区における3基の埴輪窯（木暮ほか1990)や富岡市下高瀬上之原埴輪窯における2基の埴輪窯(新井ほか1994)などについては、周辺の後期群集墳に供給するために操業がおこなわれていたと考えることができるし、千葉県成田市公津原埴輪窯（1～3基）は、同市船塚古墳に樹立する埴輪を生産していたことが判明している（高梨1994）。特に前二者は、その存在基盤が中小首長（群集墳の被葬者）にあるわけだが、これとてもより上位の首長（大規模古墳の造営者）の傘下に組み込まれていたと考えたいのである。例えば、埼玉県鴻巣市馬室埴輪窯（埼玉県教育委員会1978）、東松山市桜山埴輪窯（水村ほか1982）、深谷市割山埴輪窯跡（深谷市割山遺跡調査会1981）はいずれも八つ手状の窯配置をとっており[5]、これは生出塚埴輪窯跡との密接な関係を示していると想定され（第2章参照）、ひいては埼玉古墳群を後ろ盾とする埴輪製作工人集団間の構図として理解できるのではなかろうか。今のところ、馬室埴輪窯と生出塚埴輪窯跡の円筒埴輪にのみ技法上の特徴が共通すると判明しているが（山崎1993）、今後各種形象埴輪の共通表現検討をおこなっていけば、他の埴輪窯の製作品と生出塚埴輪製作工人集団による製作品の間に共通点が見出せる可能性は高いと考える。

共通表現とは、上述の首長達の要請と、埴輪製作工人集団の主体性が生み出した結果で

ある。埴輪製作工人集団は共通表現をもつ人物埴輪をいくつも製作しておき、各地の首長達へと供給していた、つまり、作り置きがなされていた可能性もあるのでなかろうか。例えば、馬形埴輪における方形の粘土を胸繋・尻繋に連結させただけの杏葉表現を検討した田中正夫の研究（田中1991）は極めて示唆的である。これなどは、同一の表現をもつ馬形埴輪が複数あり、その中の2体が別々の古墳に供給されたことを示しているのであり、それは各中小首長が同一の表現の馬形埴輪を要請したのではなく、もともと作り置きされていた馬形埴輪を選択した結果と理解するのが、穏当な意見と考えられるのではなかろうか。

その他の形象埴輪についても、同様に共通表現を応用して検討する余地はある。例えば家形埴輪や靫形埴輪などの器財埴輪は、その表現を分類し共通表現を見出すことが可能であると考えている。

註

⑪ 本章の内容の一部は、1995年10月28日の土曜考古学研究会例会、1997年12月7日の葛飾区郷土と天文の博物館：地域史フォーラム「6世紀における房総と武蔵の交流と地域性」において口頭発表している。発表会場で、的確なご意見を頂いた方々に深く感謝したい。

⑫ 近年、和歌山県和歌山市大日山35号墳から前後に顔の表現がある両面人物埴輪が出土した（和歌山県立紀伊風土記の丘2011）。全国各地で出土した埴輪の中で同様の資料は皆無であり、どのように理解すべきか判断に苦しむものである。

⑬ 赤羽台4号墳出土資料の実見に際しては、葛飾区郷土と天文の博物館での特別展において谷口榮氏に便宜をはかっていただいた。その後、北区飛鳥山博物館において鈴木直人氏に便宜をはかっていただき、再度実見した。

⑭ 酒巻14号墳の力士埴輪に関連して、太田博之は同古墳の生産地を埼玉県比企郡吉見町和名埴輪窯で生産された可能性を指摘している（太田2010）。胎土の特徴なども共通していることから、その可能性は高いと思われる。生出塚埴輪製作工人集団と和名埴輪製作工人集団とは、情報を共有していた可能性もある。

⑮ 八つ手状の窯配置については、山崎武も相互の類似性をすでに指摘している。ただし、森田克行の質問に答えて、その類似性が積極的に地域性としてとらえられるか否かは、はっきりわからないと述べている（山崎1993：pp.61-62）。

図版引用文献

図1－1　山崎1987a

2　山崎1987b

3　山崎1987b

4　山崎1987b

5　山崎1987b

6　東京国立博物館1986　44－2を写真トレース

7　田中ほか1988

8　門脇ほか1994

9　金井塚1984　第18図を写真トレース

10　門脇ほか1994

図2－1　米田1976

2　米田1976

図3－1　東京国立博物館1980　28－7を写真トレース

2　斉藤ほか1960

3　那珂町史編纂委員会1988

4　若松1988　16を写真トレース

5　大塚1974　図版134を写真トレース

6　梅沢ほか1979　38を写真トレース

7　梅沢ほか1979　88を写真トレース

8　東京国立博物館1986　6－3を写真トレース

9　瀧瀬1986

10　城倉2006a

11　石坂ほか1986

12　梅沢ほか1979　85を写真トレース

13　城倉2006a

図4－1　中島ほか1988

2　足利市文化財総合調査団1982

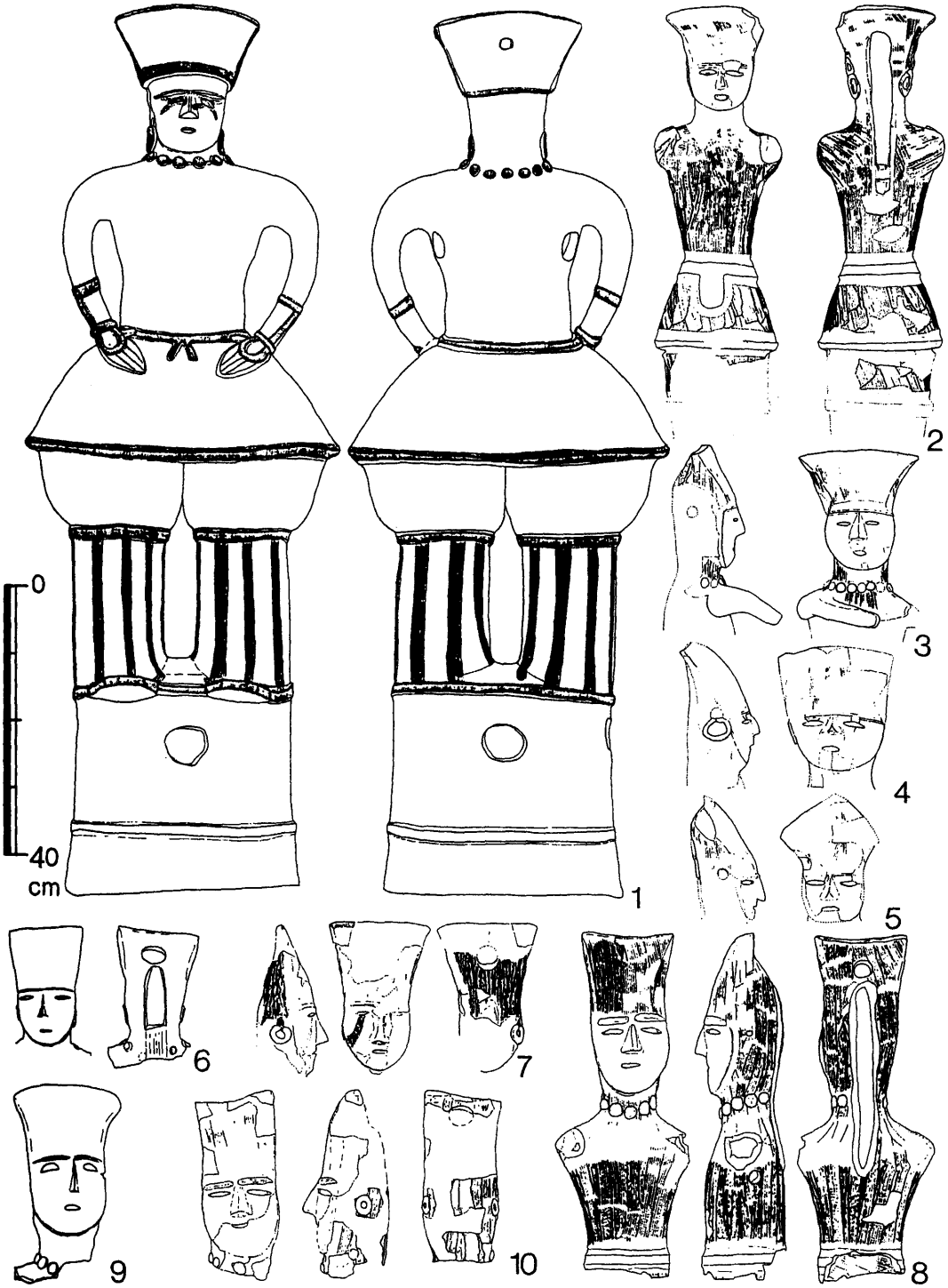


図１　共通表現の人物埴輪１

1.生出塚 14・15 号窯　2.生出塚 19 号窯　3.生出塚 24 号窯　4.生出塚埴輪捨場　5.生出塚グリッド出土
6.南河原町　7.南大塚 4 号墳　8・10.白山 2 号墳　9.弁天塚古墳

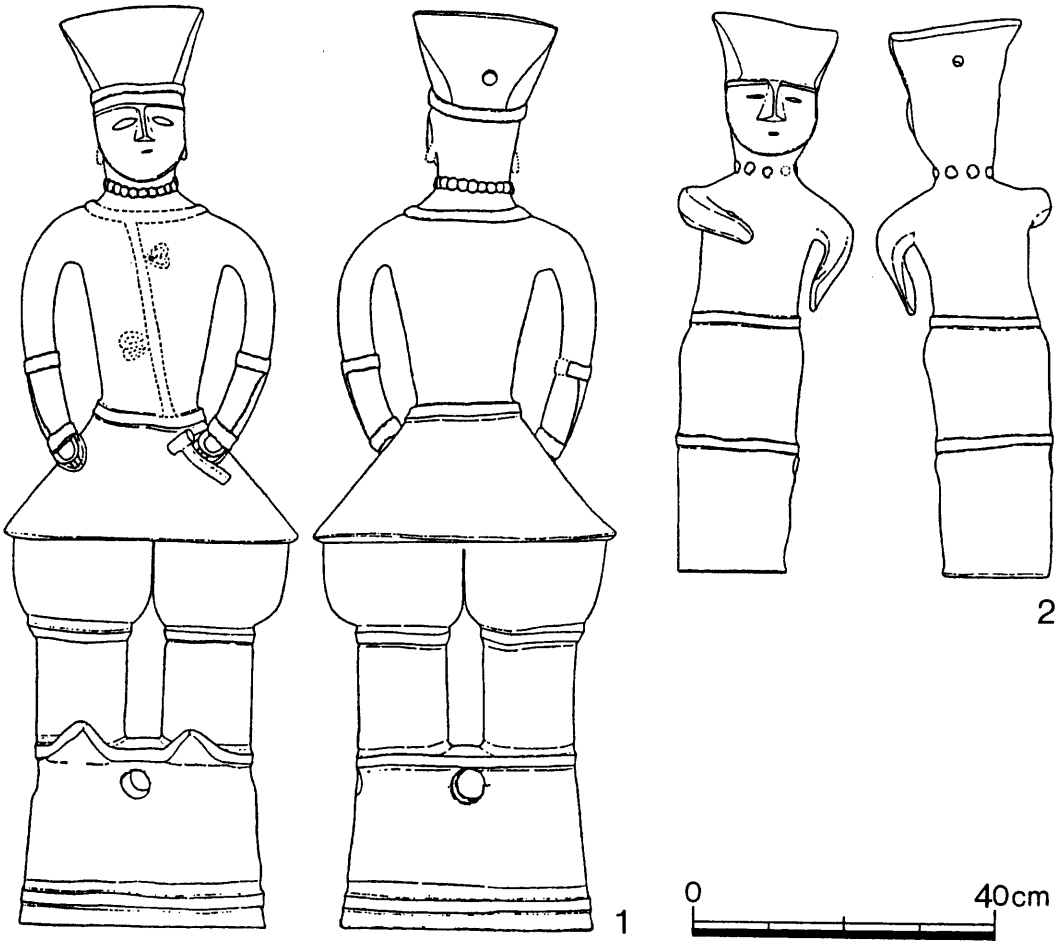


図2　共通表現の人物埴輪2

1・2.山倉1号墳

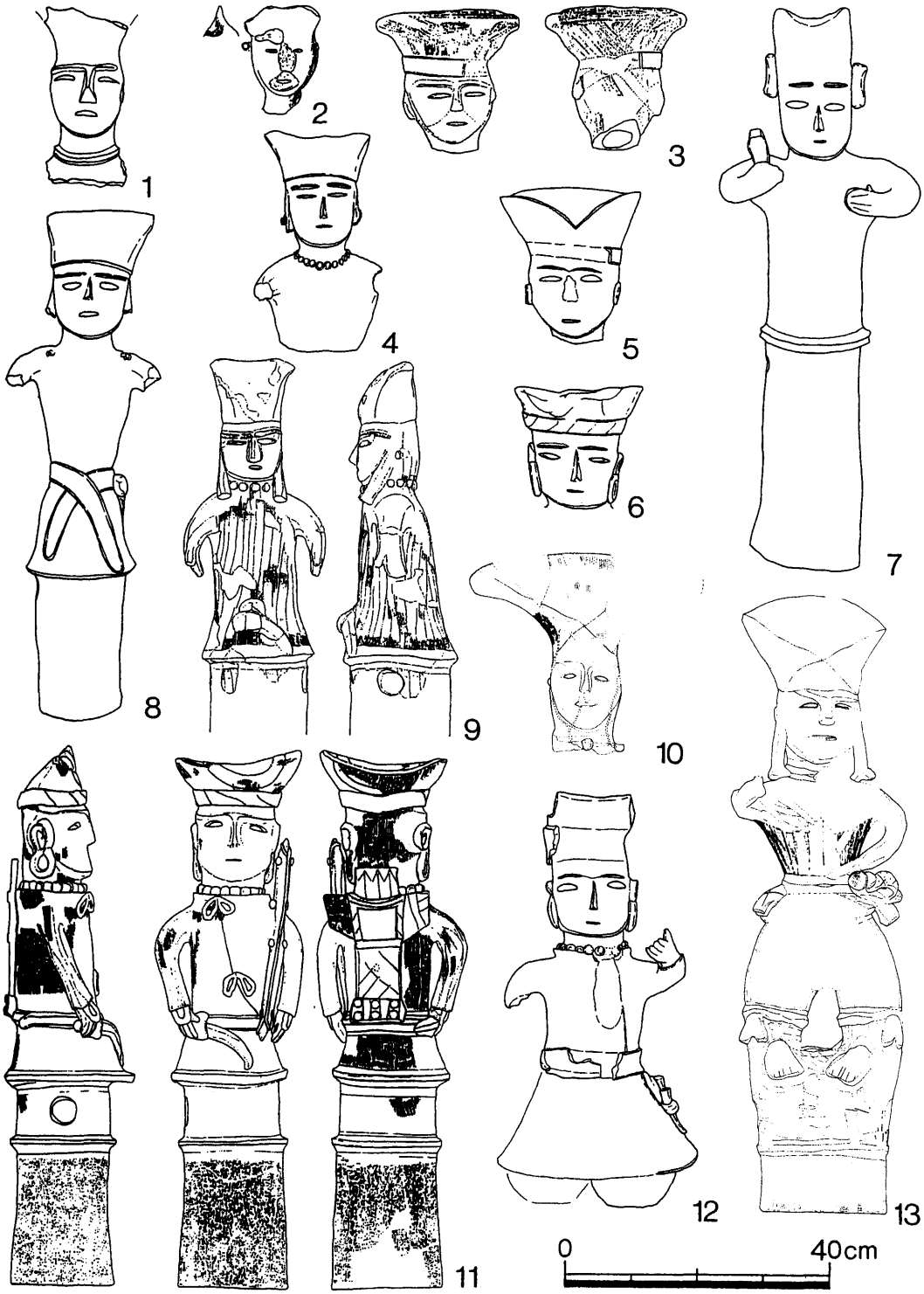


図3　他人のそら似の人物埴輪

1.大日仏島　2.三昧塚古墳　3.畑中古墳群　4.古里古墳群　5.石神小学校　6.観音山古墳　7.オクマン山古墳　8.若宮　9.小前田9号墳　10・13.東深井7号墳　11.今井神社2号墳　12.三本木

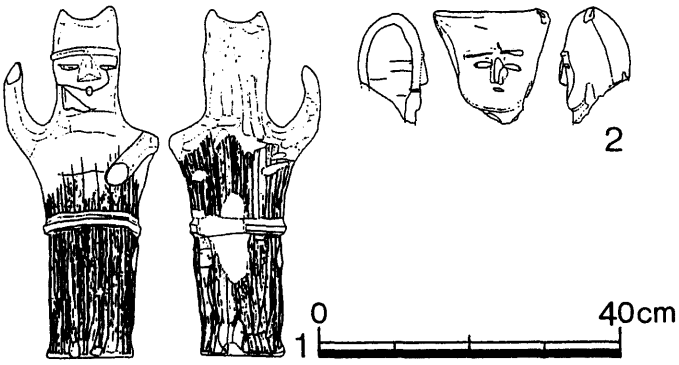


図４　共通表現の可能性がある人物埴輪

1.酒巻 14 号墳　2.丸木古墳群

表１　頭巾状被りものの人物埴輪類例一覧

	古墳	美豆良	首飾り	後頭部孔	垂髪	鉢巻
1	茨城県取手市大日仏島	あり	C	×	×	×
2	行方市三昧塚古墳	I	E	×	×	×
3	那珂市畑中古墳群	あり	?	×	×	○
4	那珂郡東海村石神小学校例（前二股）	E	?	×	×	○
5	埼玉県大里郡寄居町小前田９号墳	E	A’	×	×	×
6	行田市南河原町	I	A’	○	○	×
7	比企郡嵐山町古里古墳群	E	A’	×	×	×
8	東松山市弁天塚古墳	I	A’	?	?	×
9	三千塚古墳群	I	A’	?	?	×
10	本庄市風洞	E	A’	?	?	×
11	川越市南大塚４号墳	I	?	○	○	×
12	行田市酒巻14号墳（両端突出）	I	E	×	×	×
13	白山２号墳	I	A’	○	○	×
14	白山２号墳	I	A’	○	○	×
15	鴻巣市生出塚14・15号窯（双脚人物）	I	A’	○	×	×
16	19号窯	I	E	×	○	×
17	埴輪捨場	I	?	?	?	×
18	24号窯	I	A’	?	?	×
19	グリッド出土（五角形状）	I	?	×	○	×
20	白山２号墳	I	A’	○	○	×
21	白山２号墳	I	A’	○	○	×
22	桶川市若宮	E	E	×	×	×
23	群馬県高崎市観音山古墳（線刻あり）	I	?	×	×	○
24	藤岡市三本木	I	A’	×	×	○
25	前橋市今井神社２号墳（線刻あり）	I	A’	×	×	○
26	白山２号墳	I	A’	○	○	×
27	太田市オクマン山古墳（両端突出）	G	E	×	×	×
28	千葉県市原市山倉１号墳(双脚人物)	I	A’	○	×	○
29	山倉１号墳	I	A’	○	×	×
30	山倉１号墳	I	A’		×	×
31	流山市東深井７号墳	I	A’	×	×	×
32	東深井７号墳	E’	E	×	×	×
33	栃木県足利市丸木古墳群	I	?	×	×	×
34	東京都北区赤羽台４号墳	I	A’	○	○	×
35	赤羽台４号墳	I	?	○	○	×

A　L字形左右方向（ボリュームのある形状）
A’ L字形左右方向（板状）
B　L字形前後方向（ボリュームのある形状）
B’ L字形前後方向（板状）
C　丸棒先端肥大
D　頭部側面の孔から出し，丸棒先端肥大
E　細い丸棒
E’ 細い丸棒（先端を分ける）
F　垂下帯付き
G　上げ美豆良
H　逆T字形
I　美豆良なし

第2章　人物埴輪表現の地域性

－双脚人物像の脚部の検討－

1. 問題の所在

前章で人物埴輪の共通表現検討の有効性を論じ、埼玉県鴻巣市生出塚産埴輪の特徴の抽出を試みた。本章では、関東地方の人物埴輪について地域性の抽出を行い、埴輪製作工人集団の動向に迫りたい。具体的には、双脚人物埴輪の脚部と台部との接合方法をとりあげ、その分類と変遷過程を明らかにしたい。人物埴輪はその一つ一つが極めて特色のあるものであり、着衣の表現や冠帽などでは地域色を抽出しにくく、さながら一古墳一型式の様相を呈する。しかし、双脚人物埴輪①の脚部と台部との接合方法は、比較的変差の少ない部位であり、着衣や冠帽などのような後からの付加要素がなく、仕上がりの様相から製作技術を検討するには適していると考えられる。なお、場合によってはその他の要素も考慮しながら論を進めていきたい。

2. 脚部の属性抽出と分類

双脚人物埴輪の脚部には、人物像を乗せる台部も存在する。よって、属性抽出をする場合、a．脚部の足結、b．履、c．台部の3点に的を絞り小論を進めていく。

足結と履と台部を検討するということは、その資料が全身像（双脚）でなくてはならない。半身像のものは検討資料からは除外されることになる。また、弾琴像のような倚座像やあぐらをかく胡座像のような全身像も存在する。足結の検討には、倚座像・胡座像も含むことができるが、履や台部の形状の検討には不都合が生じるため除外した。

2-1　足結の分類（図1）

足結とは、裾丈の調節や足を動きやすくする目的でズボン状の着衣を膝上で縛りあげたものであり、双脚人物像の多くにみられる表現である。さらに、上半身が多くの場合体に密着したものになっているのに対して、このズボン状の着衣は極めてゆったりと表現されており、足結で結んでいたとしても歩きやすいものではなく、むしろ「ゆったりと仕立てられた形は、乗馬のために配慮されている」とした亀井正道の見解は極めて的確なものと

いえよう（亀井 1966)。古墳の埋葬施設などからの実物としては、出土例が存在しないことから、有機質製品であったことが予想される。

足結の分類は以下の通りで、足結を粘土紐によってどのように表現しているかを考慮した。

a類：突帯のみ

b類：結び紐あり

c類：鈴付き

d類：なし

a類の突帯のみとは、粘土紐を脚周りに一周させたものである。b類の結び紐ありとは、a類の突帯に結び紐が垂れている表現を付加させたものである。c類の鈴付きとは、b類の垂れている結び紐の先端に鈴の表現を付加させたものである。d類のなしとは、足結の表現を持たないものである。以上の分類を各県ごとにまとめたのが表1である。

表1の結果から、おおむねa類とb類に集中することがわかる。県別にみてみると、埼玉県・千葉県はa類が多い。また、群馬県もa類が多いがb類も相当数存在する。しかし、これらはすべて近差であり今後の出土資料数の増加によっては逆転することもあるだろう。それに対して茨城県はb類が多くa類が少ない。これらのことから、ある程度の地域的偏りは存在しそうである。他地域に関しては、資料の制約上数量的な特徴を抽出するまでには至らない。

2-2 履の分類（図2）

履（靴）はその表現方法に、最も埴輪製作工人集団の特色が表れるものと考えられる。なぜなら、後述の分類要素にみられるように、台部の形状とくにその天井の構造に左右されるものだからである。また、古墳の埋葬施設などから出土するものとして、飾履や下駄、木沓などが存在するが、人物埴輪の履表現からそれらを判別することは極めて難しい。よって、履の分類基準は天井構造をも含めた真横からみたときの形態から行った。

a類：台部に貼りつける（前のめり）

b類：ほぼ水平の台部に貼りつける

c類：台部から突出（履は平）

d類：台部から突出（履は厚）

e類：なし（台部なしを含む）

a類の台部に貼りつけるものとは、ドーム状の台部の天井部分に履を貼りつけ、履先が下方を向いているものである。a類には裸足表現のものも存在する。b類のほぼ水平の台部に貼りつけるものとは、台部の天井が平らでその上に履を乗せており、若干履先が突出するものも含まれる。c類の台部から突出し履が平なものとは、b類と同様のほぼ平らな天井を作り、その天井から前方に張り出す形で板状を呈する履を表現しているものである。d類の台部から突出し履が厚いものとは、c類と同様な天井構造をもち、その履表現に板状ではなく、粘土塊を用いているものである。d類には裸足表現のものも存在する。以上の分類を各県ごとにまとめたのが表2である。

表2の結果から、おおむねa類とc類に集中することが分かる。県別にみてみると、茨城県は圧倒的にa類が多く、それに対して埼玉県ではc類が多い。群馬県ではa類とc類の両方が相当数存在する。神奈川県では4例すべてがa類である。その他に千葉県ではe類が8例存在しており、この内山武郡横芝光町小川台5号墳のものは男子・武装男子ともに台部すら存在しない。他地域ではまったく類例のないものであり、唯一福島県西白河郡泉崎村原山1号墳（福島県教育委員会 1982)に認められるが、両者をつなぐ積極的な共通要素は他に存しないので共通性のみを指摘しておく。以上のように履の表現方法にもある程度の地域的偏りは存在しそうである。

2-3 台部の分類（図3）

台部は前述した履の表現方法と密接に関連したものであり、特にその天井の構造は履の分類の主たる要素の一つである。よって、ここでは台部の断面形をその分類基準とした。

a類：円形

b類：楕円形

c類：方形

d類：なし

以上の分類を各県ごとにまとめたものが表3である。その結果から、おおむねa類とb類に集中することが分かる。県別にみてみると、茨城県では圧倒的にa類に集中し、僅かにb類が1例、c類が2例である。埼玉県ではb類が最も多く、次いでa類となる。群馬県ではa類が最も多く、次いでc類、b類と続く。千葉県ではa類とb類がほぼ同数存在し、他に前述した台部をもたないd類がある。以上のように台部にもある程度の地域的偏りは存在しそうである。

3. 各種要素の分布

以上みてきたように、各要素ごとに数量的な地域的偏差の存在が判明した。これらの諸要素を資料ごとの一覧表にまとめたものが表 4 である。一覧表をまとめるにあたっては、男子と武装男子にわけて記載した。それでは、それらの地域的偏差が、小地域のなかでどのように分布するのだろうか。さらに、その分布状況から地域性を求めてみたい。

3-1 足結表現の分布

a 類から d 類はどのように分布するのだろうか。それを示したものが図 4 である。各県ごとにその様相をみてみると、茨城県ではまんべんなく b 類が分布することが分かる。また、上半身と下半身が分割された別造り技法をもつ人物埴輪に関しては、b 類と d 類がその特徴としてあげられる。栃木県真岡市鶏塚古墳の武装男子も d 類であり、両者の関係は以前から指摘されているが、さらにその意を強くするものであろう。しかし、水戸市北屋敷 2 号墳出土の別造り技法をもつ人物埴輪には a 類と b 類、d 類が混在することから、a 類の存在も看過できないが、その他に関してはほとんどが b・d 類であり、この技法をもつ人物埴輪のスタイルと言えよう。また、笠間市高寺 2 号墳出土の人物埴輪は足結部分に赤彩で帯を表現しており、県内を見渡してみても類例が存在せず、稀有な資料である。

埼玉県では埴輪生産遺跡の鴻巣市生出塚遺跡から a 類のみが出土している。つまり、a 類が同遺跡における特徴であり、同遺跡から供給された埴輪かどうかを判別する材料となろう。このことから、行田市埼玉瓦塚古墳出土の人物埴輪（足結部分のみ）はいずれも b 類（d 類？を含む）であり、白色がかった色調であることからも生出塚遺跡での製作品ではなかろう。また、行田市酒巻 14 号墳出土の人物埴輪は、いずれも d 類である。上述の特徴からすれば、生出塚埴輪製作工人集団の製作品でないことになるが、現在のところ生出塚遺跡から筒袖でスリムズボン状着衣の人物埴輪が確認されていないことにその原因があげられよう。同遺跡の埴輪製作工人集団が製作したと考えられる千葉県市原市山倉 1 号墳出土の男子像に b・d 類の両者が存在することは、筒袖でスリムズボン状着衣の双脚人物像を作る際だけ（酒巻 14 号墳の場合は力士も同様）に d 類を採用したと考えられる。

群馬県では a 類はまんべんなく分布しているが、b 類は伊勢崎市より東部の地域にその分布は集中することが分かる。この地域に一つのまとまりを考えることができよう。c 類は高崎市保渡田八幡塚古墳からのものと、藤岡市滝のものに限定される。後者は結び紐の

表現がなく、足結の突帯の直下に貼りつけられていることから、前者と同一埴輪製作工人集団のものとは考えにくい。

千葉県ではまず特徴的なd類が目につく。すなわち山武郡域周辺に認められる双脚人物像で、山武郡芝山町殿部田1号墳の武装男子像、山武郡横芝光町小川台5号墳の武装男子像がそれである。これらは脚部が直線的に表現され、履の表現を欠くという点でも共通する。また、小川台5号墳の男子像にはa類の足結をつけている。しかし、他地域における足結は上述したようにゆったりとしたズボン状着衣を絞るという表現をもっていたのに対して、本資料は武装男子像と同様の脚部であることから他とは同列に扱えない。その意味で山武郡芝山町高田木戸前1号墳出土の男子像もa類ではあるが、小川台5号墳の男子像と同様に考えることができよう。

3-2 履表現の分布

a類からe類はどのように分布するのだろうか。それを示したものが図5である。各県ごとにその様相をみてみると、茨城県ではそのほとんどがa類であることが分かる。そして、それらのほとんどが別造り技法のものである。しかし、那珂郡東海村舟塚1号墳の男子像や伝東海村出土武装男子像はb類であり、同じ別造り技法のものでも他とは一線を画するものと思われる。また、笠間市高寺2号墳出土の男子像は一体造りでいずれもa類であるが、関東地方のどの地域のものとも異なり、極めて内股の履表現となっている。上半身は破片資料のみであるが、三木文雄の著書（三木 1958)に収められた出土地不詳の資料(資料番号 57)と同一埴輪製作工人集団の製作品であろう。この資料は、舟塚1号墳の男子像と顔面部や姿態など類似する特徴を持っており、茨城県北部地域から出土したものと考えられる。このことから、高寺2号墳出土の男子像は一体造りの技法をもつ埴輪製作工人集団が、舟塚1号墳の人物埴輪を製作した別造り技法をもつ埴輪製作工人集団との協力の元に製作したものと考えられよう。

埼玉県では鴻巣市生出塚遺跡からb類のみが出土している。つまり、b類が同遺跡における特徴である。行田市酒巻 14 号墳出土の男子像はいずれもb類であり、先にみたように生出塚遺跡の特徴と共通する。同市埼玉瓦塚古墳出土の武装男子像はすべてa類であり、先と同様の結果である。東松山市周辺ではa・b・d類が出土しているが、主に三千塚古墳群出土の資料である。同古墳群には生出塚遺跡の製品も運ばれているが、基本的にそれらは少数であったと考えられる。現在、それらの具体的な様相は検証できないが、最も混

在した在り方を呈していたと予想される。

群馬県ではａ類は主に群馬郡域に分布しており、この地域に一つのまとまりを考えることができよう。東部地域ではａ～ｄ類が雑多な様相を示している。

千葉県ではｅ類のまとまりが目につく。それは足結の分布で述べたｄ類に相当する。また、山武郡横芝光町姫塚古墳ではｂ類とｄ類の双方が出土しており②、小林行雄の指摘した作風の違いである第一・二群に相当する（小林 1974:pp.111-113)。また、香取市城山１号墳の武装男子像はｂ類である。同資料は城山１号墳の他の下総型人物埴輪のなかにあって、報告書（丸子ほか 1978)の第 55 図にあげられた男子埴輪と第 57 図にあげられた女子埴輪とともに極めて特異な存在である。女子埴輪の島田髷の形態と、男子埴輪の鉢巻きや美豆良の形態はともに栃木県河内郡上三川町西赤堀狐塚古墳出土資料（日本窯業史研究所 1987)に酷似する。そこで前述の武装男子像をみてみると、冑は衝角付冑であり、冑の両側面に脇立状粘土板を貼り付けていたと推定されているが、残存部分が極めて少なく詳細は不明である。それを除けば栃木県佐野市中山８号墳や同市車塚、小山市飯塚古墳群（小山市史編さん委員会 1981)出土資料に極めて酷似し双方の密接な関係が想定される。また、腕部の造りは城山１号墳の場合太めの短い腕を下に下げる形態をもっており、これは栃木県下都賀郡壬生町安塚に認められる。甲は線刻のみで挂甲を表現しており、前述の中山８号墳や車塚、飯塚古墳群出土資料および安塚出土の武装男子像も同様である。さらに両地域を結ぶ根拠として、小山市飯塚古墳群出土資料に下総型人物埴輪が存在することがあげられる（小山市史編さん委員会 1981)。よって、城山１号墳の武装男子像および上述の女子・男子像は、栃木県南部地域の埴輪製作工人集団が関与して成立したものと考えたい。

さらに、同様に下総型埴輪のなかに双脚の人物像が含まれる例として山武市松尾町朝日ノ岡古墳がある（城倉 2006a)。本資料の上半身は典型的な下総型人物埴輪の特徴を有しており、脚部は線刻で格子を表現している。脚部に線刻の格子を表現しているものは、埼玉県鴻巣市生出塚遺跡出土の双脚男子像・武装男子像、群馬県高崎市観音山古墳出土の武装男子像、同県太田市長柄神社境内出土武装男子が知られるのみである。これらを結ぶ積極的な根拠は存しないが、線刻に注目すると群馬県例はいずれも細かい長方形の線刻となっているのに対して、生出塚遺跡例は正方形に近い粗い線刻であり、朝日ノ岡古墳例は生出塚遺跡例と酷似する。同古墳の所在する山武郡域には横芝光町殿塚古墳・姫塚古墳という長方形の周溝を有する古墳があり、埼玉県行田市埼玉古墳群との関連が想定される（第３章参照)。このことから、朝日ノ岡古墳の双脚人物埴輪の製作にあたっては、生出塚遺跡の

埴輪製作工人集団が関与していた可能性があろう。

栃木県では真岡市鶏塚古墳の武装男子像がａ類であり、先にみた茨城県地域の別造り技法のものとの共通性が指摘できる。また、足利市葉鹿熊野古墳の双脚男子像はｃ類であり、同古墳出土の「二人童女」と群馬県高崎市観音山古墳出土の「三人童女」が同巧であるとの指摘（橋本 1980:pp.351-353）と同様に、観音山古墳の双脚男子像との共通性が指摘できる。

3-3 台部表現の分布

ａ類からｄ類はどのように分布するのだろうか。それを示したものが図６である。各県ごとにその様相をみてみると、茨城県ではそのほとんどがａ類であることが分かる。ｂ類は那珂郡東海村舟塚１号墳の男子像のみ、ｃ類は水戸市北屋敷２号墳の台部である。いずれも別造り技法の双脚人物像であるが、前者は履表現にも他とは異なる特徴があり、分布域が最北端であることも含めて一線を画すものである。後者は足結表現にａ類が存在するが、履表現は通有のａ類であることから他と同様に考えることができよう。

埼玉県では鴻巣市生出塚遺跡からｂ類のみが出土している。そして、行田市酒巻 14 号墳の双脚人物像もｂ類である。履の分類で述べたのと同様の結果が出ており、生出塚埴輪製作工人集団との関連が考えられる。さらに、行田市埼玉瓦塚古墳の双脚人物像はすべてａ類であり、台部表現でも生出塚遺跡との共通性は抽出できないことから、生出塚埴輪製作工人集団とは異なる生産遺跡での製作品と考えられる。東松山市周辺ではａ類・ｂ類が出土しており、瓦塚古墳の場合と違い台部の高さも極めて高いものである。履表現と同様に混在した様子がうかがえる。

群馬県ではａ類が主に群馬郡域に分布しており、履の分類におけるａ類とほぼ重なる。またｃ類は東部地域にまとまる傾向を示しており、足結の分類におけるｂ類の分布と同様に考えることができる。

千葉県ではｄ類のまとまりが山武郡域に認められる。これらは履の分類におけるｅ類の分布にほぼ重なる。また、山武郡横芝光町姫塚古墳ではａ類とｂ類の双方が出土しており、履表現にみた小林行雄の指摘に相当する。さらに、市原市山倉１号墳ではすべてｂ類であり、埼玉県鴻巣市生出塚遺跡例と合致する。

栃木県では真岡市鶏塚古墳の武装男子像がａ類であり、先にみた茨城県地域の別造り技法のものとの共通性がここでも指摘できる。また、足利市葉鹿熊野古墳の双脚男子像はｃ

類であり、やはりここでも群馬県高崎市観音山古墳の双脚男子像との共通性が指摘できる。

3-4 分布状況と年代的位置付け

以上の各分類の年代的位置付けに関しては、若松良一が人物埴輪の台部の変遷を指摘したものがある（若松 1987、1992)。若松は台部の天井の構造をもとに、ドーム状を呈する筆者の履の分類a類について第4期（6世紀中葉）という位置付けをおこなっている。しかし、そこにあげられた栃木県真岡市鶏塚古墳例は、横穴式石室の形態から6世紀後半頃に位置付けられるものであり（大橋 1990)、おなじくa類のなかで茨城県筑西市西保末例、同県笠間市高寺2号墳、千葉県香取市城山5号墳例、神奈川県厚木市登山1号墳例も6世紀後半と考えられ、若松の編年でいうと第5期に位置付けられるものである。つまり、円筒形でドーム状の天井である資料のすべてが若松のいう第4期に該当するわけではない。しかし、第5期に筆者の台部の分類b類（楕円形）が出現するという主張は首肯されるものであり、年代的位置付けの根拠となり得るものであろう。

その他の履分類a類の内、6世紀前半から中葉頃に位置付けられる人物埴輪としては、茨城県小美玉市舟塚古墳例、同県水戸市北屋敷2号墳例、埼玉県行田市瓦塚古墳例、群馬県前橋市朝倉例、同県高崎市保渡田八幡塚古墳例、同県高崎市上芝古墳例、同県北群馬郡榛東村高塚古墳例、栃木県佐野市中山8号墳例、神奈川県川崎市久保台例である。この結果、a類は6世紀前半から6世紀後半まで連綿と続いているものであり、前述した通り必ずしも若松の主張するようにはならないものも存在する。しかし、大枠の流れとしてドーム天井のものから台部の断面が楕円形で履が突出するものへという変遷は辿れそうである。また、台部が存在しないものや履表現欠くものとして、千葉県山武郡周辺に独自ものが分布している。福島県西白河郡泉崎村原山1号墳に台部を欠く人物埴輪が確認されている(福島県教育委員会 1982)が、後者は双脚人物像が力士像のみであり、双脚を表現するが上の偶然の創出である可能性もある。関係性は不明であるが、千葉県の6世紀中葉頃の段階に、まずこの特徴が存在することは注目すべきであろう。

年代的位置付けから、年代の著しく異なるものは同一分類であっても分布の範囲から一応除外できると考えられる。また、足結・履・台部それぞれで個別に同一分類に含まれていても、他の組み合わせの特徴によって除外することができるであろう。以上の観点から、分類の同一性に同一埴輪製作工人集団の製作品であるとの結論が導き出せると考えられる。

4. 人物埴輪表現の地域性とその意義

以上の検討で、人物埴輪の脚部表現に地域性のあることが判明した。それは足結、履、台部の各部位によって顕著に表れるものが異なり、それぞれを比較検討することによって明確に判別することができるのである。つまり、人物埴輪の部位ごとの詳細な検討が有効であることを示すものと考える。それらを総合して小地域を設定し、なおかつ現在までに判明している埴輪の生産遺跡（埴輪窯跡・表 5）の分布を対比したものが図 7 である。

まず一見して千葉県・東京都・神奈川県では、生産遺跡の発見数の少なさが分かる。なかでも千葉県では、埴輪出土遺跡数が東京都・神奈川県に比較して極めて多いのにも関わらず、2 遺跡（2 窯）しか判明していない。その内、木更津市畑沢窯からは富津市内裏塚古墳に埴輪を供給していたようであり、成田市公津原窯からは同市船塚古墳に埴輪を供給していたことがわかっている。すなわち判明している 2 基の窯は特定古墳に供給が限定されるようであり、未知の埴輪生産遺跡が多数存在するはずである。また、市原市山倉 1 号墳には胎土の面からも埼玉県鴻巣市生出塚遺跡の埴輪製作工人集団が関わっていたことが判明している（千葉県文化財センター 1994)。さらに山武郡域に認められる 2 つの小地域は時期的な差が存在してはいるが、同地域に埴輪製作遺跡が将来確認されるものと考えられる。

東京都では大田区下沼部遺跡・久ケ原遺跡の竪穴式住居から相当数の円筒埴輪が検出されている。前者は焼土や木炭などを伴った窯状遺構も検出されているようであり、埴輪窯跡が近隣に存在していたものと考えられる。神奈川県では川崎市宮前区白井坂窯の製品の一部が、同市高津区西福寺古墳に供給されていたようである（鈴木 1990:p.63、浜田 1992:p.26、伝田ほか 2009)。いずれも極めて小規模であり、近隣の幾つかの古墳に供給するためのものであろう。

茨城県では常陸太田市元太田山窯、ひたちなか市馬渡窯、東茨城郡茨城町小幡北山窯が知られている。いずれも茨城県中央部地域に分布しており、それぞれ近隣の古墳へと供給されていたことが分かっている。筆者の設定した小地域においては、馬渡と小幡北山がその中に分布しており、両埴輪製作工人集団の密接な結び付きが窺える。また、那珂郡東海村舟塚 1 号墳や東海村出土資料に関しては、前者と福島県いわき市神谷作 101 号墳との三角文の多用という点で共通性が指摘されており（今津 1988)、西茨城郡友部町高寺 2 号墳においても三角文の破片が確認されていることから、より北の地域の埴輪製作工人集団と

の交流によって成立した可能性もある。

埼玉県ではこれまでに 12 ケ所の埴輪窯跡が確認されている。その分布は主として荒川流域と利根川右岸の児玉郡地域に二分される。荒川流域には鴻巣市馬室窯、同市生出塚窯、東松山市桜山窯、比企郡吉見町和名窯、熊谷市権現坂窯、同町姥ケ沢窯、児玉郡域には深谷市割山窯、児玉郡美里町宇佐久保窯・本庄市蛭川窯、同市八幡山窯、同市宥勝寺北裏窯、同市赤坂窯がある。この中で生出塚が最も大規模な埴輪窯跡群ではあるが、割山で 20 基、桜山で 17 基、権現坂で 17 基が確認されており、比較的規模の大きなものである。また、馬室では 10 基、宇佐久保では 12 基が確認されている。また、姥ケ沢(8 基)は権現坂と 800 m しか離れておらず、この地域の大規模な窯跡群であった可能性が高い。また、窯跡の形態をみてみると、馬室・生出塚・桜山・割山は灰原を共有する八ツ手状を呈しており、姥ケ沢の二列を除くと他のすべては並列である。このことから、馬室・生出塚・桜山・割山は埴輪製作工人集団としてのまとまりと考えることができよう。生出塚の埴輪の供給圏を考えた場合、上記のまとまりはさらに首肯されるものと考える。児玉郡域については、双脚の人物埴輪の出土が少なく小地域を設定し得なかったが、窯跡の分布と数からいっても より細かな区分が今後可能となろう。

群馬県では埴輪出土古墳の数が関東地方随一であるのにもかかわらず、窯跡は 5 ケ所の確認にとどまる③。しかし、伊勢崎市から太田市・旧尾島町周辺に設定された小地域は、太田市駒形神社窯、同市成塚住宅団地B区窯などで製作された可能性が高い。また、群馬郡域の小地域は時期的にも 6 世紀前半頃にまとまるものである。藤岡市本郷窯、同市猿田窯、富岡市下高瀬上之原窯などの群馬西部地域の様相については、検討でき得る良好な資料を欠いており、小地域は設定できなかった。

栃木県では佐野市唐沢山窯、小山市飯塚窯が知られるが④、前者は下都賀郡壬生町安塚の人物埴輪を製作したと考えられるもので、後者は小山市周辺の古墳に供給していたようである。小地域を設定し得る良好な資料は存しなかったが、真岡市鶏塚古墳や、足利市葉鹿熊野古墳と群馬県高崎市観音山古墳の共通性、小山市周辺の武装男子像と千葉県香取市城山 1 号墳の武装男子像との共通性など遠距離に亘る関係性が、当地域の特色であったのかもしれない。これらの小地域は、共通する特徴を有する資料すなわち同一埴輪製作工人集団によると考えられる埴輪を、その分布によって括ったものである。埴輪の生産と流通のシステムには、その埴輪製作工人集団を統括していた首長の存在が不可欠であり、その集団による埴輪の分布は自ずと首長の支配していた範囲を端的に示していると思われる。

田中広明は土師器の地域性を論じるなかで、関東地方を35の小地域に分割した。そして、土師器坏の技術的熟練度すなわち生産体制の専業性の高低によってランクAからCまでを設定した。それらの土師器の分布が令制下の国域とどのように重なってくるかを論じたのである（田中 1995)。また、土師器の分布は流通範囲としてとらえることができ、その流通システムに「製作者の自家消費と、製作者の属する集落で消費された製品を第一次再分配と呼び、製品が首長の手を経由し、在地首長の経済圏内で消費されたり、在地首長の例えば、古墳などで消費された製品を第二次再分配と呼び、さらに在地首長の経済圏を越え、他の経済圏へ流通した製品を第三次再分配」（田中 1994:pp.77 - 78)とした。

古墳時代後期の埴輪とは須恵器の製作技術の最も特徴である、窯焼成を採用していることに極めて専業性が高いと推定される。しかし、埴輪製作の粘土摂取→製作→乾燥→焼成・窯出し→搬出・出荷という一連の流れと年間の季節との関わりについては不明な点が多い。今後、埴輪工房・粘土採掘跡などの検討や埴輪の底面に残された圧痕（稲の籾殻・植物）などの検討によって解明されてくると考えられる⑤。また、埴輪の発注→製作→供給という流通システムにのってもたらされた分布の範囲は、まさに田中の指摘する「第二次再分配」の範囲にほかならず、各首長の支配領域を示すと考えられるのである。

註

① 双脚人物埴輪は基本的に男子と武装男子に限られる。武装男子とは一般的に武人と呼ばれるものであるが、武人という呼称には職掌を示す意味が含まれる。現在、職掌を人物埴輪から証明するには、なお多くの検証作業を有すると考えられる。よって今は武装男子という名称を使用することとする。

② 姫塚古墳ではc類の存在も存在することが判明したので、終章において詳しく述べていくことにする。

③ 生出塚窯のような大規模な窯跡群は本郷窯がその可能性を指摘できるが、その他は比較的小規模なもののようである。

④ 足利市葉鹿に土師という地名があることから、埴輪窯の存在が指摘されている（橋本 1980:p.352）。今のところ積極的にそれを示す端緒は確認されていないものの、埴輪生産遺跡が存在する可能性は極めて高いと思われる。

⑤ 奈良県北葛城群河合町市場垣内遺跡・川合大塚山古墳・中良塚古墳から出土した埴輪の底面に、ワラビの圧痕が残っていた例が報告されており（吉村 1994)、それが枯れた後のものであることが

判明している。

図版はすべて筆者作成

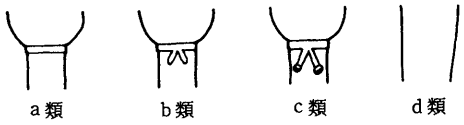


図1　足結の分類

a類：台部に貼りつける（前のめり）
b類：ほぼ水平の台部に貼りつける
c類：台部から突出（履は平）
d類：台部から突出（履は厚）
e類：なし（台部なしを含む）

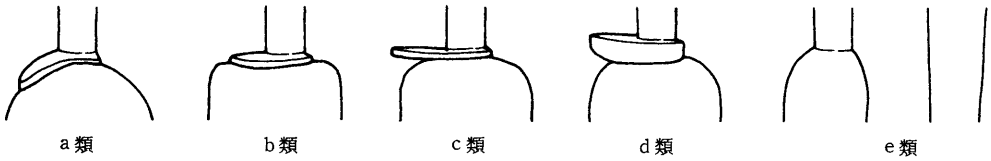


図2　履（靴）の分類

a類：円形
b類：楕円形
c類：方形
d類：なし

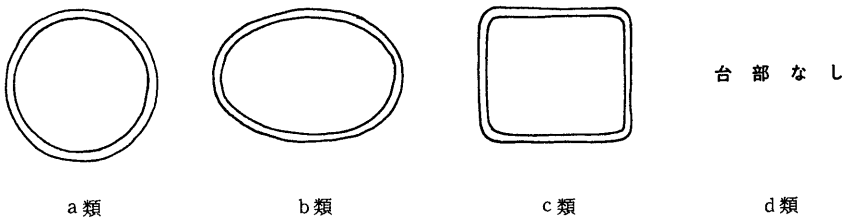


図3　台部の分類

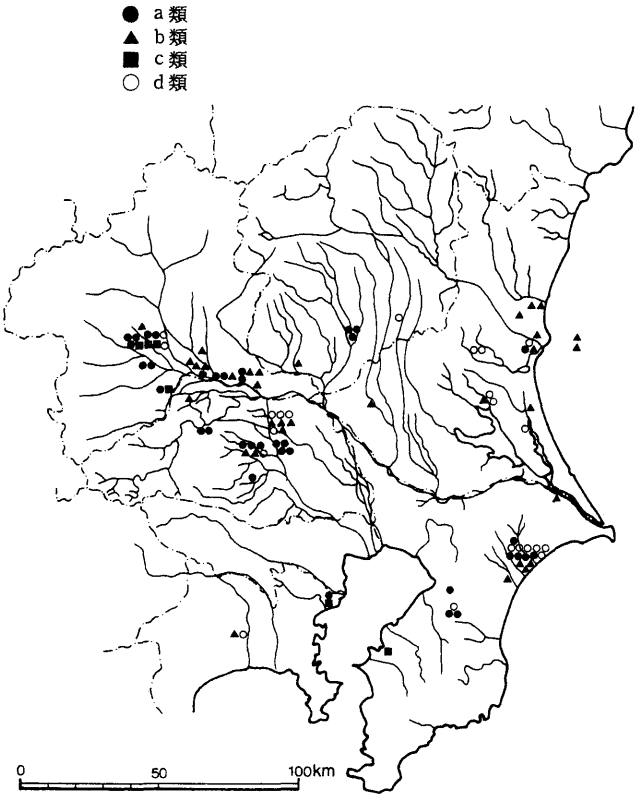


図4　足結各種の分布

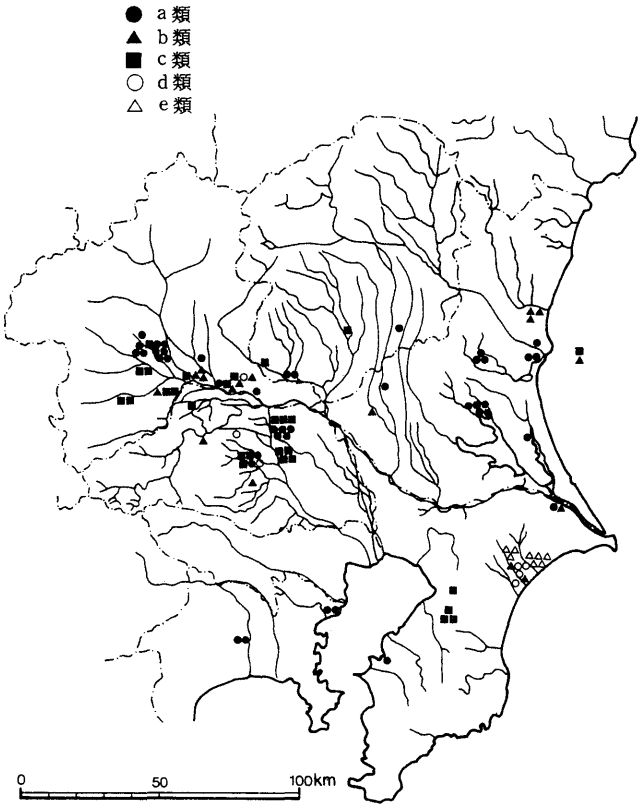


図5　履（靴）各種の分布

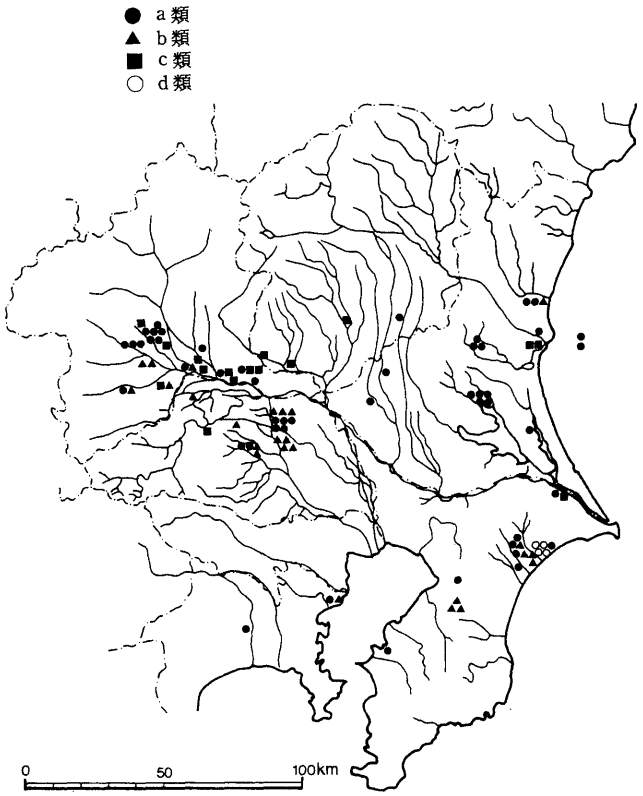


図6　台部各種の分布

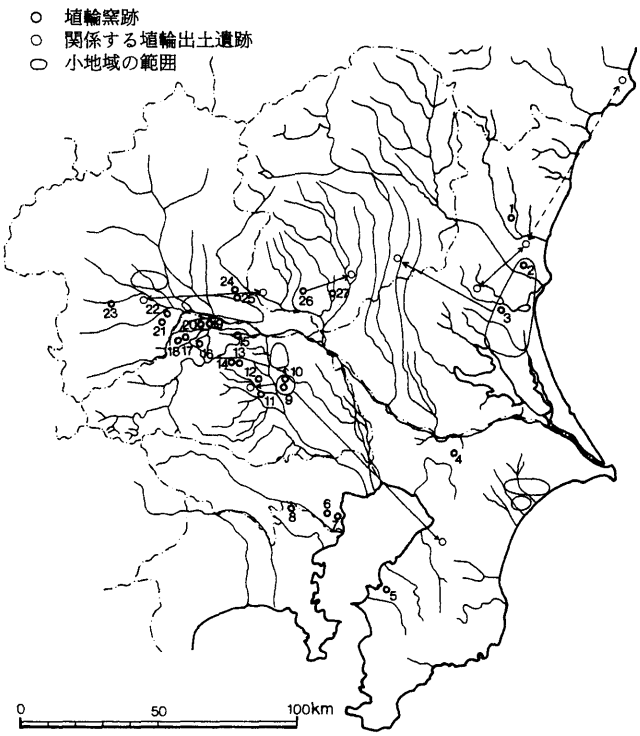


図7　設定される小地域と埴輪窯の分布（番号は表5と同じ）

表１　足結の県別累計

	茨城	埼玉	群馬	千葉	栃木	神奈川
a類	1	10	13	9	3	1
b類	10	7	10	4	1	1
c類	0	0	4	1	0	1
d類	6	5	1	7	1	1

表２　履の県別累計

	茨城	埼玉	群馬	千葉	栃木	神奈川
a類	13	6	13	2	3	4
b類	5	2	7	3	0	0
c類	1	12	10	4	2	0
d類	0	2	1	4	0	0
e類	0	0	0	8	0	0

表３　台部の県別累計

	茨城	埼玉	群馬	千葉	栃木	神奈川
a類	16	7	15	8	2	2
b類	1	11	5	7	0	1
c類	2	1	9	1	2	0
d類	0	0	0	4	0	0

表５　関東地方における埴輪窯跡一覧

	遺跡名	構造	基数	文献
1	茨城県常陸太田市元太田山窯	並列	11	斎藤ほか1974
2	茨城県ひたちなか市馬渡窯	並列	19	大塚・小林1976、白石1991
3	茨城県茨城町小幡北山窯	並列	59	白石1991、大塚ほか1989
4	千葉県成田市公津原窯	単独	1	千葉県1975、千葉県センター1994
5	千葉県木更津市畑沢窯	単独	1	千葉県センター1994、安藤1974、田中1981
6	東京都大田区下沼部窯	?	1	森本1928・1930
7	東京都大田区久ヶ原遺跡	?	住居	中根・徳富1930
8	神奈川県川崎市白井坂窯	単独	1	坂詰1965、鈴木1990、浜田1992、伝田ほか2009
9	埼玉県鴻巣市馬室窯	八ツ手状・並列	11	埼玉県1978
10	埼玉県鴻巣市生出塚窯	八ツ手状	31	山崎ほか1981、山崎1985～
11	埼玉県東松山市桜山窯	八ツ手状	17	水村ほか1982
12	埼玉県吉見町和名窯	並列	8	吉見町1978
13	埼玉県江南町権現坂窯	並列	17	江南町1995
14	埼玉県江南町姥ヶ沢窯	二列	8	江南町1995
15	埼玉県深谷市割山窯	八ツ手状	20	深谷市割山遺跡1981
16	埼玉県美里町字佐久保窯	並列	12	山崎1985
17	埼玉県児玉町蛭川窯	?	?	山崎1985
18	埼玉県児玉町八幡山窯	並列	2	山崎1985
19	埼玉県本庄市宥勝寺北裏窯	並列	3	橋本ほか1980、太田2003
20	埼玉県本庄市赤坂窯	?	?	本庄市1976
21	群馬県藤岡市本郷窯	並列	20	津金澤ほか1980、藤岡市1993
22	群馬県藤岡市猿田窯	並列	4	志村1985
23	群馬県富岡市下高瀬上之原窯	並列	2	新井ほか1994
24	群馬県太田市駒形神社窯	?	10?	宮田1991
25	群馬県太田市成塚住宅団地B区		3	小暮1990
26	栃木県佐野市唐沢山窯	並列	12	大川1964
27	栃木県小山市飯塚窯	並列	3	小山市1981

表4　人物埴輪の脚部分類結果一覧

	所在地・資料名	墳形・規模	内部主体	円筒・土器	足結	履	台部	別造り	文献
男子	茨城県筑西市西保末			V(新)		a	a		東博1980
	八千代町城山古墳群				b	b	a		保坂1961、八千代町1987・1988
	笠間市高寺2号墳・1	円(25)	横室	V(新)TK217	d	a	a		友部町1976
	・2				d	a	a		友部町1976
	・3					a	a		友部町1976
	水戸市北屬敷2号墳・1	円(20)		V(新)	b			○	井上1995
	・2				d?			○	井上1995
	・3				a			○	井上1995
	・4					a	c	○	井上1995
	・5					a	c	○	井上1995
	ひたちなか市馬渡A1号粘土採掘坑				b	a	a	○	大塚・小林1976
	那珂市天神小屋古墳群				b				那珂町1988
	東海村舟塚1号墳	前方後円(32)	横室(切石)	V(新)TK43		b	b	○	大森1955
	伝茨城県内・1				b	c	a		茨城県立歴史館1990
	伝茨城県内・2				b	b	a		茨城県立歴史館1990
武蔵男子	小美玉市舟塚古墳・1	前方後円(88)	箱棺(複式)	V(中)	b	a	a	○	大塚・小林1968、1971
	・2				d	a	a	○	大塚・小林1968、1971
	・3					a	a	○	大塚・小林1968、1971
	・4					a	a	○	大塚・小林1968、1971
	・5				d	a	a	○	大塚・小林1968、1971
	行方市小幡				d	a	a	○	東博1980
	鉾田市不二内古墳				b			○	東博1980、八木1897
	伝東海村・1				b	b	a	○	茨城県立歴史館1990
	伝東海村・2				b	b	a	○	茨城県立歴史館1990
男子	埼玉県美里町十条				b	c	b		若松1988
	蓮居町小前田10号墳	円(22)	横室	V(新)	a				瀬瀬1986
	熊谷市野原古墳	前方後円(40)	横室(切石)	V(新)		d	b		亀井1977b、東博1986、江南町1995
	東松山市三千塚古墳群・1				b	c			金井塚1984
	三千塚古墳群・2				a	c	b		金井塚1984
	諏訪山古墳群				d	c	b		金井塚1984
	大谷字大谷・1				a	d	a		東博1986、金井塚1984、大野・柴田1903
	大谷字大谷・2				a	a	a		東博1986、金井塚1984、大野・柴田1903
	大谷字花ノ木				b	c			東博1986、金井塚1984、大野・柴田1903
	坂戸市塚の越1号墳	前方後円(30)		V(新)	a	b			昼間1991
	行田市埼玉稲荷山古墳	前方後円(120)		V(古)TK47	b				斉藤ほか1980
	埼玉愛宕山古墳	前方後円(53)		V(新)	b	a	a		杉崎ほか1985、斎藤1994
	酒巻14号墳・1	円(42)		V(新)	d	c	b		中島ほか1988
	・2				d	c	b		中島ほか1988
	・3				d	c	b		中島ほか1988
	鴻巣市生出塚14・15号窯・1			V(新)	a	c	b		山崎1986
	・2				a	c	b		山崎1986
	・3				a	c	b		山崎1986
	蓮居町小前田10号墳				a	b	c		瀬瀬1986
武蔵男子	行田市埼玉瓦塚古墳・1	前方後円(67)		V(中)TK10	b	a	a		杉崎ほか1986、若松ほか1992、若松・日高1992-1994
	・2					a	a		杉崎ほか1986、若松ほか1992、若松・日高1992-1994
	・3					a	a		杉崎ほか1986、若松ほか1992、若松・日高1992-1994
	・4				b				杉崎ほか1986、若松ほか1992、若松・日高1992-1994
	・5				d?	a	a		杉崎ほか1986、若松ほか1992、若松・日高1992-1994
	鴻巣市生出塚3・4・8号窯			V(新)	a	c	b		山崎1986、山崎ほか1981
男子	群馬県高崎市観音山古墳	前方後円(97)	横室	V(新)TK43	a	c?	b		石塚ほか1980、梅沢1990、梅沢ほか1979
	藤岡市滝				c	c	b		東博1983
	藤岡市七興山古墳	前方後円(145)		V(中)TK10		c			志村1990-1992
	本郷				a	b	c?		梅沢ほか1979
	富岡市芝宮79号墳・1	円(17)	横室	V(新)TK43		c	a		篠原1992
	・2					c	b		篠原1992
	高崎市保渡田VIII遺跡	別区		V(古)		c			若狭1990
	前橋市朝倉			V(中)	a		c		東博1983
	伊勢崎市波志江				b	c	a		梅沢ほか1979
	境現山				b	b	b		東博1983
	赤堀町				b	a	a		梅沢ほか1979
	境町				a				梅沢ほか1979
	下武士				a	a	c		東博1983
	天神山古墳	前方後円(124)	竪室3?	V(中)	b	c	a		梅沢ほか1979、東博1983、群馬県立歴史博物館1993
	太田市オクマン山古墳	円(36)	横室	V(新)	a	d	a		梅沢ほか1979、小暮1981
	四ツ塚			V(新)	b	c			東博1983
	大泉町				b	a	a		梅沢ほか1979
武蔵男子	高崎市観音山古墳				a	c	b		石塚ほか1980、梅沢1990、梅沢ほか1979
	保渡田八幡塚古墳・1	前方後円(102)	竪室・石棺	V(古)	c	a	a		福島ほか1932
	・2				a	a	a		福島ほか1932
	・3				c	a	a		福島ほか1932
	・4				c	a	a		福島ほか1932
	・5				a	a	a		福島ほか1932
	・6				d	a	a		福島ほか1932
	上芝古墳・1	帆立貝(18)	竪室?	V(中)	a	a	a		東博1983、福島ほか1932、福村1986
	・2				a	a	a		東博1983、福島ほか1932、福村1986
	・3				a	a	a		東博1983、福島ほか1932、福村1986
	横塚村高塚古墳	前方後円(60)	横室	TK10	b	a	c		尾崎1962、石川1981
	伊勢崎市横塚			V(新)		b	c		東博1983
	安堀町				b	b	c		梅沢ほか1979
	太田市長柄神社境内				a	b	c		梅沢ほか1979、東博1983
	成塚				b	b	c		梅沢ほか1979
	鳳凰町				a	b	c?		梅沢ほか1979
男子	千葉県木更津市紙園				c	a	a		東博1986
	市原市山倉1号墳・1	前方後円(45)	横室	V(新)	d	c	b		米田1976、市原市2004
	・2				a	c	b		米田1976、市原市2004
	・3				a	c	b		米田1976、市原市2004
	千葉市人形塚古墳	前方後円(50)	横室・箱棺	V(新)	a	c	a		高橋1920、千葉県2006
	山武市経僧塚古墳	円(45)	横室・箱棺	V(新)	b	d	a		市毛1971、滝口ほか1988
	山武市朝日ノ岡古墳	前方後円(76)	横室	V(新)	b	b?			軽部1957
	芝山町高田木戸前1号墳	前方後円(47)	箱棺(切石)	V(新)	a	e	b		坂井1966、浜名ほか1975
	横芝光町殿塚古墳	前方後円(88)	横室(切石)	V(新)	a				滝口ほか1988、滝口1956・1963
	姫塚古墳・1	前方後円(58)	横室(切石)	V(新)TK43	a	d	a		滝口ほか1988、滝口1956・1963
	・2				b	d	b		滝口ほか1988、滝口1956・1963
	・3				a	d	b		滝口ほか1988、滝口1956・1963
	・4				b	b	b		滝口ほか1988、滝口1956・1963
	横芝光町小川台5号墳	前方後円(30)	木直	V(中)	a	e	d		滝口ほか1988、浜名ほか1975
	小見川市城山5号墳	前方後円(51)	木直	V(新)TK43	a	a	a		丸子ほか1978、千葉県1982
武蔵男子	芝山町殿部田1号墳・1	前方後円(33)		V(中)	d	e	a		滝口ほか1988、浜名ほか1980
	・2				d	e	a		滝口ほか1988、浜名ほか1980
	横芝光町小川台5号墳・1				d	e	d		滝口ほか1988、浜名ほか1975
	・2				d	e	d		滝口ほか1988、浜名ほか1975
	・3				d	e	d		滝口ほか1988、浜名ほか1975
	・4				d	e	a		滝口ほか1988、浜名ほか1975
	小見川市城山1号墳	前方後円(68)	横室	V(新)TK43		b	c		丸子ほか1978
男子	栃木県足利市葉鹿熊野古墳	円(15)	横室			c	c		東博1980、石塚ほか1980、島田1929
	壬生町安塚・1				a	c	c		東博1980、壬生町1989
	・2				a				東博1980、壬生町1989
武蔵男子	佐野市車塚					a		○?	東博1980
	中山8号墳			V(中)	b	a	c		壬生町1989、北武蔵ほか1985
	壬生町安塚				a				東博1980、壬生町1989
	真岡市鶴塚古墳	円(22)	横室	V(新)	d	a	a	○	東博1980、後藤ほか1931
男子	神奈川県川崎市久保台・1			V(中~新)	c				鈴木1990
	・2					a	a		鈴木1990
	・3					a	b		鈴木1990
	天神塚古墳	円(18)		V(新)	a				浜田1992
	厚木市登山1号墳	円(18)		V(新)	d	a	a		赤星1967、今津ほか1992
武蔵	登山1号墳				b	a			赤星1967、今津ほか1992

凡例　竪室…竪穴式石室　横室…横穴式石室　箱棺…箱式石棺　木直…木棺直葬　円筒埴輪…川西編年第V期を古・中・新に分割

第３章　人物埴輪の共通表現とその背景

はじめに

これまでの埴輪に対する研究は、主としてその型式学的編年研究と埴輪配列や各種埴輪の意義という２つの方向性からなされてきた。それに対して、埴輪の生産とその需要という問題についてはそれほど議論がなされてきてはいない。かつて橋本博文は、埴輪生産体制のモデルを４種に整理した。すなわち、在地の土師器製作に携わるものたちが派遣された指導者の指導のもとに臨時に組織化され製作を行う「徴発貢納型」、轟俊二郎が下総型埴輪の生産体制を一種巡歴手工業者的な側面をもっているとした（轟 1973）一古墳一窯的な「移動型」、地域首長の下に組織化された製作者から一定の地域内に供給された「固定分散型」、大王陵などの大量生産をまかなうために複数のグループが共同体の枠を越えて労働の組織化がなされた「集中型」である（橋本 1981：pp.128-129）。橋本によって示されたモデルは、時期的な変遷や地域的な差異、さらに供給されるべき古墳（被葬者）の階層差をも加味したものであり、聞くべき意見である。しかし、関東地方において、広範囲の需給関係である「移動型」と地域的に比較的まとまりをもつ「固定分散型」との関係や、その成立に関する背景などは充分に説明されてこなかった。

また、かつて小林行雄や車崎正彦は人物埴輪の「作風」（小林 1974：pp.101-116、車崎 1988）に注目して製作者個人を摘出しようとした。しかし、それを明確に判断するためには、製作技法はいうに及ばず、個人の癖や工具の相違①、さらには粘土や混和剤ということにまで考慮を及ぼす必要があり、その道のりは極めて長い。そこで、本章では関東地方を例にとり、人物埴輪の服装を中心とした各種表現のうち、広範囲に確認される特徴的な共通表現を取り上げ、集団としての埴輪製作工人の動向を明らかにしたい。この検討を通じて埴輪の生産とその需要について筆者の見解を述べたいと思う。

１．人物埴輪における共通表現の摘出

共通表現の摘出にあたっては、関東地方出土のすべての人物埴輪についてその表現を

検討した。その詳細については紙幅の都合上割愛せざるを得ないが[2]、以下に述べる諸特徴は、全体を検討した上での結果であることをあらかじめお断りしておく。また、各古墳の年代は円筒埴輪もしくは古墳築造当初の所産と考えられる土器をもとにしている[3]。

1-1 「頭巾」状被りものをもつ人物埴輪（図 1－1･2）

「頭巾」状被りものとは、天辺に向かって広がっており、なおかつ天辺や側面が塞がっているものである。この被りものを着けた人物埴輪で美豆良を下げたものは上げ美豆良・下げ美豆良を問わず存在しない。ほとんどの場合、耳の部分に大きな耳輪のようなものを着けてはいるが、けっして美豆良を下げることはない。この形態の被りものの分布は埼玉県に集中し（図3の●）、他は千葉県の2例である。埼玉県の集中は、鴻巣市生出塚埴輪窯跡（山崎1987a、山崎1987b)からの4例の出土があるからであり、行田市南河原（東京国立博物館1986）、東松山市三千塚古墳群（金井塚1984）、川越市南大塚4号墳（田中ほか1988）に類例が存在する。いずれも生出塚埴輪窯の工人が直接関与したと考えられる。千葉県では市原市山倉1号墳（米田1976、小橋ほか2004）、流山市東深井7号墳（流山市立博物館1985、轟1973、城倉2006a）がある。山倉1号墳と生出塚窯跡群との関係性は、山崎武や車崎正彦によって指摘されてきた（山崎1987a:pp.57-66、車崎1988）ものであるが、「頭巾」状被りものに美豆良を下げないという共通性によっても確認できる。東深井7号墳例は、他のものとはやや異なり、極めて天辺が広がっている。しかしながら、美豆良を下げないという特徴は共通しており、生出塚埴輪窯の工人との関係は、後述の生出塚埴輪窯産の埴輪の分布からも可能性はあるものの、第1章で述べたように他人の空似ととらえた方がよい。時期の判明したものは、すべて6世紀後半から末の時期である。

1-2 顎鬚をもつ人物埴輪（図 1－3）

顎鬚をもつ人物埴輪とは、千葉県山武郡横芝光町殿塚古墳・姫塚古墳（滝口 1956、滝口 1963、滝口ほか 1988）などで有名な、いわゆる「芝山はにわ」とも呼ばれるものである。この人物埴輪の被りものとしては鍔付き三角冠もしくは単なる三角冠であり、連続三角文をもつものと無文のものがある。また、首飾りの表現をもたず、美豆良はほとんどの場合左右に開いたＬ字形で、束ねた髪を紐で縛るためにできる盛りあがりまでも表現する

極めて手の込んだ造作である。さらに袖の表現として、細い腕の周り（外側）に逆U字形に粘土板を巻き付けて内側を浮かせて立体感をもたせ、左手を大刀に添えるという皆同じ造形のものである。

顎鬚をもつ人物埴輪は茨城県と千葉県に分布の中心がある（図 4 の●）。茨城県の場合、出土地が伝茨城県（茨城県立歴史館 1990）や伝筑波郡（塩谷 1990）などという資料が多く、資料的価値の低いものも含まれるが、おおむね潮来市周辺とその他は霞ヶ浦もしくは太平洋を介した河川流域に点在していることが分かる。また、千葉県の場合山武郡域の首長墓から集中して出土し、その他は佐原市内（野間 1942、轟 1973）および千葉市人形塚古墳（高橋 1920、笹生 1987、千葉県教育振興財団 2006）に存在する。さらに、栃木県真岡市若旅大日塚古墳（和田 1901）に存在する④。

この分布からいえることは、山武郡域の場合は首長墓に安定的に同一工人集団の埴輪が並べられていて、その他の地域の場合は河川の流域に点々と存在し、出土した古墳以外には同一水系にはこの人物埴輪をもつ古墳が存在しない。なおかつ供給された古墳も山武郡域に比べると、著しく規模の小さいものである。つまり、顎鬚をもつ人物埴輪を作った工人集団は、山武郡域の首長墓に集中的に埴輪を供給することを主目的としていたことが考えられ、何らかの理由で他の地域の河川流域に存在する古墳にまで埴輪を供給したということが想定できる。時期の判明したものは、すべて 6 世紀後半から末の所産である。

1-3 垂下帯付き美豆良をもつ人物埴輪（図 1－4）

垂下帯付き美豆良とは、下げ美豆良の下部にさらに粘土による帯状の表現をもつものであり、何を表現したものかは不明である。ほとんどの美豆良の場合は、単なる棒状のものであるが、この垂下帯付き美豆良は極めて特徴的であり、その分布の在り方からしても同一工人集団による所産と考えて良い（図 5 の●）。その分布は群馬県東部地域の利根川流域とその対岸の埼玉県深谷市上敷免（東京国立博物館 1986）、栃木県佐野市七軒町（壬生町立歴史民俗資料館 1989）、小山市飯塚 31 号墳（鈴木 1999・2001）、茨城県古河市高合 2 号墳（古河市史編さん委員会 1986）、結城市林（大野 1897）⑤、桜川市内（塩谷 1990）、さらに群馬県西部地域の高崎市吉井町下條 2 号墳（右島 1992）に分布することが分かる。つまり、利根川を中心に群馬県東部から広まっていったことが想定されよう。

高崎市吉井町下條2号墳では他の要素と混在しており、垂下帯付き美豆良をもつ人物埴輪は主体とはなっていない。このことからも、前述の群馬県東部からの流れを否定するものではない。また、神奈川県横須賀市蓼原古墳（赤星 1938、一柳ほか 1987）はその形態が他と異なり、垂下帯が極めて矮小化されている。しかしながら、そのような特徴の美豆良をもつ人物埴輪は付近の他の古墳からは出土しておらず、その意味で群馬県東部地域との関係があったと判断しておきたい。その流れからすると、旧利根川を通り東京湾に出て、湾岸沿いに横須賀までたどり着いたのかもしれない。群馬東部例は6世紀前半から中葉、下條2号墳は6世紀末、飯塚31号墳は6世紀前半、蓼原古墳が6世紀中葉であり、その他は時期不明である。

1-4 首甲を着ける武人埴輪と円形浮文を伴う線刻の挂甲をもつ武人埴輪（図1－5･6）

武人埴輪とは、冑を被り甲を装着しているものである。一般には大刀を佩いていることで武人埴輪と考えられている向きもあるが、男子埴輪と武人埴輪とを分ける最大の要素は甲冑の有無であり、その要素をもたない人物埴輪は男子と判断すべきである。ただし、以下の3例は武人埴輪とした。体部に甲の表現は存しないが、衝角付冑を被っている神奈川県厚木市登山古墳例（赤星 1967、今津ほか 1992）、頭部は振り分け髪であるが、他の武人埴輪と同じ挂甲の表現をもっている茨城県小美玉市舟塚古墳例（大塚・小林 1968、1971）、三角文入り鍔付き丸帽を被っているが、段違いの線刻で甲を表現している埼玉県本庄市生野山古墳群例（若松 1988）である。

首周りに首甲をもつ武人埴輪とは、一般の武人埴輪に表現される肩甲が、首から肩にかけての前掛け部分と肩の部分と組み合わさったような表現の防具であるのと異なり、現代のよだれ掛け状の前掛け部分のみを表現し、人物埴輪の体部に貼り付けたものをいう。出土副葬品の中では、5世紀代の短甲などと一緒に出土する頸甲[6]に類似するが、確実に6世紀代まで下る出土例は存在しない。実際の出土品としては確認できないことから、革などの有機質のものであった可能性が高い。いわゆる頸甲とは異なるということで、首甲という名称を使用する。

この首甲をもつ武人は、線刻のみで表現される挂甲が組み合わさる。図6の●で示し

たように、茨城県行方市小幡、東茨城郡茨城町下石崎、同町村社神塚神社境内（以上東京国立博物館 1980）、小美玉市舟塚古墳の 2 例など霞ヶ浦北辺地域にややまとまって見られ、その他は埼玉県深谷市上敷免、群馬県伊勢崎市赤堀町（梅沢ほか 1979）という利根川流域に点在する。茨城県の上記 4 遺跡の近隣には茨城町小幡北山埴輪窯跡（大塚ほか 1989）が存在し、上半身と下半身が別造りであることなどを含め、すべて小幡北山埴輪窯からの供給と考えられる。また、ひたちなか市馬渡埴輪窯でも上下別造りの人物埴輪が出土しているので、両埴輪製作工人集団は相互に関係があると思われ、常陸型人物埴輪と呼ぶことができるだろう（日高 2000c）。茨城県例以外は上下別造りではないが、特徴的な首甲を表現し、それ以外の諸特徴を共有するという共通性において相互の関係があった可能性がある。その場合、利根川を媒介としていたことはいうまでもない。

円形浮文を伴う線刻の挂甲をもつ武人埴輪については、突帯に円形浮文をつける首飾りが組み合わさる。図 6 の▲で示した通り、千葉県山武郡域と茨城県那珂郡東海村の両地域に集約している。円形浮文を伴うものは埼玉県行田市埼玉稲荷山古墳（斎藤ほか 1980）[7]と群馬県高崎市八幡原（梅沢ほか 1979）にも存在するが、後者は短甲武人埴輪であり前者も同様の甲冑となる可能性がある。茨城県は那珂郡東海村照沼周辺、同村石神小学校校庭内古墳の二例（以上茨城県史編さん委員会 1974）、東海村（塩谷 1990、茨城県立歴史館 1990）、伝茨城県（茨城県立歴史館 1990）であり、千葉県は山武郡芝山町殿部田 1 号墳の 2 例（浜名ほか 1980）、山武郡横芝光町小川台 5 号墳（浜名ほか 1975）である。圧倒的に茨城県では東海村に集中しており、時期を決する資料は欠くものの、この地域の特徴といえよう。また、千葉県でも山武郡域周辺に限って、いずれも人物埴輪導入期の資料にのみ確認できる。両者を結ぶ積極的な根拠として、首飾りの同一性がある。円形浮文を伴う線刻の挂甲は、それ自体極めて特筆されるものであり、まして突帯に円形浮文をつける首飾りが必ず組み合わさるということは、両者に直接的な関係を想定せざるを得ない。東海村の諸例は時期不詳であるが、殿部田 1 号墳、小川台 5 号墳が共に 6 世紀中葉に限定されることから、東海村の諸例も同時期となる可能性がある。

1-5 「幅広一枚肩甲」をもつ武人埴輪（図 1－7･8）

「幅広一枚肩甲」とは上半身の約三分の一程度の幅広の粘土板を前半分の肩から胸に

かけて貼り付けたもので、当然脇の下の部分が浮くことになる。さらに、その肩甲に縦方向の線刻を施すものである。この特徴は人物埴輪としては奇異なものであり、類例は極めて少なく、同一の工人集団による製作と言えるだろう。また、この「幅広一枚肩甲」をもつものが武人埴輪以外にも存在する。それは、千葉県香取市城山 5 号墳（丸子ほか 1978、千葉県立房総風土記の丘 1982、城倉 2007b）、茨城県筑西市西保末（東京国立博物館 1980）出土の人物埴輪である。これらの関係は後述するが、系譜的につながりをもつものである。図 7 の●は、「幅広一枚肩甲」をもつ武人埴輪とその系譜をひく人物埴輪を含めた分布を示している。「幅広一枚肩甲」をもつものは茨城県結城市林と取手市市之代 3 号墳（諸星ほか 1978）、千葉県成田市竜角寺 101 号墳（安藤ほか 1988、萩野谷 1990）であり、特に市之代 3 号墳と竜角寺 101 号墳は、その他の人物埴輪にも共通する要素が極めて多く、かつて安藤鴻基が指摘した通り（安藤 1988:p.142）、製作した工人集団を同じくするものであろう。この要素は結城市林にも見られ、同一系譜の武人埴輪であることが分かる。

「幅広一枚肩甲」をもつ人物埴輪は、もう一つの特徴として顔を円筒埴輪の製作と同じく輪積みで作り上げた後、顎部には粘土を貼り付けず、必然的に顎部がそのまま円筒状になっていることがあげられる。つまり顎の表現を欠くのである。この特徴は明瞭に他の埴輪と区別することができ、その特徴を有する人物埴輪は同一工人集団の製作とみて間違いない。千葉県香取市城山 5 号墳、山武郡芝山町宝馬 127 号墳（武部ほか 1982）、茨城県筑西市西保末、結城郡八千代町城山古墳群（保坂 1961、八千代町史編さん委員会 1987・1988）、同町白山塚古墳（八千代町史編さん委員会 1987・1988）、筑西市女方 3 号墳（平沢 1974）があげられる®。つまり、印旛沼の北方を中心とする利根川の流域に端を発した武人埴輪における「幅広一枚肩甲」という表現方法が、香取市城山 5 号墳・八千代町城山古墳群などの段階で全身像の男子埴輪に導入され、顔を円筒のまま作る技法に変化した。その後、茨城県は鬼怒川沿いに、千葉県は内陸の山武郡域にも伝わった。竜角寺 101 号墳、市之代 3 号墳は共に 6 世紀中葉であり、他はすべて 6 世紀後半代である。なお、宝馬 127 号墳の円筒埴輪は「下総型円筒埴輪」である。「幅広一枚肩甲」と「下総型埴輪」との関係を考える上で極めて重要な古墳であり、後述の際詳しく検討する。

1-6 「下総型」人物埴輪・円筒埴輪（図1－9・10・11、図9－2）

轟俊二郎が提唱した「下総型円筒埴輪」は、その分布がほぼ後世の下総の地域に限定され、かつその形態が極めて特徴的なために、その認定が容易なことで知られる一群である（轟 1973）。形象埴輪に関しても轟はその特徴を述べているがあまり深入りはせず、主として円筒埴輪の検討にその特徴を見出だしている。しかし、円筒埴輪と同様に「下総型」の人物埴輪にも特徴的な表現が存在する。以下、その特徴を列挙すると、①女子は顔の眉毛からの上下比が1≧1である、②鼻が丸棒で先端が膨らむ、③男子美豆良は頭部両側面の円孔から出ている、④腕は五指を表現せず先端が平たくなるしゃもじ形である、⑤男子の胸に◎の線刻をもつものがある、⑥双脚の人物像は作らない、⑦盾持ち人の盾は上下もしくは上に突帯をつけ三角文を上下四段に施すかまったくの無文である。当然円筒埴輪は「下総型円筒埴輪」となる。

図7の▲は上記の特徴を有する「下総型」の人物埴輪と、「下総型円筒埴輪」の分布を示したものである。分布の中心は、轟俊二郎が指摘する通りいわゆる「下総」の地域に存在する。しかし、現在では下総の地域を飛び越えて分布する「下総型」埴輪がかなり確認されてきている。それは栃木県小山市飯塚古墳群（小山市史編さん委員会 1981）や千葉県千葉市中原古墳群（千葉市史編纂委員会 1976）、市原市小谷1号墳（高橋康 1992）、山武郡芝山町鶏塚古墳（浜名ほか 1975）、同町宝馬1号墳（浜名ほか 1980）、同町宝馬127号墳、山武市松尾町朝日ノ岡古墳例（軽部 1957a）などである。飯塚古墳群例は利根川に流れ込む思川流域であり、中原古墳群例は村田川流域、小谷1号墳例は養老川流域、鶏塚古墳例・宝馬1号墳例・宝馬127号墳例・朝日ノ岡古墳例は木戸川流域である。これらの状況は、点在するということに大きな特徴があることから、河川に沿って流入したと考えられる（ただし山武郡域の場合は、内陸部にまず出現することから直接的に流入した可能性もあり、かつそれぞれが「下総型」埴輪の在り方としては極めて例外的であることが指摘できる）。

1-7 女子埴輪の島田髷における特徴的な技法（図2－1・2・3・4・5）

島田髷に関しては、杉山晋作の分類がある（杉山 1983）。その分類と新たに設定した特徴を合わせて、あらためて分類すると以下のようになる。①髷の中心部分がくびれて板

状のもの「●」、②①と同形態で膨らみのあるもの「○」、③くびれがないもの（四角形）「▲」、④分銅形のもの「■」、⑤髻が中空になっているもの「□」である。その分布を示したものが図8である。

その分布を見ると、ほとんどの場合①の形態のものであり、このタイプが関東地方における一般的な島田髻の形である。また、②は群馬県邑楽郡大泉町古海（東京国立博物館 1983）のみである。このタイプの島田髻は近畿に通有のものではあるが、関東では類例が少なく基本的に①の亜式ととらえることができる。③は千葉県山武郡芝山町宝馬 127 号墳出土の島田髻のみに認められるものであり、形ほぼ正方形である。他に類例がまったく存在しない。④は茨城6例、埼玉4例、群馬10例、千葉6例、栃木6例が知られる。ほぼ関東全域に広がるタイプの髻である。時期の判明している資料は6世紀後半代であり、その時期に広く分布していたことが分かる。⑤は極めて特徴的な髻であり、その分布も各地に点在するというものであるが、群馬県西部と埼玉県の小前田古墳群（瀧瀬 1986）に群在する。茨城県は潮来市大生西 1 号墳（大場ほか 1971）、同市棒山2号墳（海老原ほか 1981）、埼玉県は大里郡寄居町小前田8号墳、同9号墳、同10号墳、群馬県は高崎市観音山古墳（石塚ほか 1980、梅沢 1990、梅沢ほか 1998）、伊勢崎市横塚（後藤 1931、東京国立博物館 1983）、富岡市富岡 5 号墳（外山 1972）である。富岡5号墳例は6世紀中葉、他は6世紀後半代である。女子埴輪の島田髻の中で製作技法上特筆されるものは、髻の中に空洞を作っている⑤である。群馬県高崎市観音山古墳は④と並存し、④の髻をもつ人物埴輪とは櫛の表現方法が異なるなど、製作工人集団の違いを表していると考えられる。なお、同古墳の④の髻をもつ人物埴輪はいわゆる「三人童女」と呼ばれる人物埴輪であり、栃木県足利市葉鹿熊野古墳（島田 1929、橋本 1980）や同市水道山古墳（足利市史編さん委員会 1979）出土の人物埴輪と工人集団を同じくするものである。伊勢崎市横塚は、古墳そのものは不明であるが、女子の服装に「裳」と考えられるスカート状の着衣を表現しているなど観音山古墳との共通性が極めて高い。富岡市富岡5号墳は髻のみ確認されたものでその他の要素は不明であるが、①の髻と共存する。埼玉県は大里郡寄居町小前田 8・9・10 号墳から出土しており、これらよりやや新しい 11 号墳からは⑤の髻ではなく①の髻が出土している。おおむね 6 世紀後半から末に位置付けられるが、11 号墳の段階で供給元（工人集団）の交替があったと考えられる。茨城県の大生西1号墳と棒山2号墳は共

に6世紀後半の古墳であり、両古墳は顎鬚をもつ人物埴輪が出土している。千葉県山武郡域との関連が指摘できるわけだが、山武郡域には⑤の髷の要素はない。むしろ予想される髷の形態は①ないし④であり、⑤の髷となる可能性はないはずである。それにもかかわらず、⑤の髷が出土しているということは、他地域との関連が予想されるであろう。

そこで群馬・埼玉両地域の他要素を比較してみると、櫛の表現が群馬県高崎市観音山古墳、伊勢崎市横塚ともに粘土を櫛の形に作って貼りつけたものであり、埼玉県例はいずれも櫛の表現はない。茨城県潮来市棒山2号墳の二例は粘土を櫛の形に作って貼りつけたものある（大生西1号墳例は不明）。さらに、着衣表現は潮来市大生西1号墳に結び紐の表現が認められ、高崎市観音山古墳、伊勢崎市横塚ともに結び紐の表現が認められるが、埼玉県例はいずれも何の表現もない。このことから、潮来市大生西1号墳と棒山2号墳の女子埴輪は、群馬県高崎市観音山古墳・伊勢崎市横塚に人物埴輪を供給していた埴輪製作工人集団が深く関わっていたと考えられる。埼玉県大里郡寄居町小前田古墳群の諸例は、今のところ髷以外に共通性はないが、群馬県東部地域とは距離的にも近接しており、上述した 11 号墳の段階での在り方を鑑みれば何らかの関係があったと予想される。観音山古墳は墳丘長 97mの前方後円墳で、大生西 1 号墳は墳丘長 71mの前方後円墳、棒山 2 号墳に至っては径 15m内外の方（円）墳である。いずれにしてもその時期は 6 世紀後半である。

2．関東地方における人物埴輪の共通表現とその背景

これまでの検討で、同一埴輪製作工人集団の製品が広範囲に分布しており、多くの場合出土品の時期が極めて限られることも判明した。具体的には6世紀後半（須恵器でいうとおおむね TK43 型式・円筒埴輪ではⅤ期新）の時期より以前の段階では、広範囲の分布がなく、比較的安定的な供給と需要という関係が限られた地域内で発展していたことを示すものと考えられる。この時期になぜ埴輪製作工人集団が、地盤である地理的に近接する生産地→供給先という、安定した関係以外に新開地をめざしたのだろうか。

ここでは 6 世紀後半の埴輪製作工人集団の動向を考える上で、極めて重要であると思われる以下の三点について、さらに検討を加えてみたい。1）埼玉県鴻巣市生出塚埴輪窯

から供給された埴輪について、2）顎鬚をもつ人物埴輪について、3）「下総型」埴輪についてである。以上の検討を各地における「首長墓」の中での埴輪の在り方と、古墳そのものの状況とを考え合わせ、周辺の古墳をも含めて考察したい。

2-1 埼玉県鴻巣市生出塚埴輪窯から供給された埴輪について

図 3 の●と▲は、ともに生出塚埴輪窯の製品ないしその工人が直接関係した埴輪を出土した古墳の分布を示している。その分布をみると、基本的に現在の元荒川や荒川流域を中心に分布域が限られていることが分かる。つまり、生出塚埴輪窯を中心としてその周辺地域に河川を利用して搬出されていたと考えられるのである。しかし、その関係を飛び越えて利根川流域の千葉県流山市東深井 7 号墳や市川市法皇塚古墳（小林ほか 1976）[9]などにも供給され、さらに千葉県市原市山倉 1 号墳には荒川を下って東京湾を渡ったと考えられる[10]。

生出塚埴輪窯の工人集団は、6 世紀を通して埼玉県行田市に所在する埼玉古墳群に安定して埴輪を大量供給していた。生出塚埴輪窯で同時期にどれだけの窯が操業していたかは今の所不明であるが、埼玉古墳群に埴輪を供給するためには、かなり大規模な操業を行っていたと思われる。埼玉古墳群には基本的に生出塚埴輪窯と南比企丘陵の窯から、埴輪が供給されていたと考えられる（若松 1989、日高 1992 など）。今のところ生出塚埴輪窯は 6 世紀前半代、南比企丘陵の窯跡群の候補の一つである東松山市桜山窯跡（水村ほか 1982）は 6 世紀中葉頃までその操業年代の上限がおさえられる。つまり、稲荷山古墳の築造年代の窯が確認されておらず、丸墓山古墳（杉崎 1988）の築造年代に関しても極めて微妙である。しかし、埴輪それ自体の形（プロポーション、調整など）や胎土などは、二子山古墳と丸墓山古墳（杉崎 1987、若松ほか 1992）の間に断絶があるとは考えられず、上述の窯跡へと繋がっていくと考えられることから、供給体制にそれほどの変化を考える必要はないだろう。このことから、埼玉古墳群の埴輪動向は、生出塚・南比企丘陵の動向と換言することもできよう。また、この埼玉古墳群の墳形は前方部が発達した形を採用しており、周堀は長方形という共通の特徴をもっている。

さて、埼玉古墳群の 6 世紀後半の動向は、鉄砲山古墳（杉崎ほか 1985）が大型古墳で大型品（多条突帯）の円筒埴輪を並べる最後の古墳である。そして、将軍山古墳（岡本

1997）に至り中型品で3・4条突帯の円筒埴輪と変化している。円筒埴輪の年代とMT85窯相当からTK43型式までの須恵器ハソウが4点出土している点は（岡本1994、1997）、ともに合致するもので、おおむね6世紀後半と考えられる。この将軍山古墳の内部主体は、房総半島の南端で産する房州石を用いた右片袖の横穴式石室である。大型古墳の築造はこの時点で終了し、中型古墳である中の山古墳（若松ほか1989）が築造される。同古墳からは、TK209型式の須恵器坏蓋といわゆる「須恵質埴輪壺」が出土している。円筒埴輪の断片が出土しているが、これは鉄砲山古墳からの流れ込みの可能性があり、中の山古墳には埴輪が並べられていなかったようである⑪。このことは重要な意味を持つ。つまり、埼玉古墳群では大型古墳はもとより、中型の前方後円墳から小円墳に至るまで、埴輪を立て並べていたのに、同古墳群の最終末中型前方後円墳には埴輪が立て並べられていないということになるのである。

確かに全国各地には、埴輪を持たない最終末の前方後円墳は存在する。しかし、それは埴輪そのものが衰退してからの築造と考えられ、中の山古墳のようにまだ消滅していない時期に築造された古墳で埴輪を採用せず、代用品とも取れる「須恵質埴輪壺」を立て並べている例は他にはなく、胎土分析結果により南比企丘陵の窯から供給された可能性が高いとされていた（三辻1989）。その後「須恵質埴輪壺」は、南比企丘陵の大里郡寄居町末野窯跡（3号窯）で生産されたものであることが判明している（福田1998）。また、埼玉古墳群最後の首長墓は、二重堀をもち墳丘の一辺が42mを測る方墳の戸場口山古墳であり（埼玉県立さきたま資料館1994）、同古墳の築造をもって埼玉古墳群は終焉を迎える。

中の山古墳とほぼ同時期と考えられる行田市酒巻14号墳（中島ほか1988）は、人物埴輪を11体、馬4体、大刀、靫など多数の形象埴輪を樹立していた。この古墳は埼玉古墳群からさらに北側に入った利根川沿いに位置する、直径42mの円墳である。この埴輪は焼成や胎土の特徴から、生出塚埴輪窯産の可能性もあるが、表現の細部に違いも認められる（第1章参照）⑫。胎土分析では生出塚産であるという結果が出ている（三辻1989）。千葉県市原市山倉1号墳出土人物埴輪との服装や姿態の共通性からも、生出塚埴輪窯からの供給である可能性もあるが、いずれにせよ山倉1号墳とほぼ同時期であると考えられる。

当時の河川が重要な交通ルートであったことを指摘したが、仮に生出塚埴輪窯から酒巻14号墳に埴輪を供給するとしたら、埼玉古墳群を横目に見ながら利根川沿いに酒巻古

墳群を目指さなくてはならない。それを考えると、やはり中の山古墳に埴輪を供給していないのは奇異な感じがする。直径 42mの円墳である酒巻 14 号墳の築造を、埼玉古墳群を築造した人々が知り得なかったとは考えられないからである。ただし、酒巻 14 号墳の埴輪が生出塚産でなく、吉見町和名窯産とするならば、また少し状況は異なるものとなる。中の山古墳に生出塚産の埴輪が客体的にしか供給されない事情と同様に、酒巻 14 号墳には和名埴輪製作工人集団から埴輪が供給されたのだろうか。しかし、細部に違いはあるものの、生出塚埴輪製作工人集団と無関係に酒巻 14 号墳の埴輪が作られたとも思えない。その意味で、中の山古墳に大里郡寄居町末野窯跡（3 号窯）の製品が主体的に供給されていることは極めて重要である。

この動向をまとめると、6 世紀後半に房総半島南部から将軍山古墳へ房州石が運ばれたが、その直後の中の山古墳には生出塚埴輪窯からの埴輪供給ルートが絶たれる。前後して、生出塚埴輪窯の工人達は利根川を下って市川市法皇塚古墳（墳丘長 54mの前方後円墳）、さらに市原市山倉 1 号墳（墳丘長 45mの前方後円墳）にまでその供給範囲を広める。この房州石は、千葉県富津市南端の鋸山周辺で採集される石材であり（高橋・本間 1994）、同市所在の内裏塚古墳群とその周辺の古墳に、内部主体の構築材料として用いられてきたものである。この地域以外では前述の将軍山古墳、法皇塚古墳、東京都葛飾区柴又八幡神社古墳[13]、北区赤羽台古墳群（高橋・本間 1994）に限られている。なお、柴又八幡神社古墳は「下総型」埴輪を伴出する。つまり安定的な供給地に他地域の影響が導入された直後、それまで首長によって庇護されていたかのような埴輪製作工人集団との関係が打ち切られる。このことによって、埴輪が広範囲に拡散したのではなかろうか。

以上の検討により、生出塚埴輪窯の工人集団による埴輪の拡散現象は、埼玉古墳群との関係の断絶と深く関係して生じたと言えるだろう。だとすると、かつて轟俊二郎が広範囲に分布する「下総型円筒埴輪」の状況をして提唱した、「巡歴手工業者」としての埴輪製作工人（轟 1973:p.102)という生産体制（橋本博文の「移動型」）は、少なくとも生出塚埴輪窯の動向に関しては適応できないと考えられる。つまり、橋本が地域的に比較的まとまりをもつ「固定分散型」と設定した安定的な大量供給先がなくなったことにより、必要に迫られ拡散せざるを得なくなったのであろう。

2-2 顎鬚をもつ人物埴輪について

顎鬚をもつ人物埴輪は千葉県山武郡域に群在し、さらに茨城県潮来市周辺とその他の地域に散在していた（図 4）。この中でも埴輪製作工人集団が首長墓に安定して供給していたのは千葉県山武郡域であり、その他の地域は千葉県山武郡域に比べ供給された古墳の規模は縮小し、かつ散在していることも判明した。ではこの山武郡域の首長墓（前方後円墳）の築造状況はどのようなものであったのか、順を追って述べてみたい。6 世紀中葉頃には墳丘長 30m級の前方後円墳が築かれる（山武郡横芝光町小川台 5 号墳・山武郡芝山町殿部田 1 号墳）。そして、6 世紀後半に至り、墳丘長 90mを測る山武市西の台古墳（軽部 1958、杉山ほか 1991）、墳丘長 40mの芝山町高田木戸前 1 号墳（浜名ほか 1975）が築かれ、その後同町宝馬 1 号墳（墳丘長 25m）、鶏塚古墳（墳丘長 40m）と小型の前方後円墳が築かれる。その後墳丘長 76mを測る松尾町朝日ノ岡古墳、墳丘長 88mの横芝光町殿塚古墳、墳丘長 58mの横芝光町姫塚古墳が築かれる。ここで埴輪を樹立する首長墓の築造は終り、墳丘長 63mの山武市不動塚古墳（日本大学考古学会 1952、軽部 1955）、そして郡内最大かつ最後の前方後円墳である墳丘長 117mの山武市大堤権現塚古墳（軽部 1957b、平山 1993）が築かれる。大堤権現塚古墳の後には駄ノ塚古墳・駄ノ塚西古墳という方墳が築かれ、当地域の古墳文化は終焉を迎える。この内顎鬚をもつ人物埴輪は、埴輪をもつすべての大型古墳すなわち西の台古墳・朝日ノ岡古墳・殿塚古墳から出土し、姫塚古墳、さらに直径 45mで二重の周堀をもつ円墳の山武市経僧塚古墳（市毛 1971、滝口ほか 1988）からも出土している。

埴輪の消滅時期は 6 世紀後半から末頃に位置付けられるが、ここで注目したいのは周堀の形態である。この地域の古墳の周堀には、相似形（前方後円形）から盾形への移行が認められ、最後の前方後円墳である大堤権現塚古墳に至るまで、盾形の周堀の流れが追える。しかし、殿塚古墳・姫塚古墳だけが長方形の周堀を持っている。かつて、市毛勲は全国の長方形周堀を集成し、その系譜関係を予察したことがある（市毛 1974b）。この予察の多くは否定されるものであるが、いちはやく長方形周堀の重要性を指摘した点は注目される。長方形周堀は全国的に見て類例が少なく、関東地方では埼玉古墳群にほぼ限定される特徴である。殿塚古墳・姫塚古墳になぜ長方形周堀が採用されたのかは、当地域を考える上で極めて重要である。

殿塚古墳・姫塚古墳の内部主体は凝灰岩質砂岩を用いた横穴式石室であり、これらの後に築造された大堤権現塚古墳に至っては、石積の単位さえ不明になってしまうほどの軟質の岩石を用いている。古墳の築造の状況を考えた場合、周堀を含めた古墳の形、内部主体の形・構築材料は、その古墳の被葬者ないし造墓勢力の独自性を主張する上で重要な意味を持つと考えられる。図４の▲は長方形周堀という独特の形態をもつ古墳の分布を示したものである。埼玉古墳群の他では、千葉県香取市舟塚原古墳（市毛ほか 1971、車崎 1980・1992）、旭市御前鬼塚古墳（千葉県教育庁文化課 1990）、山武郡横芝光町殿塚古墳、同姫塚古墳、千葉市人形塚古墳の４例である。このうち舟塚原古墳は茨城県の霞ヶ浦北部地域の人物埴輪（鉾田市不二内例など）に極めて類似した埴輪をもつ（車崎 1980・1992）。人形塚古墳に顎鬚をもつ人物埴輪があり、周堀形態も殿塚古墳などと同じ長方形であるということは、双方の直接的な関係を示していると考えられる。また、人形塚古墳の周堀内からは、第１主体部とは別に筑波山から運んできた雲母片岩を用いた箱式石棺が１基確認されている。同様に顎鬚の人物埴輪を出土した、山武市経僧塚古墳でも同じ主体部の在り方をしており、人形塚古墳の築造の契機に山武郡域の造墓勢力が関係していたことを示している。長方形周堀をめぐっては、埴輪の在り方や内部主体の在り方まで極めて類似しているのである。したがって、殿塚古墳・姫塚古墳にのみ山武郡域の他の首長墓とは異なる、埼玉古墳群独特の長方形周堀が採用されていることは、少なからず埼玉地域の造墓勢力が介在していたと予想できる。なお御前鬼塚古墳は、内部主体の様相や埴輪の有無などは不明であるが後期古墳と推定されており、墳丘長 80mという大型の前方後円墳である。

以上の検討で顎鬚をもつ人物埴輪を生産していた工人集団は、山武郡域の首長墓に安定して供給を行っていたことが判明した。そして、その最終段階において他の造墓勢力の介在や、他の工人集団の関わりが明らかになった。この動向は、まさに前述の生出塚埴輪窯の工人集団の動向と合致する。生出塚埴輪窯の工人集団の状況と同様に、山武郡域の首長との関係断絶、つまり埴輪をもたない不動塚古墳や大堤権現塚古墳の在り方が、この顎鬚をもつ人物埴輪の分布を散在化させる要因となり、行き先の古墳も山武郡域に比べると著しく規模を縮小するものになったのであろう。そして、顎鬚をもつ人物埴輪の広範囲な分布は、生出塚埴輪窯産の埴輪の場合と同様に、「移動型」という埴輪生産体制ではなく、

結果として移動せざるを得なかったと考えられる。

2-3 「下総型」埴輪について

「下総型」埴輪を出土した古墳は管見に触れたもので、40 例を数える。この内千葉県香取市城山 1 号墳（丸子ほか 1978）が、墳丘長 68mの前方後円墳で最大であり、その他は小型前方後円墳、および円墳から出土している。例外として、墳丘長 76mの前方後円墳の千葉県山武市町朝日ノ岡古墳がある（城倉 2006a）。この規模で「下総型」埴輪を出土する古墳は他に存在しないが、同古墳の場合円筒埴輪は山武郡域に通有の円筒埴輪である。さらに同古墳の「下総型」埴輪は双脚の男子人物埴輪であり、前述した「下総型」人物埴輪の特徴である双脚の人物像を作らないということからは逸脱する。城山 1 号墳の場合、全身像の人物埴輪は「下総型」埴輪の工人集団とは異なる埴輪製作工人集団の手によるものであり、けして全身像を作ることはなかったのである。このことから、朝日ノ岡古墳例は他の「下総型」埴輪の工人集団と古墳との関係とは、まったく異質なものがあったことを示唆しているのである。さらに女子人物埴輪が、円筒埴輪と同様に山武郡域に通有の女子であり、顎鬚をもつ人物埴輪も存在することからすれば、朝日ノ岡古墳での「下総型」埴輪の在り方は、本来「下総型」埴輪の工人集団は小型前方後円墳、円墳に埴輪を供給する体制であった（表１）ものが、大型前方後円墳に埴輪を供給することになり、その製作方針を変更したと理解することができそうである。それゆえ顎鬚をもつ人物埴輪と同様に、全身像を供給したのであろう。その場合城山 1 号墳における双脚の人物埴輪（武人）を作った工人集団が、深く関わっていると考えられる[14]。

いわゆる「下総型」埴輪の成立の年代を、筆者は 6 世紀の後半代に求めている。6 世紀中葉段階の人物埴輪の中に、その系譜が求められるからである。まず、「下総型」人物埴輪には、鼻が丸棒で先端が膨らむという特徴があることは前述した。この特徴は 6 世紀後半において、「下総型」人物埴輪以外では認められず、「下総型」人物埴輪の特徴の中でも他との判別が極めて易しいものである。この特徴が 6 世紀中葉段階の、千葉県成田市正福寺 1 号墳（印旛郡市文化財センター1991、宇田 1996）の人物埴輪に認められるのである[15]。丘陵を幾つか隔てた所には「下総型」埴輪を出土した同市荒海 15 号墳（荒海古墳群発掘調査団 1975）があり、その系譜として極めて良い条件を揃えている。なお、6 世紀

後半代において「下総型」人物埴輪以外でこの特徴をもつものに成東町経僧塚古墳の人物埴輪がある。ただし、その数は他の特徴をもつものからすると極端に少なく、主体となるものではない[15]。あるいは「下総型」埴輪の工人集団が、一部の作業工程に関わった痕跡なのかもしれない。

また、盾持ち人の盾が上下もしくは上に突帯をつけ、三角文を上下 4 段に施すという特徴は、成田市竜角寺 101 号墳における盾持ち人の盾文様が上述の特徴の祖型となっていると考えられる（図 9）。この盾文様は一般の盾形埴輪にもその系譜を辿ることができず、竜角寺 101 号墳の盾持ち人と「下総型」の盾持ち人との関係を示すものと考えられる。これらの下地があって、「下総型」人物埴輪は出現したと考えられる。さらに興味深いことに、正福寺 1 号墳の女子埴輪の髷はソケット状の突出を頭頂部に差し込んで製作されているが、竜角寺 101 号墳の人物埴輪もこの特徴をもつ。つまり、「下総型」埴輪の祖型としてとらえた別々の古墳の埴輪が、女子埴輪の髷の製作技法という点で極めて密接に関係していたことが分かる。

なお、武人埴輪の「幅広一枚肩甲」の系譜が同様に成田市龍角寺 101 号墳例に求められ、その特徴が円筒状の顎部をもつ双脚の男子人物埴輪に発展していったことは前述した。興味深いことに、この系譜と「下総型」人物埴輪の系譜が、まったく同じ工人集団から発したことになる。つまり、千葉県香取市城山古墳群における 1 号墳と 5 号墳の人物埴輪は、まったく異質と考えられてきたのだが、実はその成立にあたっては同じ根元にあったのである。このことを確認すれば、城山古墳群内における異質な埴輪の存在は理解できる。同一工人集団から派生した 2 つの工人集団が、同一古墳群の首長墓にそれぞれ埴輪を供給したのである。その時期は、5 号墳がやや先行し、1 号墳がその後で構築されたといえる。

以上の「下総型」埴輪をめぐる系譜と展開をモデル化したものが、図 10 である。それぞれの関係は「＝」が同時期性と工人集団の関係の深さを示し、「→」がその展開の方向を示している。この図で示した通り、「下総型」埴輪に関してはその展開の仕方が極めて散在的であり、安定した供給先がまったく分からない。古墳群として比較的まとまって分布するのは我孫子市子の神古墳群・高野山古墳群（藤本ほか 1969、轟 1973）のみである。「下総型」埴輪を出土する古墳はおおむね 10～20mの円墳と 30～40mの小型の前方後円墳であり（表 1）、墳丘長 68mの前方後円墳の小見川町城山 1 号墳は、その供給先とし

ては最も主たる古墳であったといえる。城山古墳群には他に5基の前方後円墳が存在するが、最も規模の大きい古墳は1号墳である。さらに、4号墳は「下総型」埴輪を出土しているが、その規模は35mの前方後円墳であり（丸子ほか 1978）、前述した「下総型」埴輪を出土する古墳の規模にも合致する。つまり、城山古墳群において「下総型」埴輪の工人集団が埴輪を供給した首長墓といえる古墳は1号墳だけである。

以上の検討から、前述の①と②の検討においては、広範囲に広がる埴輪の存在が「巡歴手工業者」としての工人集団を否定する状況にあったが、「下総型」埴輪に関しては安定した大量供給先（すなわち何代にも亘る首長墓群）がない以上、轟俊二郎の想定を否定することはできない。しかしながら、少なくとも前述した朝日ノ岡古墳における「下総型」埴輪の状況は、「巡歴手工業者」としての工人集団の姿ではなく、むしろ①と②の検討で明らかになった工人集団の在り方に通じるといえよう。いずれにせよ、「下総型」埴輪の生産遺跡の発見を待たなくてはならないだろう。

以上の検討結果は、それぞれが独立的な様相を示しているように見えるが、周堀の形態や内部主体を構成する石材、さらに主体的ではないがその造墓に関わっている状況など、強弱の違いはあるがすべての要素が関係していることを示している。その相関関係をモデル化したものが図 11 である。「＝」はその主たる供給先を示し、「→」は散在的に広がった供給先を示している。矢印の順番は、必ずしも時間的な推移を示すものではない。

3．結論と課題

ここでは、以上の検討で明らかになったことを再確認すると共に、問題点としての今後の課題を提示したい。本論では、関東地方の人物埴輪に対して、従来の配置研究やそこから派生する形象埴輪の意義という視点ではなく、人物埴輪における共通表現という見地からその工人集団に対して検討を試みた。これまでの検討で以下の点が指摘できる。

1．人物埴輪の共通表現は、河川交通および海を媒介とした関係に集約される。その拡散の状況からすると、6 世紀中葉段階までは各地の埴輪に独自性があるが、6 世紀後半代に急激に、かつ広範囲にその共通性が拡散する。

2．共通表現の拡散という現象は、安定した墳丘長 100m級の前方後円墳という供給

先との関係断絶の結果、各地の中型もしくは小型の前方後円墳に供給されるようになったことを示している。

3．生出塚埴輪窯の工人集団は、埼玉古墳群や周辺の地域に安定して埴輪を供給していたが、埼玉古墳群という大量供給先との関係断絶の結果、極めて遠方にまでその供給範囲を広げざるを得なかった。

4．顎鬚をもつ人物埴輪の工人集団は、山武郡域の首長墓に安定して埴輪を供給していたが、その最終段階において他の造墓勢力の介在や他の工人集団の関わり、そして山武郡域の首長との関係断絶の結果、広範囲にその供給範囲を広げざるを得なかった。

5．轟俊二郎が広範囲に分布する「下総型」埴輪の状況を、「巡歴手工業者」としての埴輪製作工人集団と想定していたが、その想定は「下総型」埴輪以外の埴輪で広範囲に分布するものには適応できない。

以上のように 6 世紀後半において、各埴輪製作工人集団は安定的な埴輪の生産と供給という関係が断絶した。この状況は、極めて急激な変化であったと推察される。これらの急激な変化は、その直後に訪れる前方後円墳の消滅という状況と無関係ではないだろう。まず各地の巨大前方後円墳に埴輪が立て並べられなくなり、その動きに呼応して各地の埴輪製作工人集団が、その他の地域に拡散していったのである。しかし、拡散してはいったものの、その地域でも次代には埴輪が立て並べられなくなり、埴輪製作工人たちはついに行き場を失った。その後、前方後円墳の築造は終わったのである。つまり、関東地方の古墳時代における社会構造に、大きな変革期があったと考えられる。前方後円墳の消滅の前段階に、古墳に埴輪を立て並べる状況そのものがなくなり、さらにその前段階において埴輪製作工人集団の拡散という過程が次々と起こっていったのである。

ここで、前方後円墳の消滅ということが新たに浮かび上がってきた。埴輪の消滅との関わりは極めて密接であり、その点を具体的に検証していかなければなるまい。また、前述した 6 世紀中葉頃の千葉県山武郡域の人物埴輪と茨城県北部（東海村周辺）との関係も、後者の年代的位置付けが未詳なため関係性の指摘にとどまった。形象埴輪のその他の種類のものに関しても、総合的な検証を必要としていることはいうまでもない。さらに本論で若干触れた、内部主体の問題や墳形、副葬品に関してもさらなる検討を行わなければなる

まい。今後の課題として提示しておきたい。

註

⑪ 犬木努は「下総型円筒埴輪」について工具の同一性の認定を同一古墳はもとより別々の古墳との間にも認められることを述べている（犬木 1994、1995、1996、2005）。

⑫ 第1・2章参照。

⑬ 円筒埴輪は川西宏幸の研究（川西 1978、1979、1988）を基本とし、V期を古・中・新の三つに区分した。また、須恵器に関しては田辺昭三の研究（田辺 1966、1981)をもとにした。

⑭ 栃木県域・つくば市周辺に存在する顎鬚を蓄える人物埴輪については、終章で改めて詳述する。

⑮ 本資料は現在所在が確認できず、大野雲外が描いた図版で判断した。

⑯ 藤田和尊は頸甲を3類9型式に分類している（藤田 1988）。

⑰ 同古墳から出土した眉庇付冑を被る武人の体部と考えられるが、細片のため詳細は不明である。

⑱ 栃木県下野市三王山星宮神社古墳から、前面に格子目を入れた板状粘土を装着する双脚人物像が出土している（秋元・飯田 1999）。顔を円筒状に作る特徴や細い腕などは「幅広一枚肩甲」をもつ人物埴輪との関連が考えられる。

⑲ 法皇塚古墳から出土している家形埴輪は、縦横に突帯を貼った特異なもので、他に行田市埼玉瓦塚古墳からも同様な家形埴輪が出土している。この家形埴輪は生出塚埴輪窯から数例出土しており、生出塚埴輪窯特有の家形埴輪であるといっていい。このことから、法皇塚古墳に埴輪を供給していたのは、生出塚埴輪窯の工人集団であると考えられる。

⑳ 山崎武は胎土や焼成の印象が山倉1号墳と生出塚埴輪窯とで異なるようで、生出塚埴輪窯の製品を運んだのではなく、現地で製作した可能性を指摘したが（山崎 1987a:p64)、その後、山倉1号墳の埴輪を製作した31号窯が確認され、山倉1号墳の埴輪が生出塚埴輪窯で生産されたことが確実となった（山崎 1999・2006）。

㉑中の山古墳から出土している埴輪の破片は、「須恵質埴輪壺」に比べると量も少ないが、最終段階の埴輪の破片である。近在する古墳からの流入も想定されるが、中の山古墳にも数は少ないが埴輪の樹立があった可能性があることを太田博之氏にご教示いただいた。

㉒ 第1章註④で示したように、酒巻14号墳の埴輪は埼玉県比企郡吉見町和名埴輪窯で生産された可能性がある（太田 2010）。

㉓ 同古墳は調査の結果墳丘長20m以上の帆立貝形古墳と推定されている（谷口 1991、谷口ほか

1992、2009）。

⑧ 城山1号墳の双脚の武人埴輪に関しては、その武具表現などの条件から栃木県佐野市車塚例、同市中山 8 号墳例、小山市飯塚古墳群例などに埴輪を供給した工人集団との関連性を考えている。

⑨ 印旛郡市文化財センターの宇田敦司氏のご配慮で、後述の荒海 15 号墳出土埴輪とともに実見させていただいた。その際、成田市竜角寺 K112 号墳（小牧 1994）出土の「下総型埴輪」についても貴重なご教示を得た。

⑩ 芝山はにわ博物館の浜名徳永氏、浜名徳順氏のご配慮で、同館所蔵の他の資料を含め実見させていただくとともに、調査時の状況など多くのご教示を得た。

図版引用文献

図1－1　山崎 1987b　実測図 79 を再トレース一部改変

図1－2　米田 1976　第 6 図を再トレース一部改変

図1－3　滝口ほか 1988　5 頁の写真をトレース

図1－4　石塚ほか 1980　第 103 図を再トレース一部改変

図1－5　東京国立博物館 1980　図版番号 41-1 を写真トレース

図1－6　浜名ほか 1980　第 11 図を再トレース一部改変

図1－7　諸星ほか 1978　第 21-1 図を再トレース一部改変

図1－8　東京国立博物館 1980　図版番号 60-4 を写真トレース

図1－9・10　水戸市立博物館 1983　写真 67・66 を写真トレース

図1－11　東京国立博物館 1980　図版番号 37-1 を写真トレース

図2－1　安藤ほか 1988　第 33-1 図を再トレース一部改変

図2－2　東京国立博物館 1983　図版番号 174-1 を写真トレース

図2－3　武部ほか 1982　第 13 図、第 19 図（髷 3）を再トレース一部改変

図2－4　中島ほか 1988　図 32 を再トレース一部改変

図2－5　梅沢ほか 1979　写真 37 をトレース

図3～8・10・11　筆者作成

図9－1　安藤ほか 1988　第 32 図を再トレース一部改変

図9－2　東京国立博物館 1980　図版番号 38-2 を写真トレース

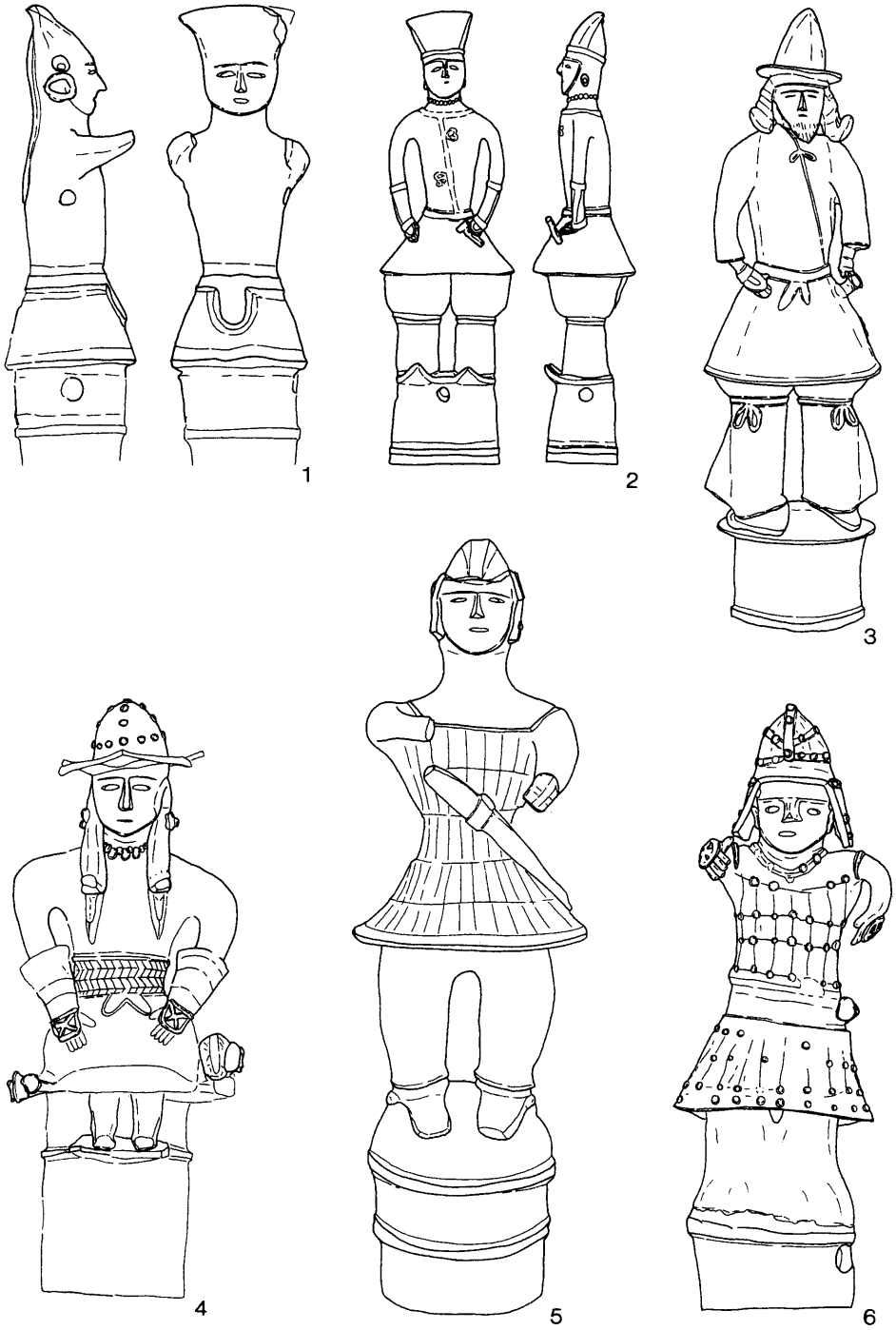


図1－①　共通表現をもつ人物埴輪典型例

1.生出塚 15～24 号窯　2.山倉 1 号墳　3.姫塚古墳　4.塚廻り 3 号墳　5.北浦町小幡　6.殿部田 1 号墳

（縮尺 1/10、2・3 は 1/20）

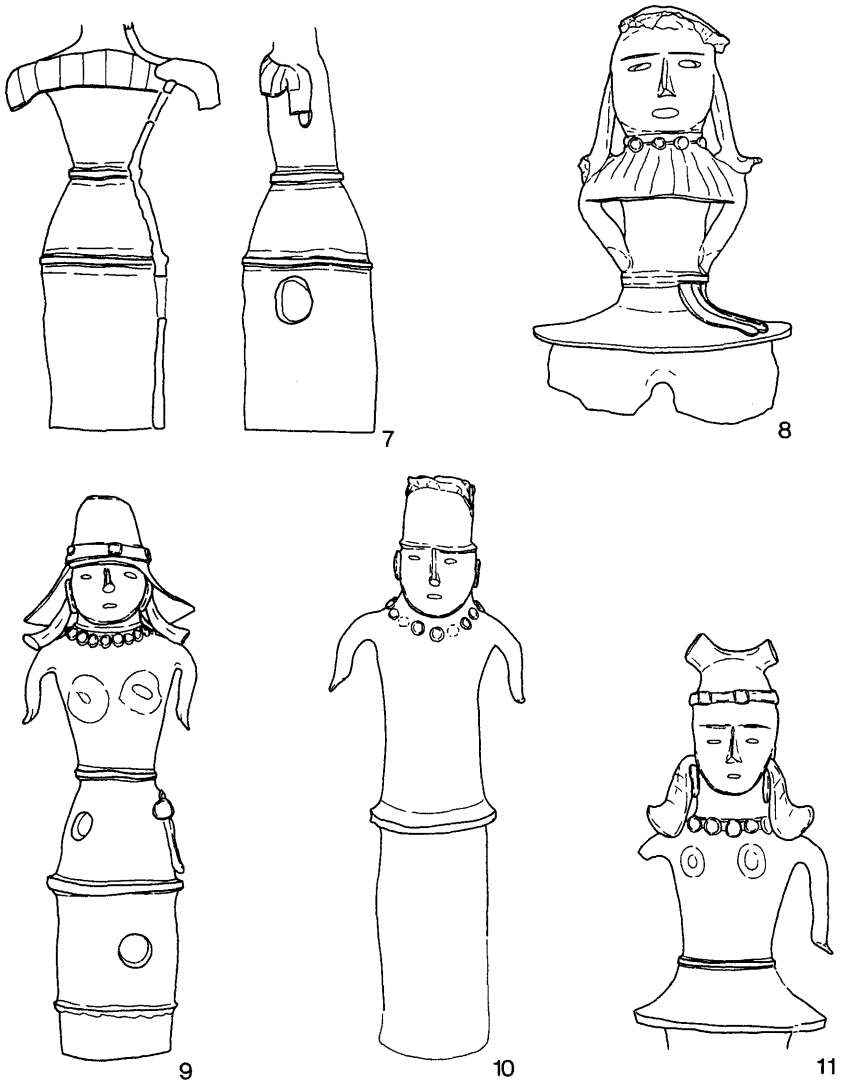


図1—②　共通表現をもつ人物埴輪典型例

7.市之代3号墳　8.西保末　9・10.城山1号墳　11.下横場塚原34号墳（縮尺 1/10）

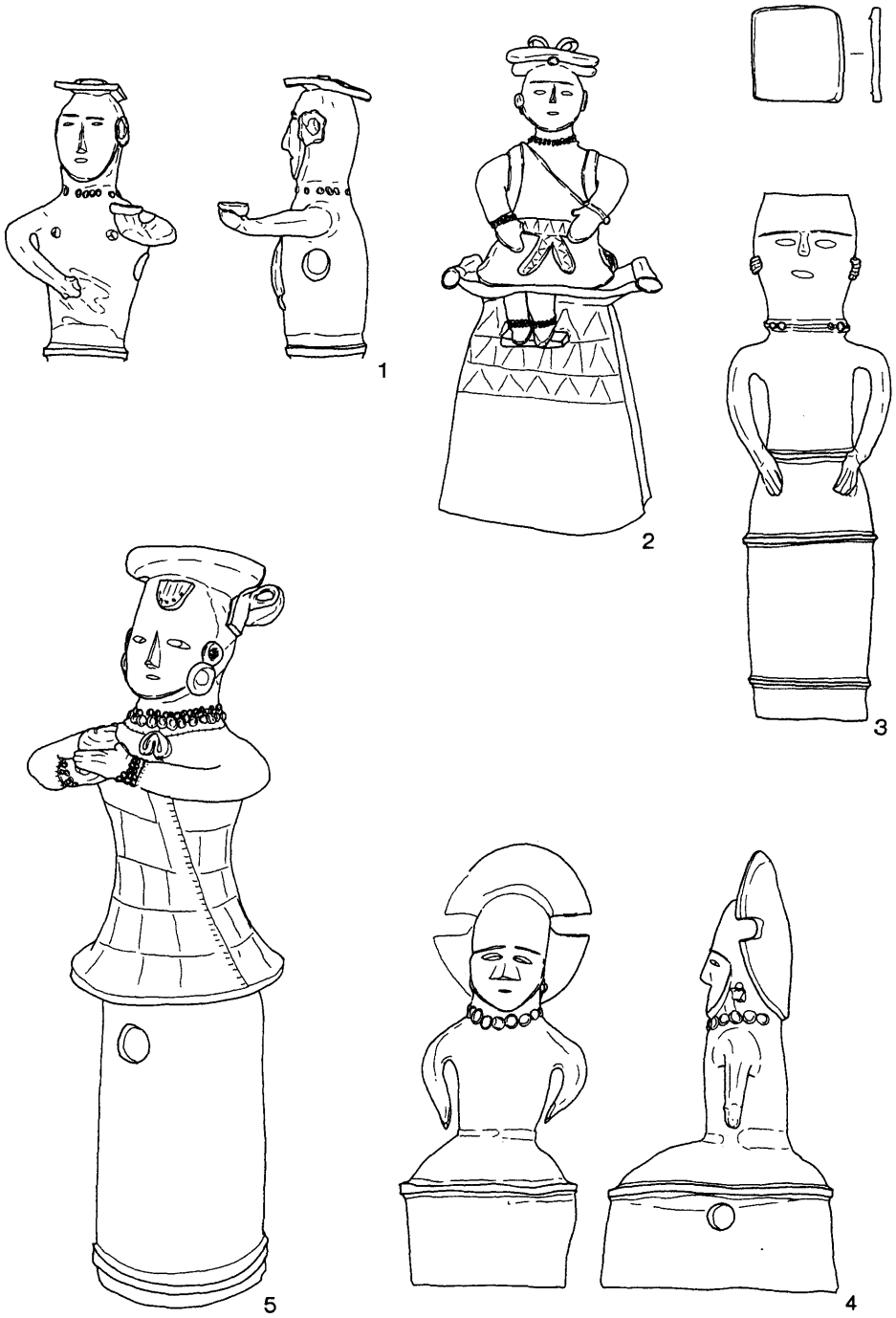
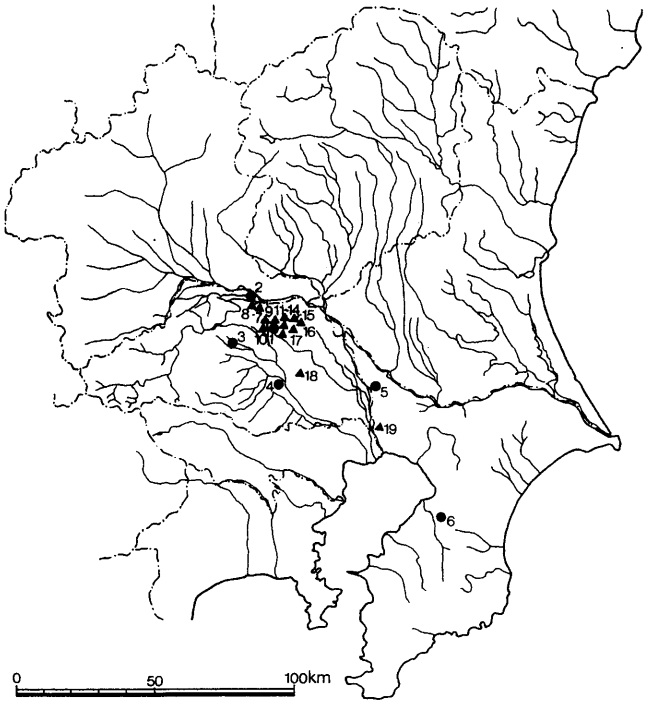


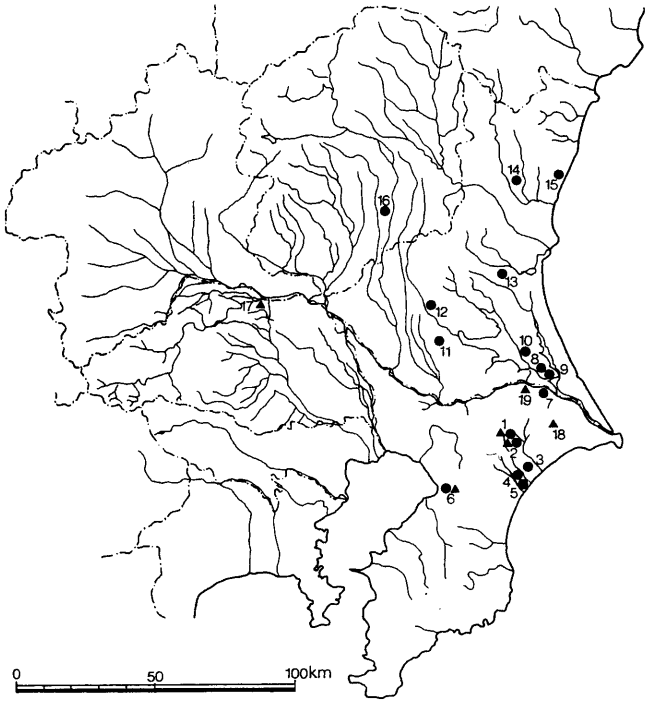
図 2　女子埴輪の島田髷典型例

1.竜角寺 101 号墳　2.古海　3.宝馬 127 号墳　4.酒巻 14 号墳　5.観音山古墳



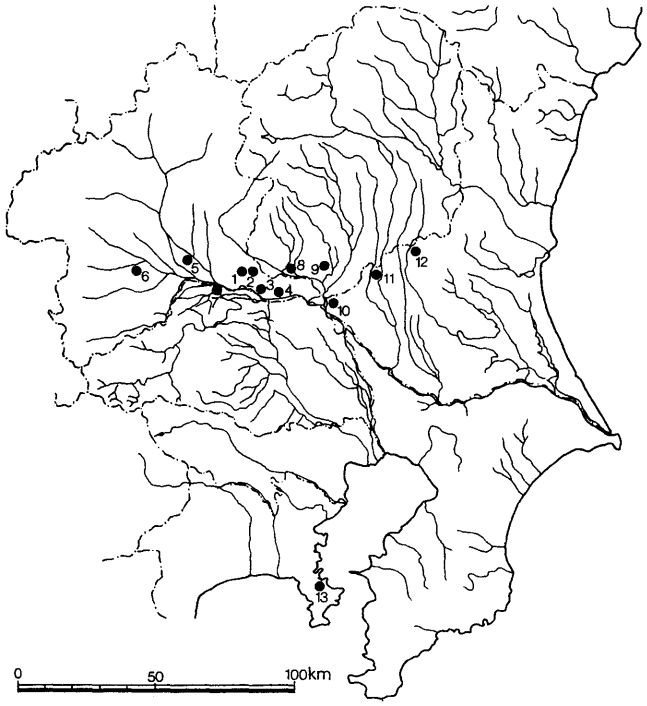
1．埼玉県鴻巣市生出塚埴輪窯跡
2．　北埼玉郡南河原村南河原
3．　東松山市三千塚古墳群
4．　川越市南大塚４号墳
5．千葉県流山市東深井７号墳
6．　市原市山倉１号墳
7．埼玉県行田市埼玉古墳群
8．　行田市酒巻14号墳
9．　北埼玉郡吹上町下忍古墳群
10．　鴻巣市箕田古墳群
11．　鴻巣市安養寺古墳群
12．　鴻巣市笠原古墳群
13．　鴻巣市生出塚古墳群
14．　鴻巣市新屋敷古墳群
15．　北埼玉郡騎西町小沼耕地１号墳
16．　南埼玉郡菖蒲町東浦古墳
17．　南埼玉郡菖蒲町柏間古墳群
18．　大宮市井刈古墳
19．千葉県市川市法皇塚古墳

図３　頭巾状被りものの人物埴輪（●）と生出塚埴輪窯の工人集団による埴輪（▲）の分布



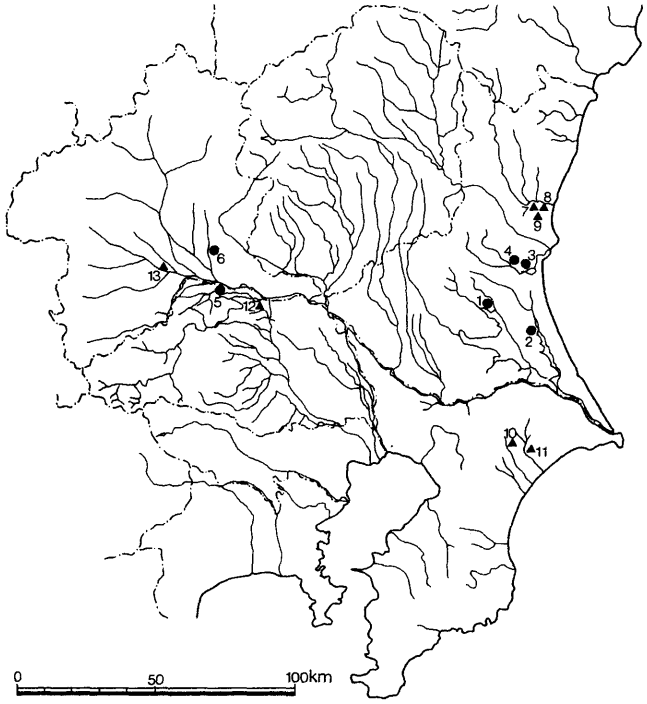
1．千葉県山武郡横芝町姫塚古墳
2．　山武郡横芝町殿塚古墳
3．　山武郡松尾町朝日ノ岡古墳
4．　山武郡成東町経僧塚古墳
5．　山武郡成東町西の台古墳
6．　千葉市人形塚古墳
7．　佐原市内
8．茨城県行方郡潮来町棒山２号墳
9．　行方郡潮来町大生西１号墳
10．　行方郡麻生町矢幡
11．　筑波郡
12．　つくば市中台古墳群
13．　東茨城県茨城町伝小幡北山
14．　久慈郡金砂郷村大方鹿島神社古墳
15．　日立市
16．栃木県真岡市若旅大日塚古墳
17．埼玉県行田市埼玉古墳群
18．千葉県香取郡干潟町御前鬼塚古墳
19．　香取郡神崎町舟塚原古墳

図４　顎鬚をもつ人物埴輪（●）と長方形周堀をもつ前方後円墳（▲）の分布



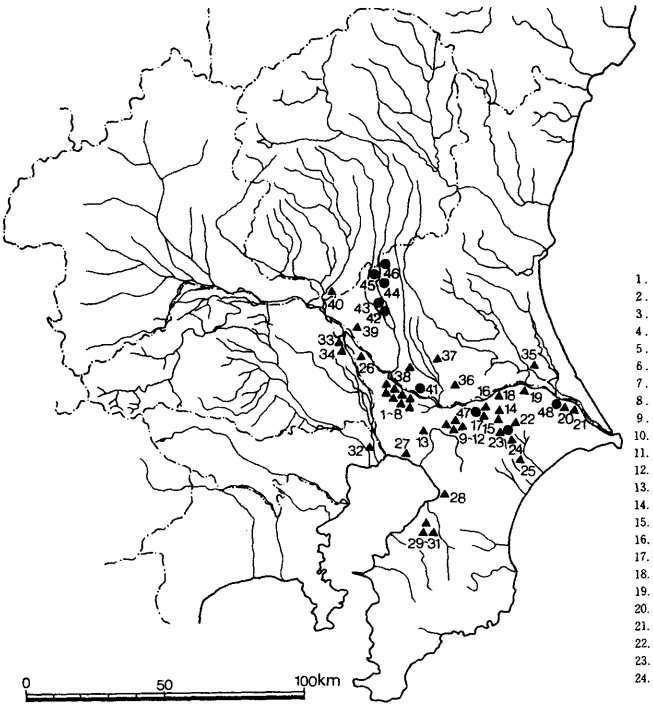
1．群馬県太田市塚廻り３号墳
2．　　太田市塚廻り４号墳
3．　　邑楽郡大泉町
4．　　邑楽郡千代田村新福寺
5．　　前橋市朝倉
6．　　多野郡吉井町下條２号墳
7．埼玉県深谷市上敷免
8．栃木県佐野市七軒町
9．　　小山市飯塚31号墳
10．茨城県古河市高合２号墳
11．　　結城市林
12．　　西茨城郡岩瀬町
13．神奈川県横須賀市蓼原古墳

図５　垂下帯付き美豆良をもつ人物埴輪の分布



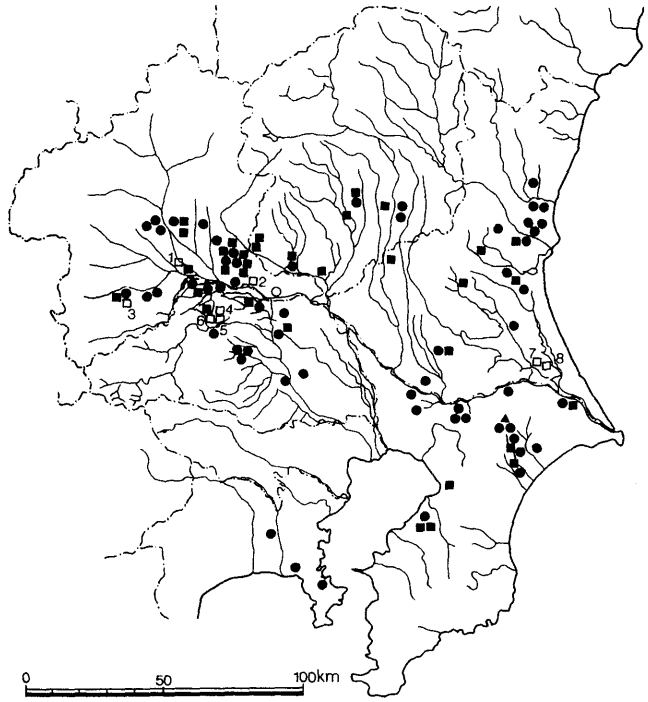
1．茨城県新治郡玉里村舟塚古墳
2．　　行方郡北浦村小幡
3．　　東茨城郡茨城町下石崎
4．　　東茨城郡茨城町村社神塚神社境内
5．埼玉県深谷市上敷免
6．群馬県佐波郡赤堀町
7．茨城県那珂郡東海村照沼周辺
8．　　那珂郡東海村石神小学校校庭内古墳
9．　　那珂郡東海村
10．千葉県山武郡芝山町殿部田１号墳
11．　　匝瑳郡光町小川５号墳
12．埼玉県行田市埼玉稲荷山古墳
13．群馬県高崎市八幡原

図６　首甲を着ける武人埴輪（●）と円形浮文を伴う線刻の挂甲をもつ武人埴輪（▲）の分布



1．千葉県我孫子市高野山１号墳
2．　　我孫子市高野山２号墳
3．　　我孫子市高野山３号墳
4．　　我孫子市高野山４号墳
5．　　我孫子市子の神古墳
6．　　我孫子市子の神６号墳
7．　　我孫子市子の神９号墳
8．　　我孫子市子の神14号墳
9．　　印旛郡印旛村油作Ⅱ号墳
10．　　印旛郡印旛村西の原１号墳
11．　　印旛郡印旛村吉高山王古墳
12．　　印旛郡印旛村大木台２号墳
13．　　佐倉市将門２号墳
14．　　成田市荒海15号墳
15．　　成田市大竹
16．　　印旛郡栄町竜角寺37号墳
17．　　印旛郡栄町竜角寺K112号墳
18．　　香取郡下総町猿山２号墳
19．　　佐原市片野23号墳
20．　　香取郡小見川町城山１号墳
21．　　香取郡小見川町城山４号墳
22．　　山武郡芝山町宝馬１号墳
23．　　山武郡芝山町宝馬127号墳
24．　　山武郡芝山町蘭塚古墳
25．千葉県山武郡松尾町朝日ノ岡古墳
26．　　野田市太子堂門倉公園前古墳
27．　　習志野市鷺沼Ａ号墳
28．　　千葉市中原古墳群
29．　　市原市小谷１号墳
30．　　市原市岩塚古墳
31．　　市原市根田130号墳
32．東京都葛飾区柴又八幡神社古墳
33．埼玉県北葛飾郡杉戸町目沼７号墳
34．　　北葛飾郡杉戸町目沼11号墳
35．茨城県行方郡牛堀町日天月天塚古墳
36．　　竜ヶ崎市長峰17号墳
37．　　つくば市下横場塚原17号墳
38．　　水海道市七塚６号墳
39．　　猿島郡境町百戸マイゴウ
40．栃木県小山市飯塚古墳群
41．茨城県取手市市之代３号墳
42．　　結城郡八千代町城山古墳群
43．　　結城郡八千代町白山塚古墳
44．　　真壁郡関城町西保末
45．　　結城市林
46．　　下館市女方３号墳
47．千葉県成田市竜角寺101号墳
48．　　香取郡小見川町城山５号墳

図７　幅広一枚肩甲の武人埴輪とその系譜をひく人物埴輪（●）および下総型埴輪（▲）の分布



1．群馬県高崎市観音山古墳
2．　　伊勢崎市横塚
3．　　富岡市富岡５号墳
4．埼玉県大里郡寄居町小前田８号墳
5．　　大里郡寄居町小前田９号墳
6．　　大里郡寄居町小前田10号墳
7．茨城県行方郡潮来町榛山２号墳
8．　　行方郡潮来町大生西１号墳

図８　中空技法の島田髷（□）と各種島田髷の女子埴輪の分布

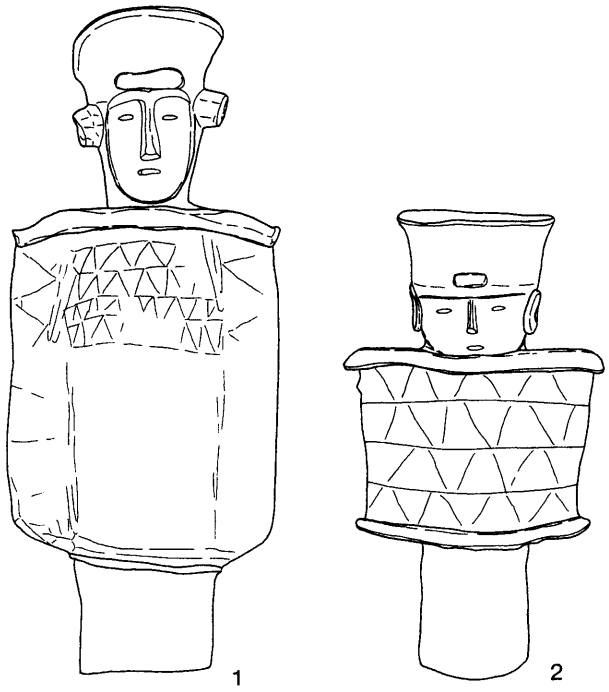


図 9　下総型の盾持ち人の盾文様とその祖形

1.竜角寺 101 号墳　2.下横場塚原 34 号墳（縮尺 1/10）

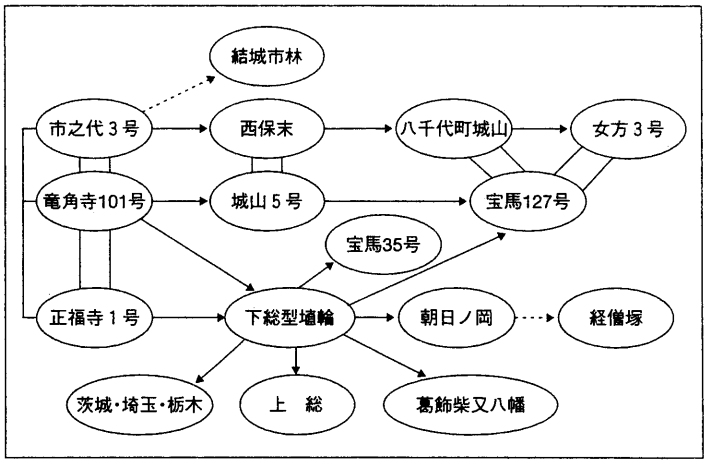


図 10　下総型埴輪をめぐるその系譜と展開

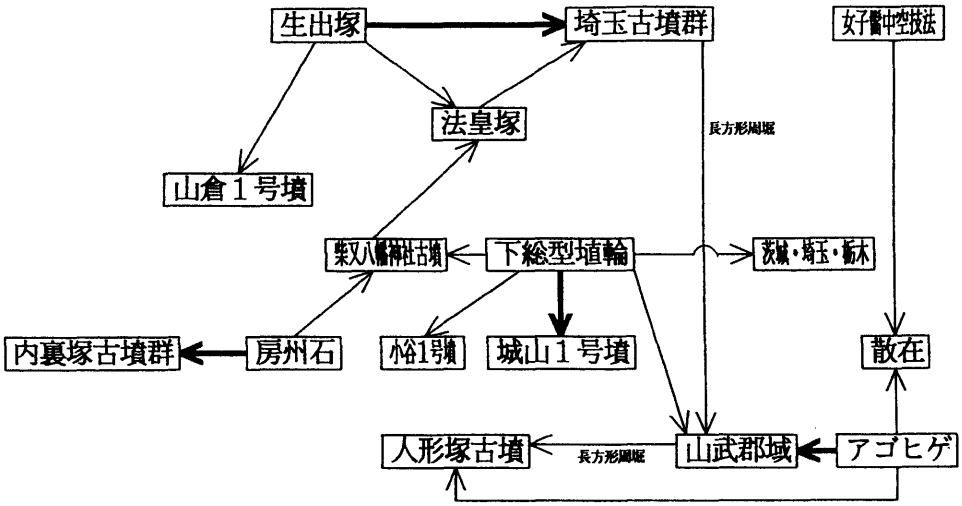
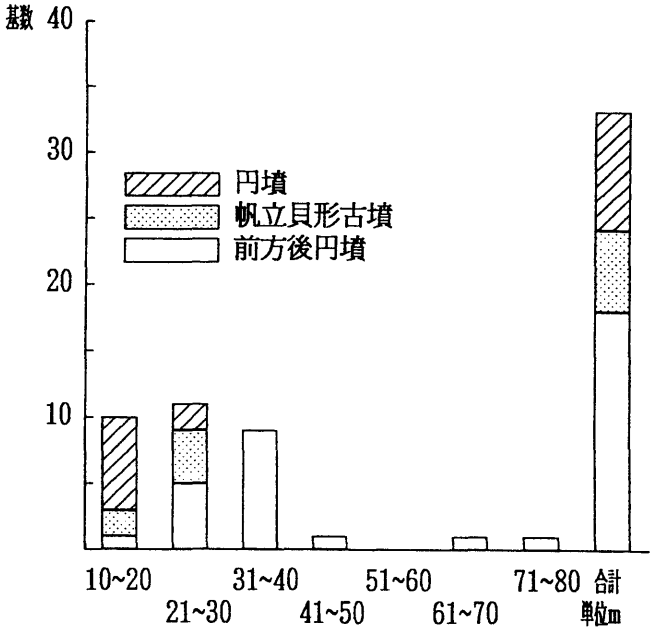


図 11　6 世紀後半における埴輪を中心とした地域関係

表 1　下総型埴輪出土古墳の墳形・規模別基数分布



第4章　人物埴輪の東西比較

－論点の抽出－

はじめに

埴輪研究の長い歴史のなかで、そこに存在している埴輪がどのような影響下でつくり上げられたものなのかは、常に意識・言及されてきたことである。例えば千葉で出土した埴輪が群馬や埼玉の埴輪製作工人集団の影響でつくられたとか、群馬で出土した埴輪が畿内の埴輪製作工人集団の直接的な影響でつくられたなどと説明されてきた。一方、他地域とは明らかに異なる特徴を有する埴輪の分布が、ある程度の地域的まとまりをもって存在していることもあきらかである。さらに言えば出土したある古墳の埴輪が、その古墳以外には共通性をもたない場合もあり得るだろう。例えば前期古墳の円筒埴輪などはその傾向が強く、他地域との比較をすることを困難にさせている①。

本章では、地域を異にする2者を結びつけるための基本的な要素について、研究史をひも解きながら考えてみたい。もとより、西日本全体がすべて同じ要素で埴輪がつくられていた訳ではないし、それは関東以北についても同様である。むしろ、せまい地域ごとに独自な表現様式をもって埴輪がつくられていたことは言を待たないであろう。しかし、さまざまな埴輪が同時多発的につくられ始めたわけではないだろうし、そこには何処からかの影響・伝播があって始めて人物埴輪がつくられる様になったはずである。そこで、各地域の初期人物埴輪を取り上げて何処に共通性があるのか、それともないのかを確認したい。かなり雑駁な議論となることは否めないが、副題にあるように論点を抽出し今後の検討課題を提示することを目的として論議を進めていきたいと思う。

1．埴輪表現の異同について

筆者は前章までに関東地域の人物埴輪について、共通表現という切り口で埴輪製作工人集団の動向を検討してきた。それは、完成した人物埴輪の外面を観察することで共通要素を抽出しようとしたものである。それは、共通した製作技法をもとにしてつくられた人物埴輪の、外面観察によって検討可能な最終形としての共通表現を見出そうとしたのである。

さらに、共通表現とは必ずしも製作技法に規制されない外面的な特徴を比較する上でも有効な視点であると考える。例えば市毛勲が論及した人物埴輪の顔面彩色の検討があげられる（市毛 1984）。

工人集団の異同については、轟俊二郎の下総型埴輪論が特筆される（轟 1973）。人物埴輪の特徴として、1）顔面下部に粘土を貼りつけた後縁をなでつけない、2）眉が顔面の左右一杯に細い粘土紐を貼付けてその位置からは眉というより顔面の上端を画するものである、3）鼻は粘土棒を貼りつけたままのものがある、4）腕のつくりは小さく手の先はヘラのようで指の表現がない、などをあげている。しかし最も重要な点は、「下総型人物埴輪の特徴は疑いもなく明白であるが、個々の要素の分解してしまうと、そこには下総的な何物ものこらない（轟 1973：p.77）」と慎重な態度を明らかにしていることである。我々が常々全体的な「雰囲気」では「…地域の埴輪」と認識しているものも、それらを部位ごとに比較したときには、他地域のものとさしたる違いはないという結論となってしまうことに通じるのである。他人の空似をどのように排除するのか、第１章で共通表現検討から若干の試みをおこなった。

また、小林行雄の作風の指摘も先駆的業績として高く評価されるものである（小林 1974）。たとえば、栃木県真岡市亀山の人物埴輪における美豆良の共通性や埼玉県熊谷市上中条の人物埴輪の目の切込みのあとのヘラによる押さえ、茨城県鉾田市不二内古墳の人物埴輪における目・口・眉のつくりの共通性など、筆者の共通表現検討は小林の研究に学んだものである。さらに小林は、不二内古墳と茨城県小美玉市玉里舟塚古墳の人物埴輪の目・口・眉のつくりに共通性を認めると共に、いわゆる分離造形の人物埴輪同士にも共通した埴輪製作工人集団の関与を想定している[2]。

その後、杉山晋作による千葉県山武郡域の人物埴輪の研究（杉山 1976）、女子埴輪の髷の形に着目した分布の在り方についての研究（杉山 1983）、車崎正彦による茨城県久慈型埴輪の研究（車崎 1980）などにより、関東地域の埴輪製作工人集団による製作品の分布とその影響の下につくられた製作品の抽出が成果をあげ、工人集団の交流の様を描くことができるようになってきた。稲村繁の関東全域に目配りした人物埴輪の部位ごとの分布の在り方は（稲村 1999）、地域性を抽出するとともに、地域間交流の実体の把握に成功している。

そこで、まず西日本の人物埴輪の埴輪表現のうち、通有であると考えられる諸特徴を提示する。その後、それらの特徴が東海、関東以北にどれだけ適応できるのか、あるいは適

応できないのか、を考えてみたい。

2．西日本地域の埴輪表現

人物埴輪が作られるようになった最初の地域、震源地③はどこか。大方の人々はその答えを「畿内」と答えるであろう。筆者も同様に考えており、畿内の埴輪の特徴が認識できれば、他地域の埴輪への影響を考えることもできるだろう。各地の初期人物埴輪が畿内からの影響で作られるようになったのであれば、当然共通する埴輪表現になってしかるべきと考えるからである。ただし、畿内を含む西日本地域の人物埴輪は、全体の形が分かる資料となると案外少ないのが実状である。そのようななかであえて畿内の人物埴輪に共通する特徴を述べるとするならば、以下のような点があげられようか。

①球形に作った頭部を内面から押し出してふっくらした顔をつくる（若松 1988、今津 1988）。

②腕は中空である。

③女子埴輪の袈裟状衣（塚田良道分類Ⅱa）と襷（後藤 1939、塚田 2007）。

④女子埴輪島田髷は粘土板を折り曲げて（あるいは重ねて）リアルに表現する。

⑤男子埴輪の線刻表現のうち、顎部から目尻にかけて環状に線刻を施すものと、鼻部の左右に翼状に線刻を施すもの（神尾 2001）。

①については、今津節生が宮城県伊具郡丸森町台町 103 号墳（5 世紀末？）と大阪府高石市大園古墳（5 世紀末）の女子埴輪の顔面部の共通性を指摘している。畿内の人物埴輪の多くが同様の製作技法をとっている。福岡県八女市立山山 13 号墳（6 世紀中葉）でも確認できる特徴である。若松良一は畿内の人物埴輪が頭部を球形につくることを指摘し、関東地域における初現期の埼玉県行田市埼玉稲荷山古墳の女子埴輪（5 世紀末）では、顔面が粘土板を貼り付けて成形していることを指摘している。永井正浩も同様な点を指摘すると共に、大阪府大阪市長原 45 号墳（5 世紀前半）の甲冑形埴輪に人面部が表現されているものや大阪府藤井寺市墓山古墳（5 世紀前半）の盾持ち人かと思われる埴輪が顎部を貼りつけて成形していることから、2 系統が存在していたことを指摘している（永井 1998・2002）。塚田良道も同様の視点を提示され、6 世紀中葉以降に頭部を球形につくらず円筒状に作った上方の開口部を板状の髷で塞ぐという関東からの影響が入ってくることを示した（塚田 2007：p.86）。

②は最初期の人物埴輪から基本的に同様の作り方をしている。福岡県立山山 8・13 号墳（6 世紀中葉）や宮崎県児湯郡新富町百足塚古墳（6 世紀中葉）の人物埴輪も同様である。しかし、6 世紀中葉以降の埴輪をみると中実の腕のつくりを持つものが確認できる。例えば京都府京田辺市堀切 7 号墳（6 世紀中葉）や大阪府堺市日置荘遺跡 P-1 灰原出土品（6 世紀後半）などがあるが、畿内の埴輪の特徴とは異なるものに中実の腕の類例があるように思われる。塚田良道によれば奈良県天理市荒蒔古墳（6 世紀前半）、同県生駒郡平群町烏土塚古墳（6 世紀後半）の女子埴輪も同様の特徴を有しているようである（塚田 2007:p.86）。

③については、西日本全域の女子埴輪に見られる特徴である。女子の多くがこの衣服を着ている。このことは、塚田良道のⅡa という分類にあたり、その他の特徴を加味して「近畿様式」とされたものである（塚田 2007）④。例えば、福岡県飯塚市小正西古墳（6 世紀前半）や宮崎県百足塚古墳の女子埴輪なども同様の着衣表現が確認できる。

④については実際の髪型を忠実に表現していると思われるが、これも西日本全域に認められる特徴である。福岡県小正西古墳でも確認できる。ただし、このようなリアルな表現でないものも存在する。例えば兵庫県たつの市タイ山 1 号墳（6 世紀中葉）や島根県仁多郡奥出雲町常楽寺古墳（6 世紀中葉）、同県松江市岩屋後古墳（6 世紀後半）などは板状の髷である（塚田 2007）。

⑤については、近畿地方で発見された男子埴輪の多くが同様の特徴をもっている。ただし、すべての男子埴輪に認められるわけではなく、一つの古墳のなかで線刻をもつ個体とそうでないものがある。全体像が判明しない事例が多いのでその違いは判然としないが、神尾和歌子が示したように（神尾 2001：pp.36-37）、甲冑を身に着けている男子や馬曳きの男子に認められることは注目される。階層的に上位の男子には認められない特徴といえるかもしれない。島根県松江市平所埴輪窯跡（6 世紀前半）では鼻部の左右に翼状に線刻を施すものがあり、畿内の人物と同様の特徴を有していることがわかる。

以上のように、比較的西日本には通有の特徴を持つ人物埴輪を多く見出すことができる。福岡県や宮崎県までかなり共通要素をもっていると言えるだろう。次には上記①～⑤の諸特徴が東海・関東以北地域でどれだけ確認できるのか、確認していきたい。

3．東海地域の埴輪における西日本的要素の有無

東海地域の埴輪生産は須恵器生産と密接な関係をもって操業されている。淡輪技法やC

種ヨコハケなどを特徴にもつ須恵器系埴輪の分布は東海地域を中心に広がっている（川西 1988、赤塚 1991、鈴木 1994、小栗 1997、辻川 2007 など）。畿内の埴輪づくりとは異なる体制での生産が予想される。なお、三重県域の埴輪は技術的に伊勢湾沿岸地域と深い繋がりを有するものも多く認められることから、東海地域に含めて記述したい。

円筒埴輪が須恵器系埴輪である愛知県岡崎市古村積神社古墳（6 世紀前半）の人物埴輪は、畿内の人物埴輪と同様の特徴をもっており、①②③④⑤のすべてが合致する特徴を有している。静岡県湖西市利木古墳（6 世紀前半）では③④が、同県浜松市郷ヶ平 6 号墳（6 世紀前半）では②③が、同神内平 1 号墳（5 世紀末）では②④が、同辺田平 1 号墳（6 世紀前半）では②③④が確認できる。辺田平 1 号墳の腕は報告によればいわゆる木芯中空である[5]。また、女子の島田髷については、折り曲げた髷が接着せず浮いた状態になっている点は畿内の女子とは異なるものである。淡輪技法を導入している三重県域についても、松阪市常光坊谷 4 号墳（5 世紀末）や鈴鹿市寺谷 17 号墳（5 世紀末）、同石薬師東古墳群（5 世紀末）などで、断片資料も含めると①②③④⑤のすべてが確認できる場合が多い。

北陸地域について言及しておく。石川県小松市矢田野エジリ古墳（6 世紀中葉）の埴輪は東海地域との関連が指摘されてきたものであるが（小栗 1997、辻川 2007）、③④が確認できる。ただし④は折り曲げた髷が接着せず浮いた状態になっている点は畿内の女子埴輪とは異なる。

4．関東以北地域の埴輪における西日本的要素の有無

関東地方の人物埴輪の多くは顎部に粘土を貼りつけて顔面部を形成しているものが多い。例えば初期人物埴輪と考えられている群馬県邑楽郡大泉町古海松塚 11 号墳（5 世紀中葉）の女子埴輪は球形に近い頭部ではあるが、補充粘土をもって顎部をつくっている。腕は②の中空である可能性もある。③の服装ではなく、単に襷をかけるだけの女子埴輪の胴部が確認できることから、共通点は見出せない。同じく初期人物埴輪と考えられている埼玉県本庄市生野山 9 号墳（5 世紀中葉）の埴輪は断片資料が多く全体像が判明しないが、②は確認できる。埼玉県行田市埼玉稲荷山古墳（5 世紀末）の埴輪や群馬県高崎市保渡田八幡塚古墳（5 世紀末）の埴輪では、合致するものがない。後者の女子埴輪は塚田の女子埴輪の服装のⅡｂないしⅡｃ（塚田 2007）である。③の袈裟状衣と襷をかけるという汎西日本に見られる特徴を有する資料は群馬県古海出土の椅座女子像（時期未詳）と同県伊勢崎市

境上武士（6 世紀後半）の埴輪に類例があるものの、その他にはすべての時期を通じてまったく異なる着衣表現しか存在しないということは、積極的に西日本と結び付けては理解できない。

②の中空の腕という特徴は茨城県地域に多く認められるものである。特に 5 世紀末から 6 世紀前半にかけては中空の腕をもつものが多い。しかし、その他の特徴は異なっており、中空の腕という特徴のみをもって西日本と結びつけては理解できないだろう。一方で茨城県かすみがうら市富士見塚 1 号墳は中実の腕で体部の側面の肩から若干下がったところに孔をあけ、腕を差し込んでその周りにかなり多くの粘土を貼り付けるという独特な手法でつくられている。類例のない技法であり、茨城県の南部地域に同様のつくり方をする人物埴輪が分布している。

東北地方に目を向けてみると福島県本宮市天王壇古墳（5 世紀中葉）の女子埴輪は①④が確認できる。初期人物埴輪の島田髷に④の技法が存在する意義は非常に大きいと思われる。また、胴部前面が欠失しているため未詳であるが、③の袈裟状衣であった可能性もある。腕は中空であるが途中で終わっており他に類を見ないつくりである。山形県山形市菅沢 2 号墳（5 世紀後半）からも女子埴輪の島田髷の破片が出土しているが、一枚の粘土板を用いたもので、裏面の剥離痕からは球形の頭部になるものではなさそうである。

5．埴輪表現の非共通要素の意味

以上のように、東海地域から西日本にかけては畿内の人物埴輪と非常に似た特徴を持っている。その範囲は静岡西部～石川より西の地域といえるだろう。上記の①～⑤までの特徴のうち①～④までは東海地域から九州まで広範囲に共通性を指摘できる。しかし、⑤の範囲は近畿地方から伊勢湾に限定される特徴のようである。分布範囲の狭い⑤の特徴を有する人物埴輪は関東以北では確認できない。このことは、当該地域の初期人物埴輪がどこからの影響で成立したものなのか認識することを困難にさせている。さらに①～④までの特徴は関東以北ではむしろ稀な事例であり、かつ必ずしも初期人物埴輪に認められるわけでもないが、福島県天王壇古墳では④の特徴を有していた。このことは、畿内からの影響があってこのような女子埴輪がつくられたといえるのだろうか。憶測を述べるならば、天王壇古墳の埴輪製作工人は女子像をつくる際に甲冑形埴輪の腕がないという特徴を女子に置き換えてつくった。その際に髷および着衣は（可能性として）リアルに表現した。ただ

し腕がないということは、畿内の女子埴輪と天王壇古墳の埴輪とを積極的に結びつけることは難しく、④の存在とは他人の空似という可能性もないではない。しかし、関東以北には類例の少ない④という特徴を評価し畿内との関連性の上で、上記のような工夫があったと考えたい。

東海地域の人物埴輪は西日本と共通していることは前述した。しかし、東海の埴輪生産は須恵器生産と密接に関わっており、その多くが須恵器との併焼窯で生産された。これは、近畿の埴輪生産の大多数とは異なる特徴を有している。それは、土師関連地名と埴輪生産遺跡の関係でいうと、愛知と静岡西部に土師関連地名がほとんど見出せないということと関連していると思われる（第 8 章にて詳述）。生産体制は西日本と異なるのに、①～⑤までの特徴は共通する。この埴輪の製作技法・表現と生産体制との間のズレの存在は、関東以北の在り方を考えるとき、参考になるかもしれない。

関東以北の各地で人物埴輪がつくられ始めたころは、円筒埴輪の B 種ヨコハケ技法という畿内との関係を示す資料が数多く確認できる。上記に示した関東以北の初期人物埴輪を出土した古墳の多くにも、B 種ヨコハケをもつ円筒埴輪が樹立されていた。円筒埴輪と形象埴輪にみる違いをどのように理解したらいいのだろうか。さらに、埴輪配列には西日本と関東地域に共通点を見出せるとした塚田良道（塚田 2007）や犬木努（犬木 2007）の見解もある。

違うもの同士を結びつけることは難しい。最初に述べたように、西日本がすべて同じ要素で埴輪をつくっていた訳ではない。地域的特徴もあるだろう。①～⑤の特徴とは、いわば最大公約数的な要素を指摘したまでのことであり、それ以外の諸特徴も厳然と存在する。そうであるならば、関東以北の人物埴輪と同様な埴輪を西日本で見出せれば、震源地を特定できるようになるのかもしれない。現状では関東全域の人物埴輪を見回したときに西日本でみたような共通の要素は見えてこない。強いてあげれば、明確な着衣表現のない女子埴輪が多いということだろうか。上述のように奈良県荒蒔古墳（6 世紀前半）、同烏土塚古墳（6 世紀後半）の女子埴輪も同様の特徴を有しており、塚田良道は関東からの影響を想定している（塚田 2007:p.86）[6]。

先に茨城県富士見塚 1 号墳の人物埴輪の腕のつくりについて茨城南部の特徴として捉えた。このような人物埴輪の造形がいつまで残るのか明確ではないが、非常に特徴的な製作技法を用いている。類例として大阪府日置荘遺跡 P-1 灰原出土の人物埴輪（6 世紀後半）の腕のつくりをあげたい。日置荘遺跡の埴輪は全体として西日本の埴輪としては違和感の

あるもので、その要因の一つとして茨城地域から工人が移動した可能性を指摘しておきたい⑦。

結論としては、関東以北で盛んに作られた人物埴輪の諸特徴の震源地が、今のところの筆者には特定できない。西日本と関東以北地域をどのように結びつけたらよいのか、解決策が提示できないのである。埼玉県埼玉稲荷山古墳の築造はこの地域にとって、かなり大きな出来事であったはずであり、埴輪を製作するに当たって、西日本のどこかの地域の協力があってよいと思うのだが、共通点は見出せない。この地域では最古の人物埴輪という訳ではないから、すでに在地化が進んだ後のものなのだろうか。福島県天王壇古墳の女子像の腕のない姿にしても、群馬県古海松塚 11 号墳の着衣表現のない女子像にしても、最初期に西日本とは異なる特徴を有する埴輪がつくられたように思われるのである。

おわりに

ここまで、人物埴輪の東西比較を通じて論点あるいは筆者の疑問点を提示してきた。もとより論じ残した部分も多いであろうし、誤謬を犯しているのではないかとおそれている。最後に、改めて轟俊二郎の「下総型人物埴輪の特徴は疑いもなく明白であるが、個々の要素の分解してしまうと、そこには下総的な何物ものこらない（轟 1973：p.77)」という言葉を引用しておきたい。上記の言葉をどのように克服したらよいのか、もっと分かりやすい視点はないものか、解決策はないものか、今後も研鑽を重ねていきたい。

註

① 現在の我々が共通性を認識できていないのかもしれないし、資料数の制約で未だ共通性が見出せていないのかもしれない。つまり間を繋ぐ資料が出てくることで理解されることもあるだろう。

② 栃木県真岡市鶏塚古墳の分離造形の人物埴輪に関しては作風が異なることから、細部の手法を分析する作業が必要であると述べている（小林 1974：116 頁)。

③ 「震源地」という用語は不適切なものかもしれない。「発信地」や「中心地」などという言い方もできるだろう。しかし、あえて「震源地」という表現を用いたのは、「発信地」という言葉には当然ながら「受信地」があって発信されるという意味が付加されるし、「中心地」には「周縁」あるいは「周辺」さらには「僻地」などという言葉がついて回る。文化の伝播とは水面に小石を投げて波紋が広がるように均質な広がり方をするとは限らない。飛び地のように広がるあり方もあるし、

すぐ隣ではまったく異なる様相を示すこともよくあることである。地震の波の伝わり方はまさに水面の波紋とは異なる伝わり方を示すものであり、地殻の様相や震源地の場所によって様ざまに変化する。文化の伝播には様ざまな要因で伝わりやすい地域とそうでない地域があると考えているので、あえて、「震源地」という言葉を使ったことをお断りしておきたい。

⑭ 塚田が述べた「近畿様式」の特徴は以下の通りである。①女子埴輪はバチ形の髷で、袈裟状衣を着用し、両腕を胸の前に差し出して器物を持つ。また、基本的に耳飾りの表現がない。②男子全身立像の台は平面円形で、足先が台上におさまる台部 A（これは女子全身立像双脚の場合も同じ）。③男子半身立像の裾は腰の括れ部から広がる有裾の a（これは女子立像の場合も同じ）。④基本的に腕の製作技術は円筒中空技法。

⑮ 愛知県春日井市味美二子山古墳の人物埴輪の腕も木芯中空であることを井上裕一氏にご教示いただいた。木芯中空技法については、埼玉や茨城でその存在が確認され、相互の関係性なども言及されてきた（山崎 2004）。東海地域に木芯中空技法が存在するのであれば、東海地域と関東地域との関連も考えていく必要があろう。

⑯ 器財埴輪のなかでも 6 世紀中葉ころになるとそれまでの近畿にはない奴凧形の靫が登場する。このことに関して坂靖は東国からの影響ではなく、東国で発達したこのような靫についても「祖形は近畿地方にある（坂 1988：p.326）」としている。ただし、坂はその後の論考で、靫や大刀などについても、近畿地方に淵源があるのではなく、東国で独自に発達し、逆輸入された可能性も指摘している（坂 2001）。このことをもってしても、資料の解釈については非常に難しい判断を含んでいることがわかるであろう。

⑰ 同遺跡からは人物埴輪の目の輪郭を線刻で表現し、目玉のみ孔をあけるという特異なものも出土している。類例はなく、どこからの影響でつくられたのかまったく分からない。

図版引用文献

図1－1　伊野 1990

　－2　林ほか 1989

　－3　伊達 1966

　－4　十河 1991

　－5～6　入江ほか 1995

図2－1・2　永井 2002

－3～6　上野・中西 1985

－7　徳田・清喜 2001

－8　伊達ほか 1972

－9　田中ほか 1989

図3－1・2　杉原 1985

－3　穂波町教育委員会 1997

－4～6　川述 1984

－7～9　伊崎ほか 1983

図4－1～3　西田ほか 1990

－4・5　鈴木 2001

－6～9　栗原ほか 2005

図5－1～6　白井・鈴木 2004

図6－1～7　伊藤ほか 1995

図7－1～3　樫田 1992

図8－1　大河内・山崎 1984

－2　江川・藤沢 1991

－3～8　関本 2002

－9～13　金井塚 1994b

－14　斎藤ほか 1980

－15　若狭ほか 2000

図9－1～3　杉山ほか 2006

図10－1～4　大塚・小林 1971

－5・6　辰巳ほか 2005

図１　西日本の人物埴輪１

1.京都府塩谷５号墳　2.京都府堀切７号墳　3.奈良県勢野茶臼山古墳　4～6.大阪府日置荘埴輪窯跡

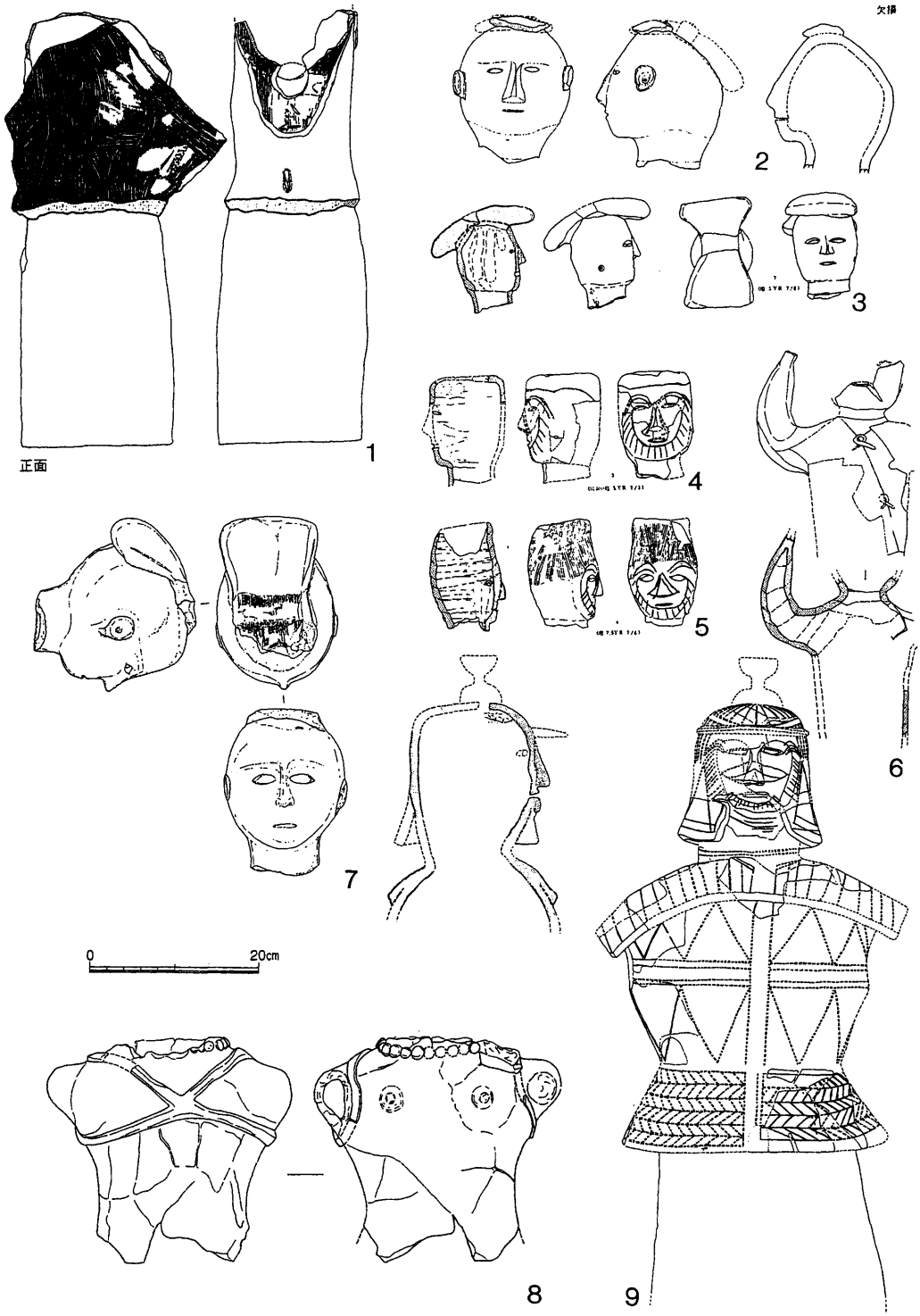


図 2　西日本の人物埴輪 2

1.大阪府百舌鳥高田下遺跡　2.大阪府百舌鳥梅町埴輪窯跡　3～6.大阪府大賀世 3 号墳　7.大阪府大仙陵古墳　8.奈良県烏土塚古墳　9.大阪府長原 45 号墳

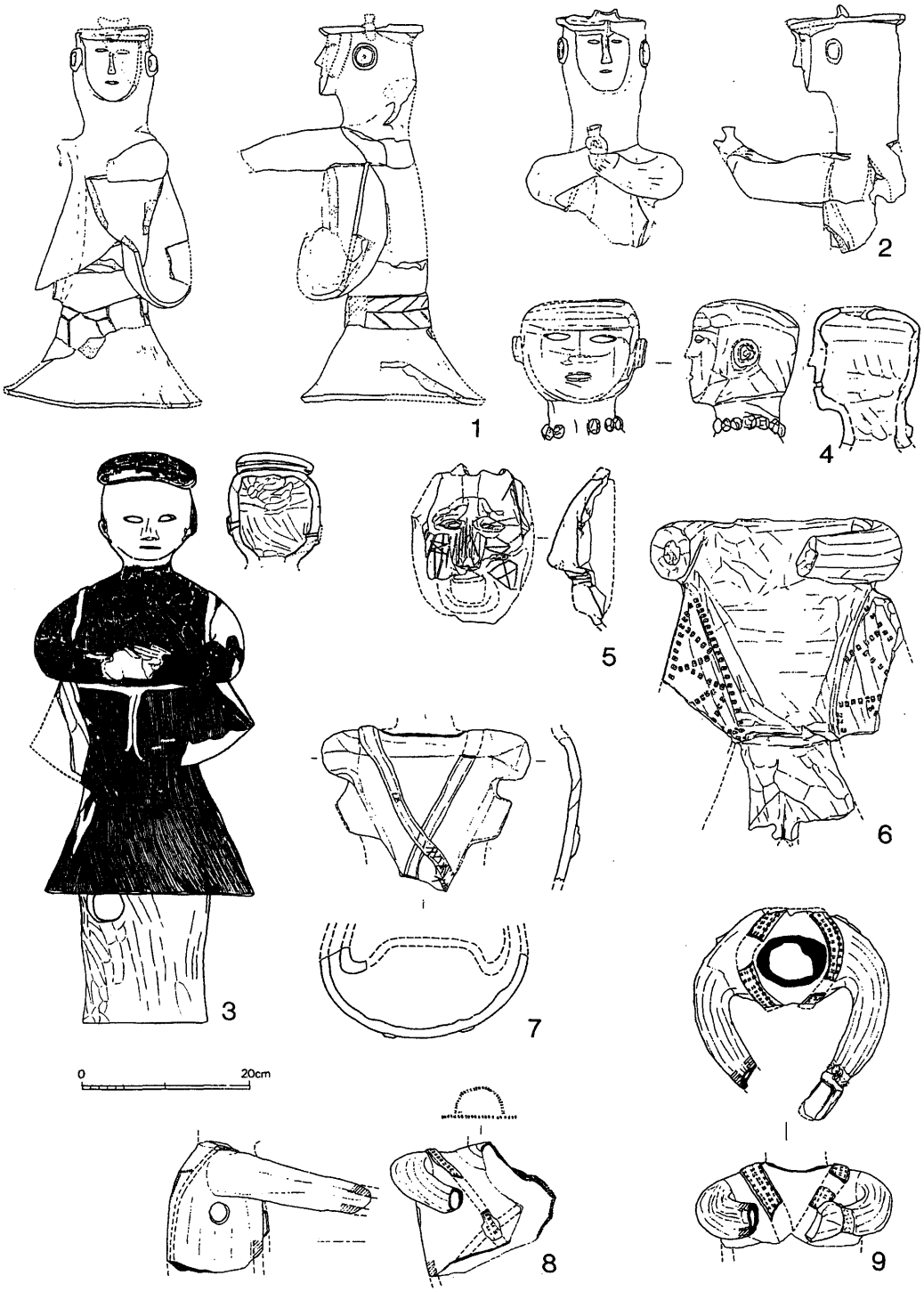


図3　西日本の人物埴輪3

1～2.島根県常楽寺古墳　3.福岡県小正西古墳　4～6.福岡県立山山13号墳　7～9.福岡県立山山8号墳

図4　東海の人物埴輪1

1～3.三重県常光坊谷4号墳　4・5.静岡県郷ヶ平6号墳　6～9.静岡県神内平1号墳

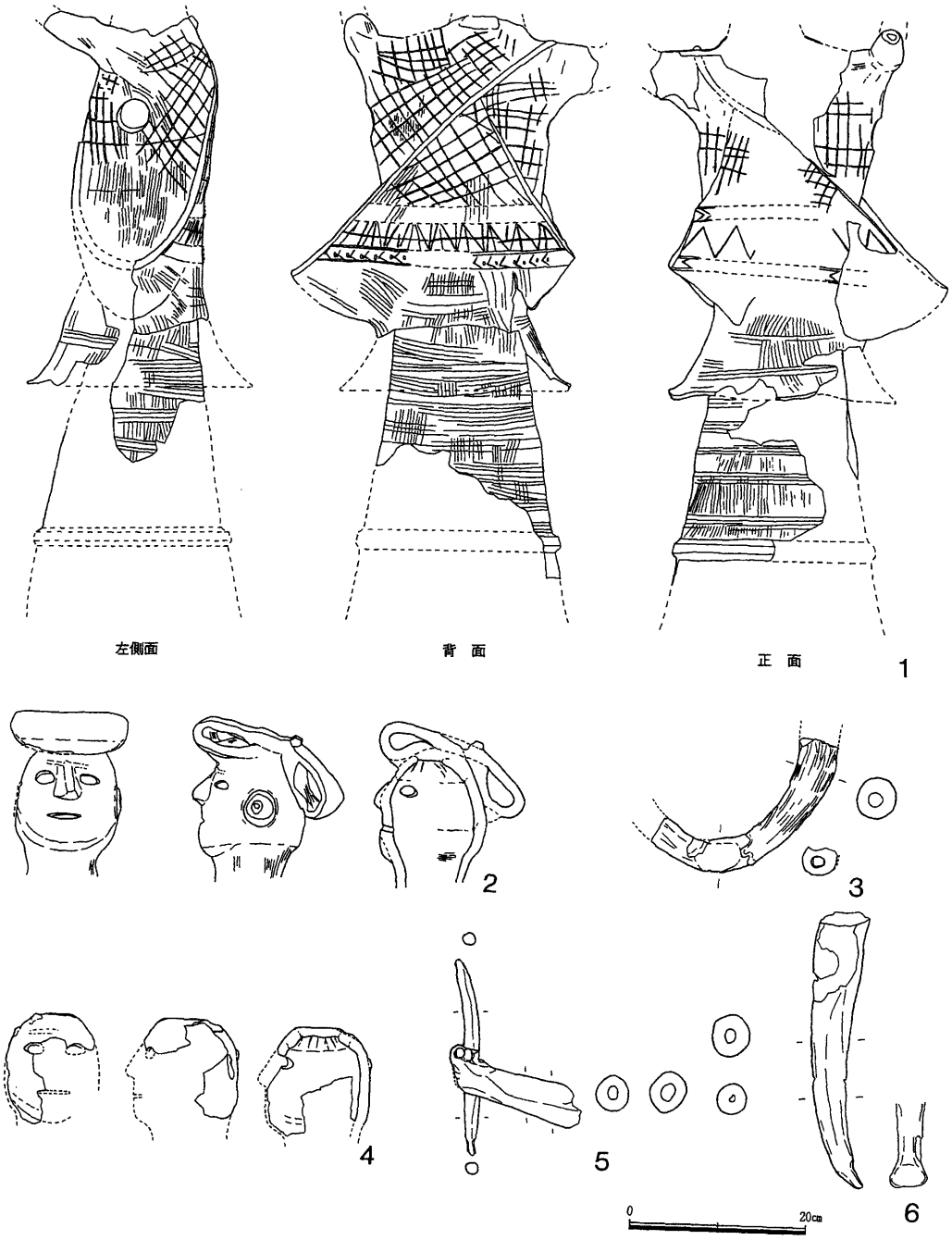


図5　東海の人物埴輪2

1～6.静岡県辺田平1号墳

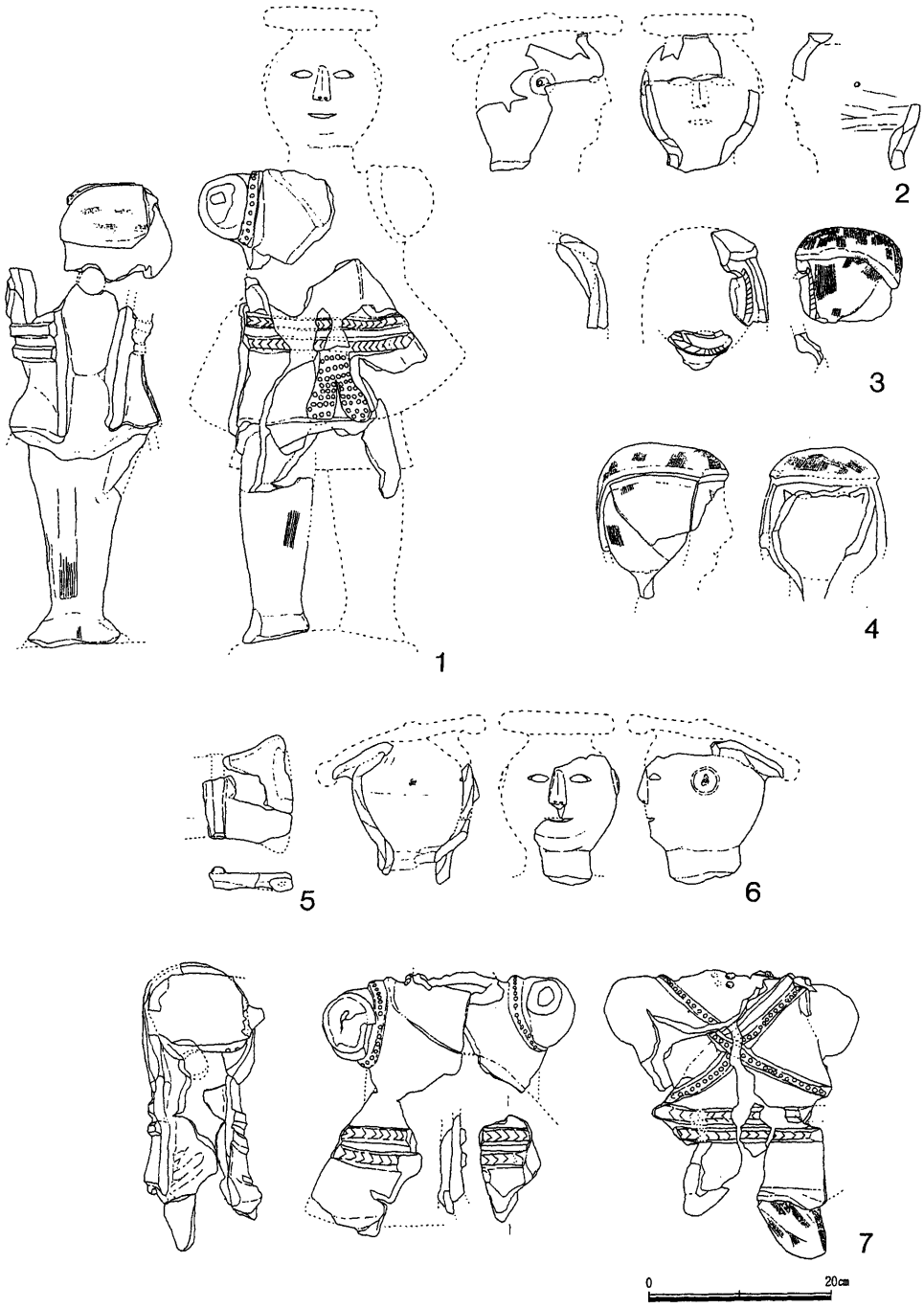


図 6　東海の人物埴輪 3

1～7.愛知県古村積神社古墳

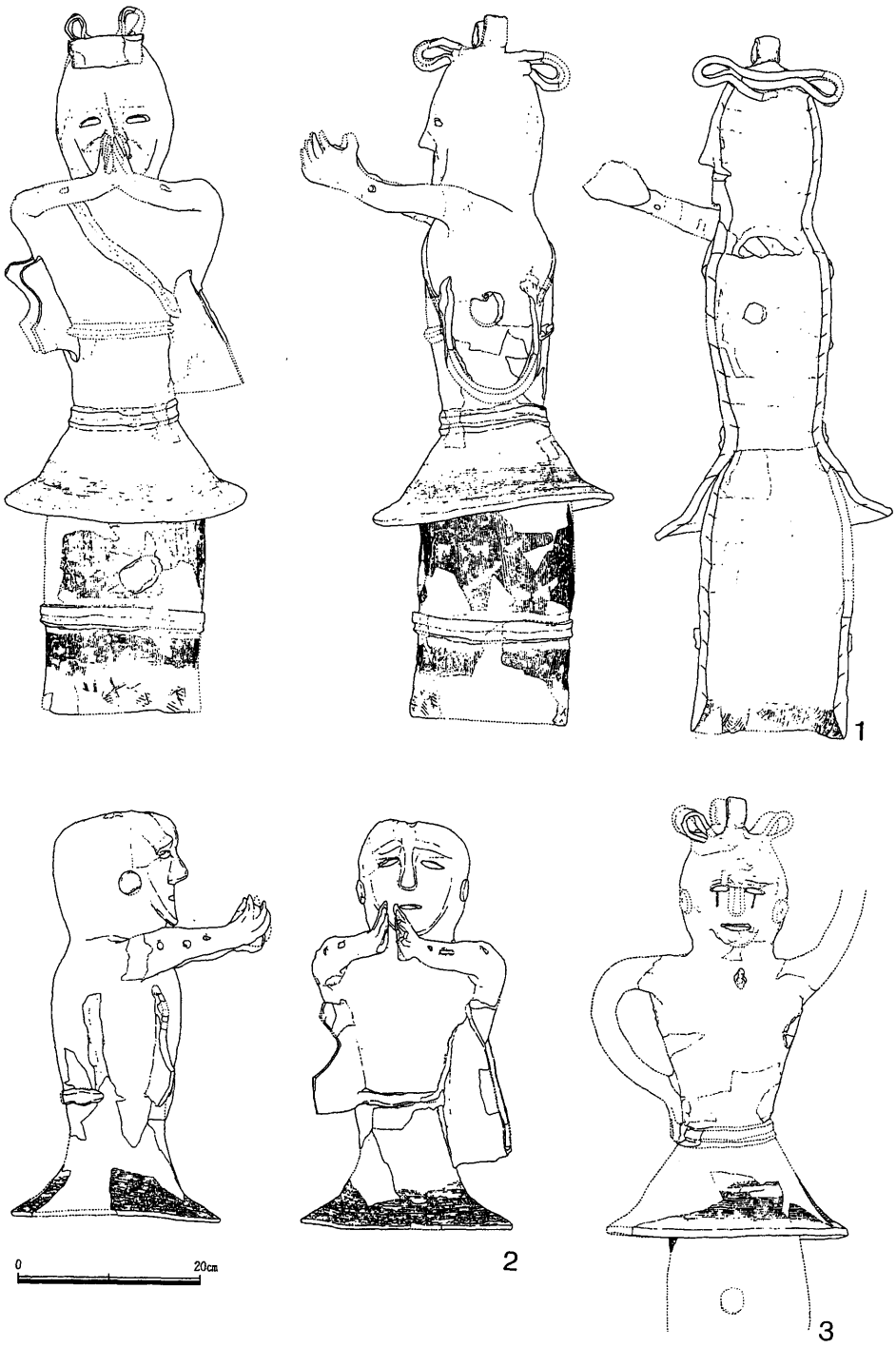


図7　北陸の人物埴輪

1～3.石川県矢田野エジリ古墳

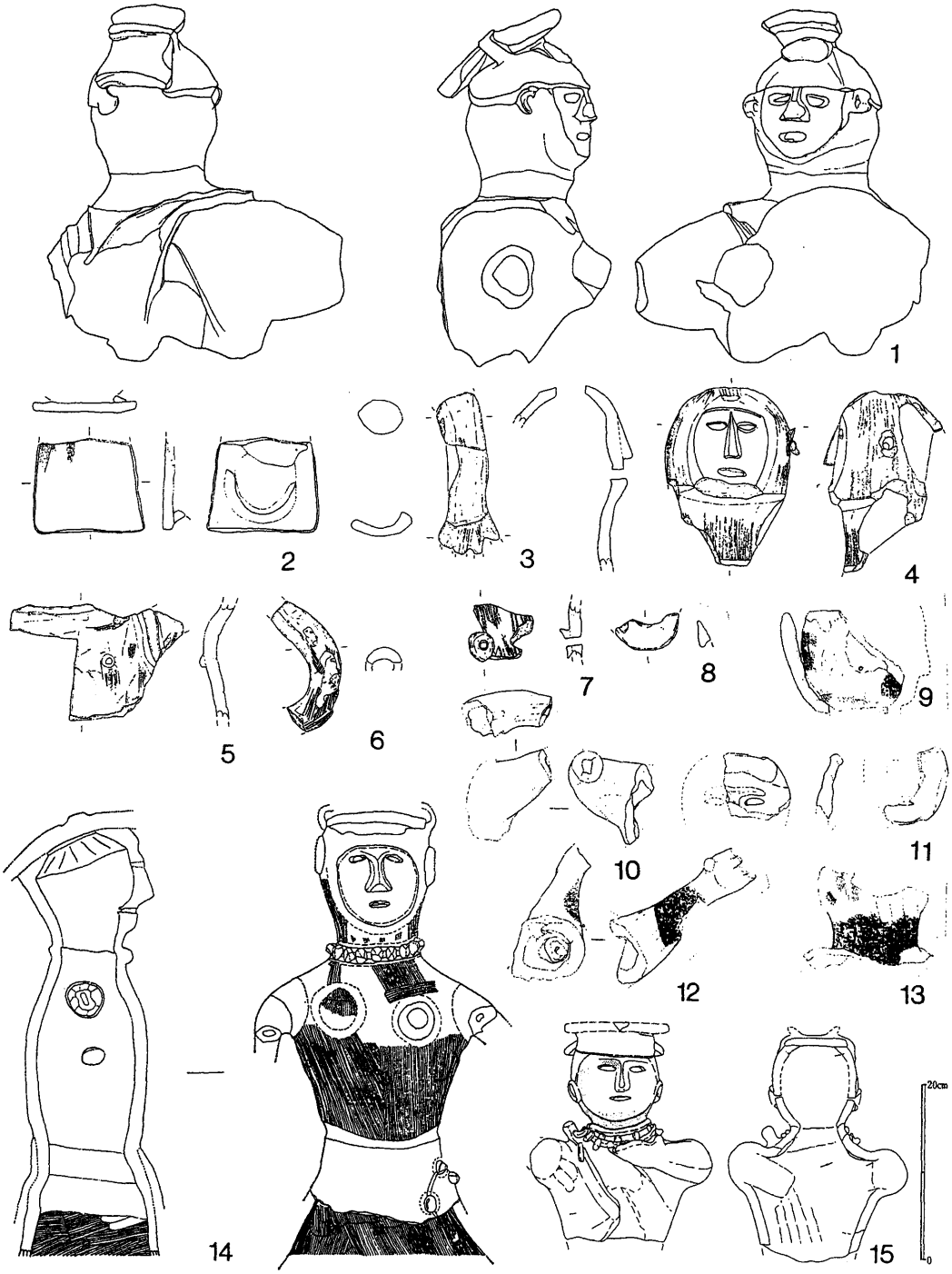
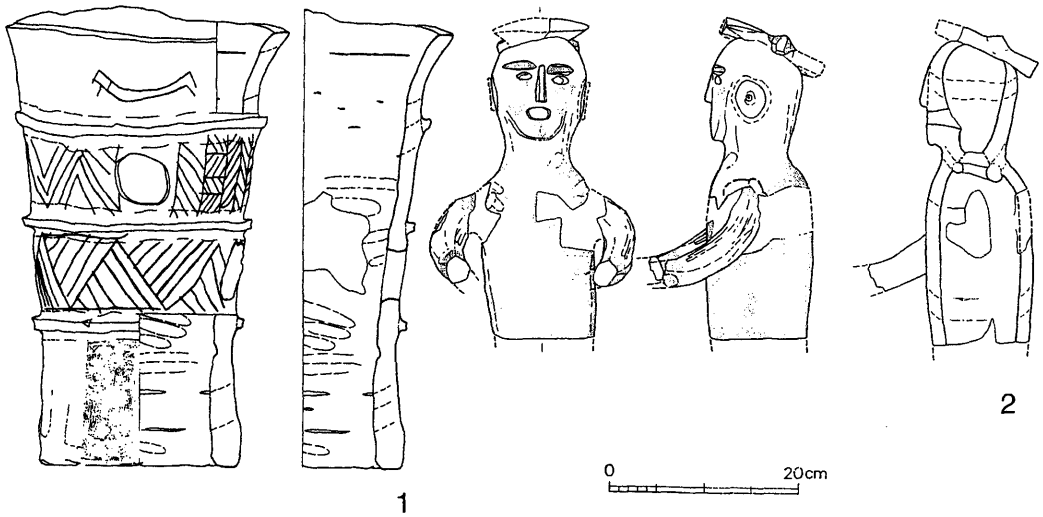


図 8　関東以北の人物埴輪 1

1.福島県天皇壇古墳　2.山形県菅沢 2 号墳　3～8.群馬県古海松塚 11 号墳　9～13.埼玉県生野山 9 号墳
14.埼玉県埼玉稲荷山古墳　15.群馬県保渡田八幡塚古墳



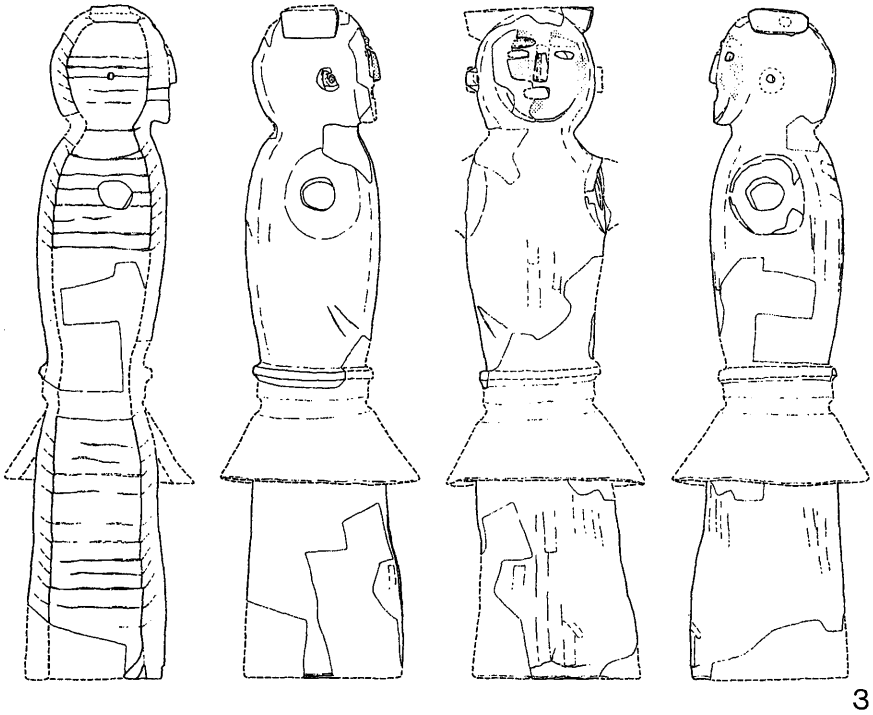


図 9　関東以北の人物埴輪 2

1～3.茨城県富士見塚古墳　1は円筒埴輪

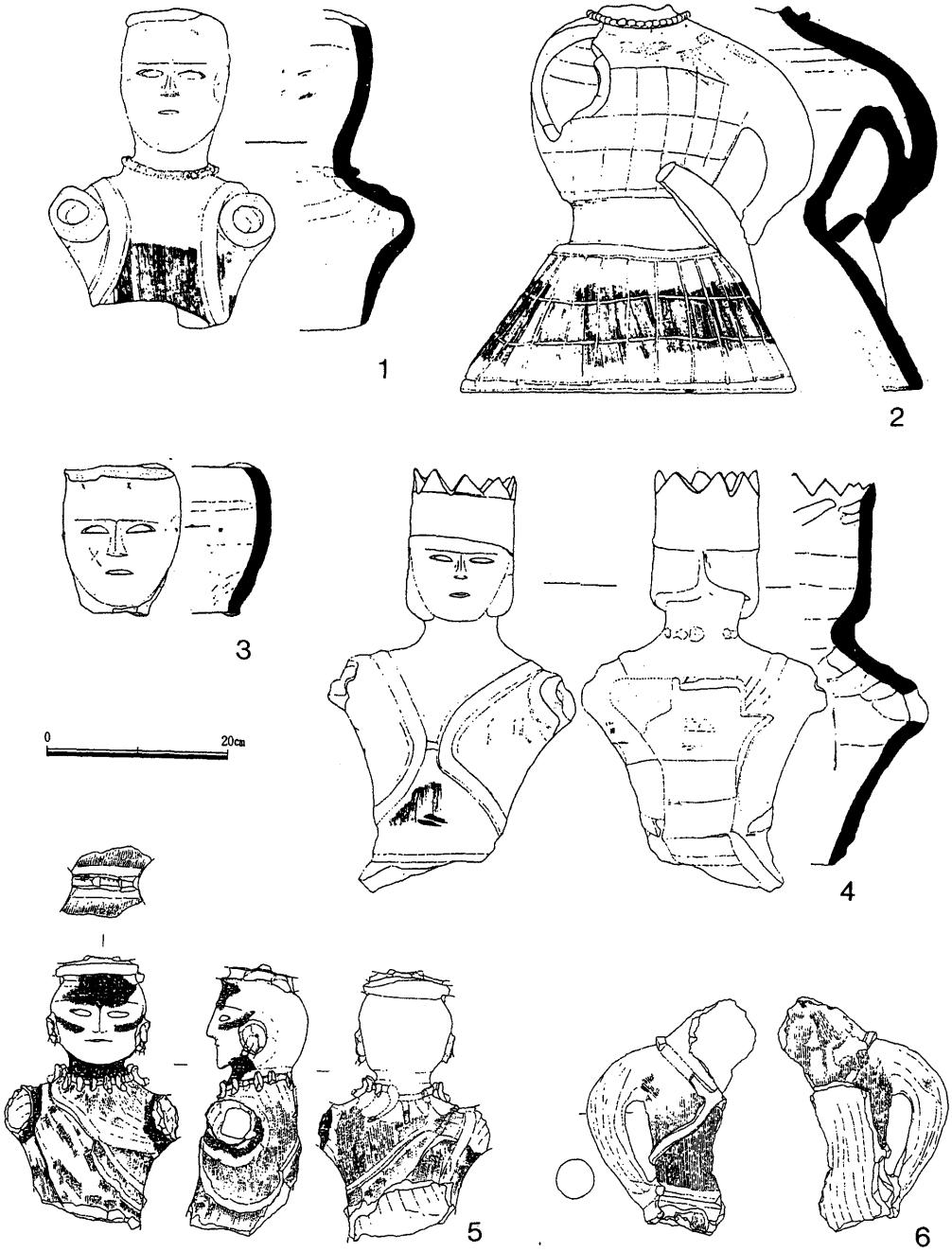


図 10　関東以北の人物埴輪 3

1～4.茨城県玉里舟塚古墳　5～6.神奈川県采女塚古墳

第5章　埴輪からみた交流と地域性

ー柴又八幡神社古墳をもとにしてー

はじめに

東京都葛飾区柴又八幡神社古墳からは、下総型埴輪とともにいわゆる房州石と呼ばれる石材を用いた石室が確認されている。後者に関しては、石材の産出地が千葉県木更津市周辺の海岸であることが想定されている。最も遠距離に運ばれた例は埼玉県行田市埼玉将軍山古墳であるが、本古墳が埼玉古墳群のなかで、最初に横穴式石室が導入された古墳であることは注目しておく必要がある。さらに、将軍山古墳の石室天井石などに使用された秩父地方産の緑泥片岩の存在も重要である。前者は轟俊二郎によってその存在が確かめられた独特な埴輪であり（轟1973）、その名前の示すとおり、律令制以降の地域名称である「下総」で主に発見される特徴的な埴輪を総じてそう呼んでいる（出土古墳は現在45基[①]）。本章では、下総型埴輪を手掛かりにして、関東地方の古墳時代後期の社会をめぐる諸問題について述べていきたい。

1．下総型埴輪について

下総型埴輪については第3章で詳述したが、下総型円筒埴輪の特徴は以下の通りである。

1．3条突帯、4段構成を基本とする

2．第1段の幅が他と比較して著しく狭い

3．底径：口径：器高の比率がほぼ1：2：4である

4．縦長円形の透孔を穿ったのち透孔面を指ナデする

5．基部から口縁部まで一気に積み上げる

6．調整は全体に粗雑で突帯下側のナデは十分に施されない

特に、２・３・４は他地域の円筒埴輪には認められない独特のものであり、その他の特徴も相互に組み合わさることにより、下総型円筒埴輪を弁別することができるものとなる。かつて轟俊二郎は、下総型埴輪の製作にあたっては大塚久雄の所説を引きながら「一種巡歴手工業者的な側面」をもっているとした。この仮説を実証するためには、工人集団の判別とさらに工人そ

のものの判別が不可欠であろうし、埴輪胎土の異同を明らかにする必要があった。

下総型円筒埴輪の研究を、実証的に押し進めたのが犬木努である。犬木はその論文においてハケメに着目し、複数の円筒埴輪に同一のハケメ工具を用いている事実を突きとめた。さらに、同一の古墳のみならず複数の別古墳にも、同一のハケメ工具を用いて製作された円筒埴輪の存在を明らかにした（犬木1994・1995・1996・2005）。このことは、下総型埴輪が、轟が想定した巡歴手工業者的な側面をもった埴輪製作工人によって製作されたものであるか否かを考える上で、極めて重要な成果といえる。つまり、これまでは漠然と下総型埴輪の分布域という要素のみでその生産体制を考えていかざるを得なかったものが、具体的にその製作動向を掴んだ上で議論することが可能になったのである。

しかしながら、製品を運んでいたのか、各地に工人が移動して製作していたのかという問題を解決するには、なお長い道のりが必要である。なぜならば、工人が移動して製作に当たったとし、なおかつ粘土や混和材をその先々で採取していたならば、埴輪胎土は異なるものになるであろうが、胎土や混和材までも運んでいたならば、同一の埴輪胎土となってしまうからである。さらに、粘土層および河川の砂礫種が同一の地質条件であったならば、移動して製作していたとしても当然埴輪胎土も同一になる。三辻利一の研究によれば、同じ下総型埴輪の胎土でも、同一のグループとして認識できるものとできないものがある（三辻1994）が、先にみた犬木の研究と照らし合わせたものではないので、結論を性急に導くべきではない。ここでは、下総型埴輪が極めて規格性の高いものであり、それらが同じ規範を共有する工人集団による製品であることを確認した上で、その分布域が同一工人集団による製品の流通圏を示すと理解しておきたい。

2．埴輪からみた地域性

下総型埴輪が他地域の埴輪と弁別することのできる特徴を有し、それらは同一工人集団の製品である可能性が高いことは前述した。このように、各地の埴輪の中で他と弁別できる特徴があれば、同一工人集団による製品を抽出できる可能性がある。その方法としては大きく分けて以下の2つがある。

1．工人ごとに表れる個人差（技術的偏差）ではなく、どの工人にも共通して認められる製

作技法を抽出する。ただし、注意しておかなければならないのは、埴輪製作において必然的に用いられる同じ製作技法は、工人集団を特定するためには有効とならないという点である。つまり、他の工人集団には認められない製作技法を抽出するわけである。

2．人物埴輪において着衣や姿態などの表面上の特徴に、共通表現を見出す方法である。製作技法と密接に関わるものでもあるが、まず、人物埴輪の表現を部位ごとに分類する。そして、その分布が極めて地域的にまとまりをもつのであれば、共通表現として認識し、同一工人集団による製品の流通圏を設定する。ただし、この方法を用いる場合常に意識しておかなければならないのは、当時の風俗・習俗の具現化が形象埴輪表現となっているという点である。つまり、他人のそら似か否かを明確に説明する必要があるのである。そのためには、他の要素との組み合わせによって他人のそら似を排除する必要がある。

前提条件を述べてきたが、1の方法は埴輪を詳細に観察し、その製作技法を特定しなければならない。そのためには極めて長い道のりが必要である。また、古くから埴輪（特に人物）は美術愛好家の収集が盛んな遺物であり、完形品のものも多く存在する。それらの内部を詳細に観察することは、極めて困難である。このことから、写真などによる表面観察で検証できる2の方法は有効であると考える。また、部位を比較検討するので、破片資料も検討できるという利点もある。第1～3章において、その方法を実践したところであり、工人集団を抽出できることを示してきた。

これまでに、関東地方の各地で生産遺跡である埴輪窯跡が、いくつも確認されている。この埴輪窯跡出土埴輪に特徴的な要素を見出し、その特徴を有する埴輪が出土した古墳を探すことで、同一工人集団による製品の流通圏を明らかにすることができるはずである。また、窯跡が発見されていない地域でも、古墳出土埴輪に共通要素があり、それがある程度の地域的まとまりを有していたならば、それは流通圏を示していると考えられよう。そして、この作業をおこなうことにより、未知の生産遺跡の場所の推定もできる可能性がある。

試みに最も埴輪生産遺跡の様相が判明している埼玉県鴻巣市生出塚埴輪窯跡群を手掛かりに論を進めていこう。この遺跡群は埼玉県行田市埼玉古墳群の築造を契機にしてその操業が開始されたもので、いわば埼玉古墳群の盛衰と軌を一にする遺跡といえる。操業の初期の段階については不明な部分が多いが、人物埴輪の目の配置に独特のものが存在する。製作された人物埴輪すべてに認められるという訳ではないが、正面から見たときの「垂れ目」である。そして、

頭巾状被りものと美豆良なしという組み合わせも独特のものであり、概ね6世紀後半頃に特徴的に認められる（第1章参照）。また、家形埴輪の格子状突帯や、馬形埴輪の方形杏葉表現も同様に捉えることができよう。これらの特徴を有する埴輪は生出塚工人集団の製作品と考えてよく、その分布域は南北約40km、東西約25kmを測る。さらに、その供給に際しては河川（元荒川・荒川）の利用があったはずである（山崎1995など）。

この他に地域的特徴としてあげられる要素として、人物埴輪の垂下帯付き下げ美豆良がある。これは、群馬県東部地域から栃木県南部地域に主に分布するもので、他地域のものは下端が肩口に付着するかそのまま浮いている状態にしているのに対して、独特の表現形態をもっている。おそらく群馬県東部（太田市周辺）で生産された同一埴輪製作工人集団の製品である可能性が高い。分布域は厳密には東西約55km、可能性のあるもので東西80km内外を測る（第3章参照）。また、女子埴輪の髪型はいわゆる島田髷と呼ばれるものであり、その意味では日本全国ほぼすべて同じ表現である。しかし、その島田髷も製作に際して地域的特徴を有している。特徴的なのが中空技法の島田髷である。この特徴を有する埴輪は主に埼玉県北部と群馬県南部に存在する。これらも、おそらく同一埴輪製作工人集団の製品である可能性が高い。分布域は南北約22km、東西約50kmを測る（第3章参照）。さらに、武装男子の中で首周りに防具と思われる首甲をつけ、上半身と下半身を別々に作るという特徴をもつものが存在する。この特徴を有する人物埴輪は茨城県の霞ヶ浦北辺に分布する。この地には東茨城郡茨城町小幡北山埴輪窯跡群が存在し、上下別造りの人物埴輪が出土していることから、同遺跡で製作されたものが供給されたと考えられる。分布域は南北約30km、東西約20kmである（第3章参照）。先にみた下総型埴輪の分布域は南北約65km、東西約100kmで、濃密に分布する範囲では東西約40kmである（第3・6・7章参照）。

3．地域を越えて供給された埴輪

以上みてきたように、同一埴輪製作工人集団の製品流通圏はおおよそ50km内外という傾向が認められよう。しかしながら、この流通圏を離れ点的に存在するものがある（第3章参照）。

千葉県市川市法皇塚古墳、同市原市山倉1号墳、東京都大田区多摩川台1号墳、同北区赤羽台4号墳の埴輪には、生出塚埴輪製作工人集団の製作したものが少なからず含まれるようであり、

その距離は法皇塚古墳で約50km、山倉１号墳では約80kmを測る。男子埴輪の垂下帯付き下げ美豆良では、神奈川県横須賀市蓼原古墳に類例が存在する。分布の中心からの距離は約110kmを測る。女子埴輪の中空島田髷では、茨城県潮来市棒山2号墳、同大生西1号墳に類例が存在する。分布の中心からの距離は約130kmを測る。首甲付き武装男子埴輪では、埼玉県深谷市上敷免、群馬県伊勢崎市赤堀町に類例が存在する。小幡北山埴輪窯跡からの距離は約100kmである。

上記に掲げた例の中で、表現方法のやや異なるものが存在することから、他人の空似である可能性も否定できない。しかし、周辺古墳の出土資料に同様の表現をもつものがないことは、両者の直接的な関与を示唆するものと考えたい。そして、時期の判明しているものでは、概ね6世紀後葉に拡散するようである。この動向を積極的に評価すると下総型埴輪の分布範囲が100kmを越えることもそれほど奇異なものではない。それらが主要河川のほど近くから出土するということも、拠点的な生産地の存在を示唆するものと考えられなくもない。

4．地域性と交流の意味

これまでの検討で50km内外という供給圏とともに、その範囲を離れて供給された埴輪のあることが判明した。前者の場合は、安定した流通網に乗る通常の供給体制を想定することができよう。それは、生出塚埴輪製作工人集団の成立の契機が埼玉古墳群（埼玉稲荷山古墳）の造営であり、造墓の盛衰と密接に関わりながら埴輪生産をおこなっていた、いわば後ろ盾の存在が重要であったといえるであろう。これは、橋本博文のいう「固定分散型」（橋本1981）として位置づけることができよう。基本的に、6世紀の埴輪生産はこの類型のもとでおこなわれていたと考えられ、いくつもの工人集団から大規模古墳に埴輪が供給されていた。それでは、50km内外という範囲を離れて点的に供給された埴輪のもつ意義は、いかなるものであったのだろうか。

埼玉古墳群中最後の中型前方後円墳と考えられる中の山古墳において、生出塚埴輪製作工人集団ではない須恵器工人集団の手による「須恵質埴輪壺」の存在が、これを解く鍵であると考えている。中の山古墳は出土した須恵器から、おそらく6世紀末ころに築造されたと考えられ、埴輪樹立の風習が終了する頃に相当する。しかし、「須恵質埴輪壺」が示すとおり、限りなく埴輪に近い類似品を代用品として樹立していたことが分かる。さらに、この「須恵質埴輪壺」

は、生出塚埴輪窯跡で製作されたものではないことが判明している。これらの事実から考えると、この時点で生出塚埴輪製作工人集団に、劇的な大変革が存在したことが想定される。中の山古墳は最後の大型前方後円墳将軍山古墳に比較して、規模の小型化が指摘される。私は、生出塚埴輪窯からの大量の安定供給が将軍山古墳の築造を最後に寸断され、その結果長距離供給をおこなわざるを得なかった、と考えた（第3章参照）。同時期と考えられる行田市酒巻14号墳でも、その埴輪の量としては円筒埴輪120本程度（墳頂部に埴輪列が存在していたなら180本程度か）、形象埴輪14～20体程度であり、お世辞にも大量供給とはいえない。6世紀末の時点で埴輪製作工人集団に、何らかの理由で埼玉古墳群との関係断絶という事件がおこったのではなかろうか[2]。7世紀前半代に築造された埼玉古墳群中の戸場口山古墳（方墳）はいわゆる終末期古墳であり、もはや埴輪を樹立することはなくなっている。関東地方のすべての地域で、6世紀末を境にして埴輪樹立の風習は姿を消す。地域によっては前方後円墳が築造されるところもあるが、それも7世紀中葉には終末期方墳ないし円墳に変化する。これは、あまりにも劇的な変化であり、強制的な政治力の行使を想定せざるを得ない。

おわりに

ここまで、埴輪という造形物を通して、6世紀後半代の関東地方の状況を大雑把に述べてきた。具体的な歴史叙述としては甚だ拙いものであるが、大筋での流れを述べたつもりである。詳述できなかったことも多いが、終章にて改めて検討することにしたい。

註

[1] 下総型埴輪は発見例が増えており、すでに50基を超えている。

[2] 太田博之が指摘するように、酒巻14号墳の埴輪が和名埴輪製作工人集団の製品であるとするならば（太田2010）、本来は生出塚埴輪製作工人集団から供給されるべき地域にある酒巻の地に何らかの事情で生出塚から供給できなくなった事情があったのかもしれない。

図版はすべて筆者作成

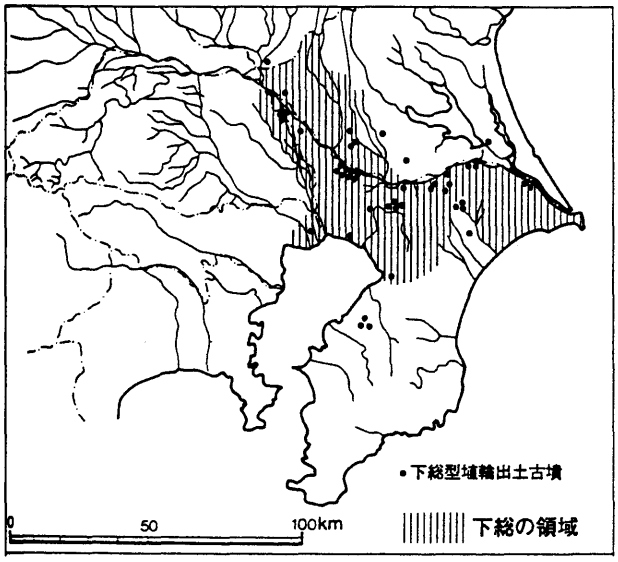


図1　下総型埴輪出土古墳分布図
（可能性のあるものを含む）

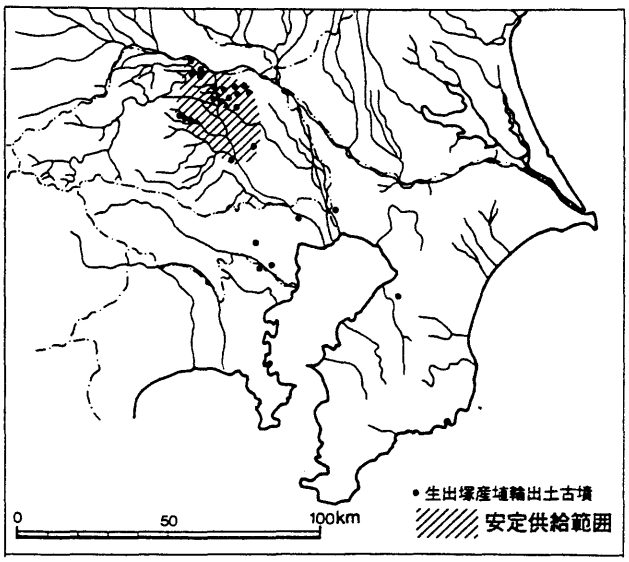


図2　生出塚埴輪窯と生出塚産埴輪出土古墳
分布図（可能性のあるものを含む）

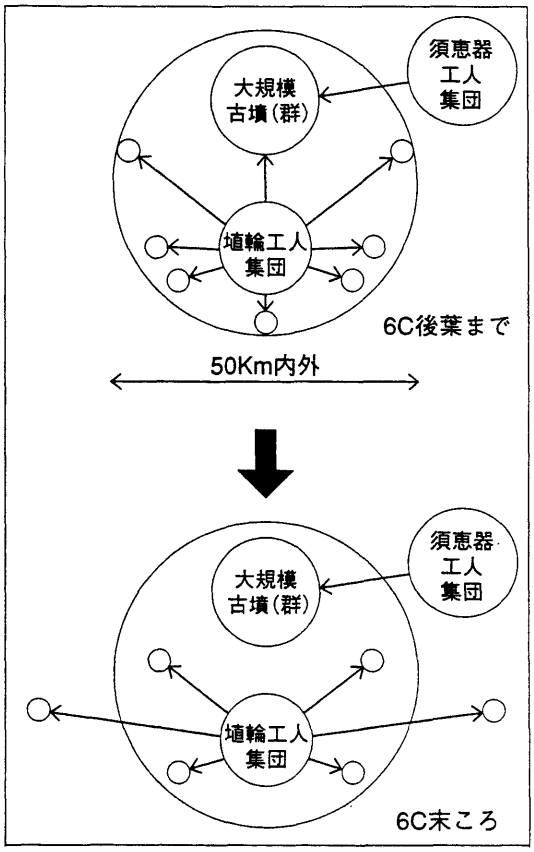


図3　生出塚埴輪工人集団の供給モデル

第6章　下総型埴輪と墳丘企画

はじめに

古墳時代を代表する前方後円墳が、各地における有力首長の墳墓であるとの見解は、周知の事実といってよい。さらに、前方後円墳という同じ墳形をもつことから、そこに前方後円墳体制という政治的紐帯を見出し、国家の成立と結びつける見解もある(都出 1990)。

また、前方後円墳の墳形が時期をおって変化しているという後藤守一の指摘以来（後藤 1935)、古墳の編年研究を始めとして墳丘の企画論は枚挙に暇がない。特に近年では、古墳時代前期、特に古墳時代の始まりをめぐって箸墓類型と呼ばれる墳形を列島内に探していくという諸研究が盛んである（澤田 1990・1993 など)。一方、倉林真砂斗のように地域の中での墳丘の序列化を検討して、各地に分散して所在する前方後円墳同士の関係性を積極的に復元しようとする研究もある（倉林 1996)。倉林の研究は、今までにない切り口で地域間交流の様を検討したものとして高く評価されるものである。さらに、坂本和俊は墳丘の企画の同一性が、被葬者の出自に関係するのではないかとの注目すべき提言をおこなっている（坂本 1996)。

筆者は人物埴輪を中心に関東地方各地の古墳を検討した際、墳形と埴輪に共通性をもつ可能性を指摘したことがある①。そこでは、人物埴輪を中心に論述したこともあり、ごく一部の指摘にとどまるとともに相互の関係性については意を尽くせなかった。また、茨城県つくば市の松塚1号墳（前方後円墳・墳丘長 62m）を検討した際、茨城県域における6世紀後半代の前方後円墳の墳形に2種があることを指摘し、それらが地域的にまとまりをもって分布することから、墳形の比較研究をおこなうことで当時の政治史的動向や地域間交流の様を素描した（日高 1998b)。これらのことから、墳形と埴輪、さらには内部主体、副葬品の複合的・総合的な検討の必要性が急務であるとの認識にいたったわけである。古墳時代が、都出比呂志のいう前方後円墳体制という概念をもってすべて説明し得るのかどうかを、地域の中で検討していかなければならない。

さて、6世紀後半代の関東地方において、下総型埴輪という極めて規格的な埴輪が存在する（轟 1973)。この下総型埴輪が同一埴輪製作工人集団の製作品であることは②、他の工人集団の製作品とまったく異なる特徴を有していることや、犬木努の研究によって複数の古墳に供給された埴輪の中に同一埴輪製作工人の製作品があることなどから（犬木

1995・1996・2005)、首肯されるものである。そこで、本章では下総型埴輪を出土した古墳を題材に、ひとまず墳丘企画の様相を分析し、それぞれの共通性の有無を見出す。そして、共通性と非共通性の要因の背景に迫ることを目的とする。

1．下総型埴輪出土古墳の墳形

第3章において下総型埴輪を出土した古墳の規模を検討した際、それが比較的小規模の古墳に多く樹立されている状況から、下総型埴輪の工人集団は「小型前方後円墳、円墳に埴輪を供給する体制であった」と結論付けた。下総型埴輪を出土した古墳は、現在 45 基以上を数えるが、墳形や内部主体などが判明していて検討に耐え得るものは約半数である。表1は各報告書に掲載されている測量図と墳丘裾ラインを元にして新たに数値化したものを記載している。よって、報告書の数値とは異なることを予めお断りしておく。また、立地する地形の制約から墳形が左右非対称となることは、多くの類例から首肯されるものである。しかしながら、今回検討した各古墳はおおむね直線的な広い台地上に立地するものがほとんどであり、それほど地形に制約されてはいない。よって、基本的に左右対称形であることを前提に論を進めていく。

1-1　高野山類型（図 1・2）

下総型埴輪の出土が集中する地域である千葉県我孫子市内の古墳について検討してみよう。まず、高野山 1 号墳であるが、本古墳は前方部側面において裾が判明しており、その裾と円筒埴輪列の幅を考慮に入れ、企画の復原をおこなった。前方部の円筒列は、おおむね後円部埴輪列と主軸線の交わる点を起点とした直線上に並んでいることが判明した。前方部側面の裾は前方部埴輪列とほぼ平行になっていたと考え、裾線延長の交点を導き出すと、おおむね後円部裾から後円部の半径を延長した点の数値と合致した。高野山 2～4 号墳の墳丘企画を検討すると、2 号墳では前方部の形状が不確定であるが、後円部径および円筒列径が 1 号墳と合致する。3 号墳では裾がまったく判別できないが、1・2 号墳の裾線と円筒列径の関係から、導き出された裾径はおおむね 1・2 号墳の円筒列径と同じになる可能性が高い。4 号墳は後円部径が 1・2 号墳と同じであり、前方部の形状は不明であるが、あまり括れることのない造り出し状になると思われる。

高野山古墳群と同一墳丘企画を有するその他の古墳は、印西市大木台 2 号墳、成田市荒

海15号墳、山武郡芝山町宝馬127号墳である。この内、大木台2号墳は高野山3号墳とほぼ同じであり、宝馬127号墳は高野山1号墳とまったくの同一企画、荒海15号墳は高野山1号墳の5分の4の企画と考えられる。その他に可能性のあるものとして、山武郡芝山町宝馬35号墳、印西市吉高山王古墳がある。前者はくびれ部の調査結果からは極めてくびれの少ないものとなる可能性も有しているが、前方部埴輪列と平行に裾線を引いた場合には高野山1号墳と同一企画となる。後者は裾がいずれもはっきりせず、円筒列も明確ではないので明言はできないが、後円部径を復原すると前方部側に大きく張り出すこととなり、前方部は未発達の形状となる。このことから、高野山2号墳にみられたような帆立貝形に近いような形状となる可能性もあり、吉高山王古墳企画の5分の4が高野山2号墳となる可能性も指摘できる。また、印西市油作Ⅱ号墳も整数値の相似ではないが、同様の企画と考えたい③。その他に、竜角寺112号墳も高野山2号墳と相似形であろう。このような墳丘企画をひとまず、高野山類型としておきたい。

1-2 城山類型（図3）

次ぎに、下総型埴輪を主体的に樹立している古墳の中で最も規模の大きい千葉県香取市城山1号墳をみてみよう。本古墳は墳丘裾、埴輪列が良好に確認されており、その結果からは前方部中段の埴輪列の起点が後円部裾であるという結論が導き出せる。前方部の裾は西側くびれ部と前方部前端で確認されており、埴輪列と裾までの距離がともに約5mである。よって、前方部側面の裾は前方部埴輪列とほぼ平行になっていたと考え、裾線延長の交点を導き出すと、おおむね後円部裾から後円部の半径の数値を延長した点と合致した。起点が後円部の半径を延長した点に求めていることは、先にみた高野山類型の企画とまったく同一の方法を採用しているが、前方部埴輪列の起点に違いをみせている。また、前方部長が若干長い。同様の企画を有する古墳として、香取市城山4号墳、同片野23号墳がある。いずれも城山1号墳の2分の1の企画である。このような墳丘企画をひとまず、城山類型としておきたい。

1-3 その他の墳丘企画（図4・5）

高野山類型、城山類型のいずれにも当てはまらない墳丘企画を有するものとして、山武市松尾町朝日ノ岡古墳、市原市根田130号墳、市原市小谷1号墳、埼玉県北葛飾郡杉戸町目沼7号墳、茨城県潮来市日天月天塚古墳がある。この中で朝日ノ岡古墳は、倉林眞砂斗

の研究により殿塚古墳と相似形であること（倉林前掲：24～26 頁）、埴輪に関してはそのほとんどが在地のもので下総型人物埴輪は客体的であることから、他の下総型埴輪樹立古墳とは築造そのものの様相を異にしている（城倉 2006a）④。また、下総型埴輪を樹立する古墳の中心（印旛沼周辺および香取郡地域）から離れた場所の古墳を含んでいる。

さらに、それぞれの築造企画は、相互に類似性をまったく有していないことが特徴である。例えば、小谷 1 号墳は前方部前端がはっきりしていないが、前方部の発達しないいわば前期古墳のような形状をもつし、目沼 7 号墳は前方部が著しく発達する形状である。日天月天塚古墳は墳丘裾の明確な調査を行う前に不幸にも破壊され消滅してしまい、現在では墳丘企画を積極的に復原できない。今回、報告書によって築造企画を復原したが、相似形となる古墳の確認はできなかった。根田 130 号墳は類例が未確認である。目沼 7 号墳と日天月天塚古墳は、前方部裾線の延長交点が後円部半径を延長した点に合致している。先にみた高野山類型、城山類型と同一方法を採用しているわけであり、墳丘企画の上でも関連性を指摘できるかもしれない。

その他に円墳の東京都葛飾区柴又八幡神社古墳⑤、埼玉県北葛飾郡杉戸町目沼 11 号墳、茨城県龍ヶ崎市長峰 17 号墳があげられるが、円墳であることと、詳細不明な部分が多いことから墳丘企画については保留せざるを得ない。

2．墳丘企画の異同の背景

これまでみてきたように、下総型埴輪を出土する古墳には高野山類型と城山類型、そのいずれにも属さない古墳のあることが判明した。これらの類型の要因は、古墳の分布をみると明らかになる（図 6）。すなわち、手賀沼や印旛沼周辺の古墳はいずれも高野山類型を採用しており、おおむね高野山古墳群から成田市、栄町あたりまでの約 40km に収まるものと思われる。現利根川下流域に所在する城山類型は約 20km に収まるものと思われる。以上の 2 類型は上述のとおり、前方部を設定する際の手続きはまったく同じであり、相互の関係性は強いとしなければならないだろう。2 類型をまとめて「下総型埴輪類型」と呼んでもよい。そして、いずれの類型にも属さないものは一部を除いて分布域から距離的に離れているものがほとんどであり、中心と周縁という関係を示していると思われる。

下総型埴輪に関しては、これまで埴輪生産遺跡（窯跡）が発見されていないこともあるが、全体を統括するような首長（墓群）が存在しないことから「小地域の首長層の支配の

埒外に存在する一種巡歴手工業者」（轟前掲：p.102）という在り方だったのではないか、との轟の見解をこれまで検証でき得ていなかった。しかし、今回検討した墳形の異同と分布状況の相関は、造墓集団の質的まとまりを示していると考えられ、そこに一つの地域勢力の存在を想定できるのではなかろうか。確かに、生出塚埴輪製作工人集団のように埼玉古墳群の首長という後ろ盾の存在を想定することはできないが、埴輪製作工人の裁量によって独自に埴輪が供給されていたわけではなく、中小首長の連携があって埴輪が生産されたものと考えたい。このことからすれば、生産遺跡はそれぞれに分散して存在しているわけではなく、1ヶ所で集中して生産していた可能性が極めて高いと指摘しておきたい⑥。

それでは、高野山・城山類型のいずれにも属さない墳丘企画を有する分布域から長距離となる古墳に下総型埴輪が供給されたことは、どのように理解したらよいのだろうか。その在り方の一つとして、その地域の墳丘企画を有するものがある。朝日ノ岡古墳のほかでは、小谷1号墳が近在する千葉県千葉市中原Ⅲ・Ⅳ号墳と相似形と思われる。根田130号墳も周辺に確認できる可能性があろう。もう一つの在り方として、相似形ではないが墳丘企画の部分的共有、具体的には前方部設定方法の合致がある。目沼7号墳や日天月天塚古墳は周辺の古墳との関連も考慮に入れなければならないが、大きくみたときに「下総型埴輪類型」として捉えられる可能性を指摘しておく。

以上の各古墳は下総型埴輪製作工人集団の長距離供給先の例といえる。同じように長距離供給をおこなう例として、生出塚埴輪製作工人集団の製作品がある。この場合、坂本和俊が指摘したように、千葉県市原市山倉1号墳と埼玉県行田市埼玉奥の山古墳の墳丘企画が合致するとの指摘は注目すべきであろう（坂本前掲）。また、以前筆者が指摘した千葉県千葉市人形塚古墳と山武郡横芝光町殿塚古墳の墳丘企画の合致も同様に捉えられるであろう⑦。つまり、下総型埴輪の長距離供給例の中で、朝日ノ岡古墳・小谷1号墳などとその他の長距離供給例は、供給の契機に違いがあるのではなかろうか。坂本がいうように、墳丘企画と埴輪の共通性が血縁を含めた紐帯を示すとしたら、朝日ノ岡古墳・小谷1号墳例はもっと緩やかな首長間における物品の遣り取りの所産と捉えられるのではなかろうか⑧。目沼7号墳は後の下総の領域に相当するし、距離的にも高野山古墳群から30kmほどである。日天月天塚古墳は後の常陸の領域であるが「香取海」の対岸には城山古墳群が存在する。中小首長の連携の結果、「下総型埴輪類型」の墳丘をもつに至ったと考えたい。

おわりに

ここまで、下総型埴輪を出土した古墳の墳丘企画をもとに埴輪の供給に絡む地域社会の素描を試みた。大分類としての「下総型埴輪類型」と、小分類としての高野山類型・城山類型を抽出できたことは、大分類が中小首長の連携の結果、小分類が中小首長のこまかな領域支配の様をそれぞれ示していると思われる。関東地方における古墳時代後期の「下総」地域に、前方後円墳の同一墳丘企画という独自な政治的紐帯が存在していたことは、前方後円墳という同一の墳形が全国的に分布する現象に内在する地域ごとの能動的な一面を示していると考えられる。白石太一郎は「関東各地における異常ともみえるほどの後期大型前方後円墳の盛んな造営（白石 1992：p.47)」という事実から、そこに「畿内政権の経済的・軍事的基盤として（白石前掲：p.46)」の関東地方という位置付けをおこない、このことから他地域とは異なる特殊な基準があったとする。また、和田晴吾は同様な状況をして「共同体的規制の強く残る伝統的な土豪的首長層の存在（和田 1996：p.72)」を推定している。

筆者の今回おこなった検討結果は、極めて限られた地域の状況ではあるけれども、埴輪が品物として流通していた場合もあった可能性を指摘した。畿内の意向とはまったく関係ないところで、各地の首長が物品の遣り取りをおこなっていた訳である。そこに畿内政権の規制力は、働いていないといえるだろうし、関東地方における形象埴輪の多様性の存在も同様に考えることができると思われる。「下総型埴輪類型」とした墳丘企画が、独自に発案・発展したものであるのかどうかについては、今後の課題である。ただし、同時期の関東地方において類例は未確認であることだけは指摘しておきたい。

従来、あふれる情報の中で遺物と遺構の研究を有機的につなげる作業が立ち遅れていたことは否めない。もとより、この結果のみで関東地方全体を語ることはできないし、触れることができなかった内部主体や副葬品などを考慮に入れて考察すべきであることはいうまでもない。次章において、内部主体や副葬品などの特徴から遺物と遺構の検討をさらに進めたい。

註

① 1997年12月7日の葛飾区郷土と天文の博物館における地域史フォーラム「6世紀における房総と武蔵の交流と地域性」での口頭発表による。

② 第3章で詳述した。

③ 図面上では前方部埴輪列延長線の交点が後述する城山類型と同様になる。ただし、本古墳の裾線は報告に明確に記載されておらず、今回の復原は変更される可能性を含んでいる。また、城山類型とは前方部長などに相違があり、むしろ高野山類型に近いと考えられる。よって、ここではひとまず高野山類型としておく。

④ また、鶏塚古墳は詳細が不明であるが、下総型埴輪を客体的に含む事例と思われる。このことから、在地の墳丘企画を有する古墳である可能性もあろう。

⑤ 柴又八幡神社古墳はその後の調査により、墳丘長 20m以上の前方後円墳と推定されている（谷口ほか 2009)。直線状に伸びる埴輪列の存在は前方後円墳の可能性を示唆するものであるが、墳丘裾が明確でないことや全体像が未詳であることから、ひとまず円墳として論述していく。

⑥ 千葉県内の各古墳出土埴輪を胎土分析した三辻利一の結果を受け、高梨俊夫は筆者と同様に1ヶ所での生産を示唆している（高梨 1994)。

⑦ 1997年12月7日の葛飾区郷土と天文の博物館：地域史フォーラム「6世紀における房総と武蔵の交流と地域性」での口頭発表による。

⑧ 筑波山麓から産出される雲母片岩を用いた埋葬施設を検討した石橋充はその石材の広い分布圏に政治的な性格が希薄であることを述べている（石橋 1995)。

図版引用文献

図1－1　藤本ほか 1969

　　－2　山田古墳群遺跡調査会 1982

　　－3　財団法人山武郡市文化財センター1996

　　－4　早稲田大学考古学研究室 1961

　　－5　荒海古墳群発掘調査団 1975

　　－6　印旛村教育委員会 1977

図2－1　藤本ほか 1969

　　－2　小牧 1994

　　－3・4　藤本ほか 1969

　　－5　千葉県文化財センター1996

図3－1　丸子ほか 1978

－2　尾崎ほか 1976

－3　財団法人香取郡市文化財センター1993

図4－1　千葉県文化財保護協会 1990

－2　高橋 1992

－3　田中 1981

－4　谷口ほか 1992

－5　中村ほか 1990

－6　杉戸町教育委員会 1964

図5－1　埼玉県教育委員会 1959

－2　茂木ほか 1998

図6　筆者作成

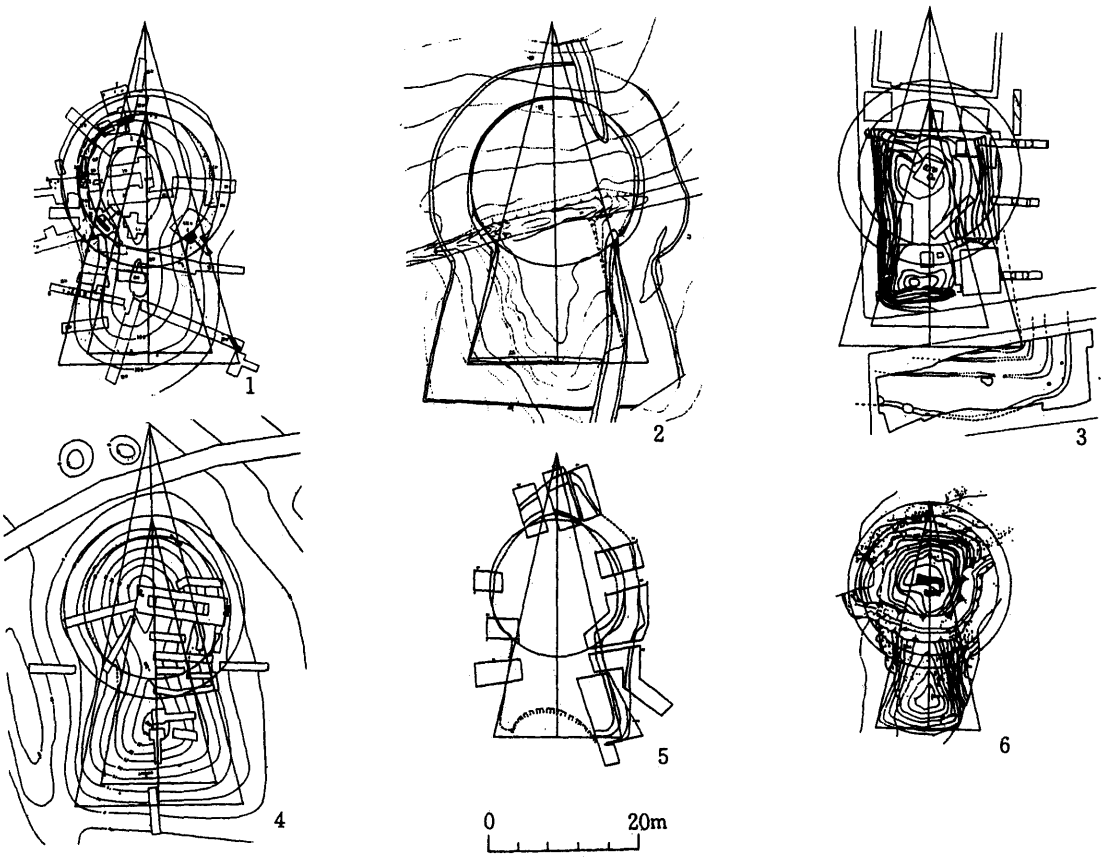


図1　高野山類型墳1

1. 高野山1号墳　2. 宝馬127号墳　3. 宝馬35号墳

4. 油作Ⅱ号墳　5. 荒海15号墳　6. 吉高山王古墳

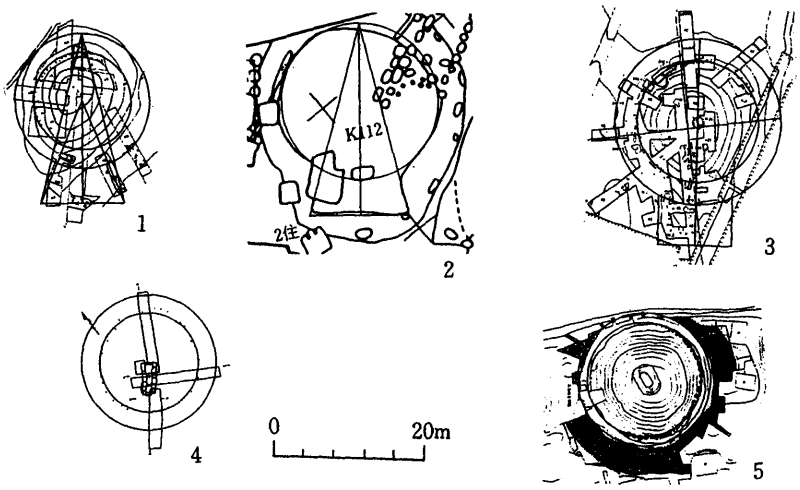


図2　高野山類型墳2

1.高野山2号墳　2.竜角寺112号墳　3.高野山4号墳

4.高野山3号墳　5.大木台2号墳

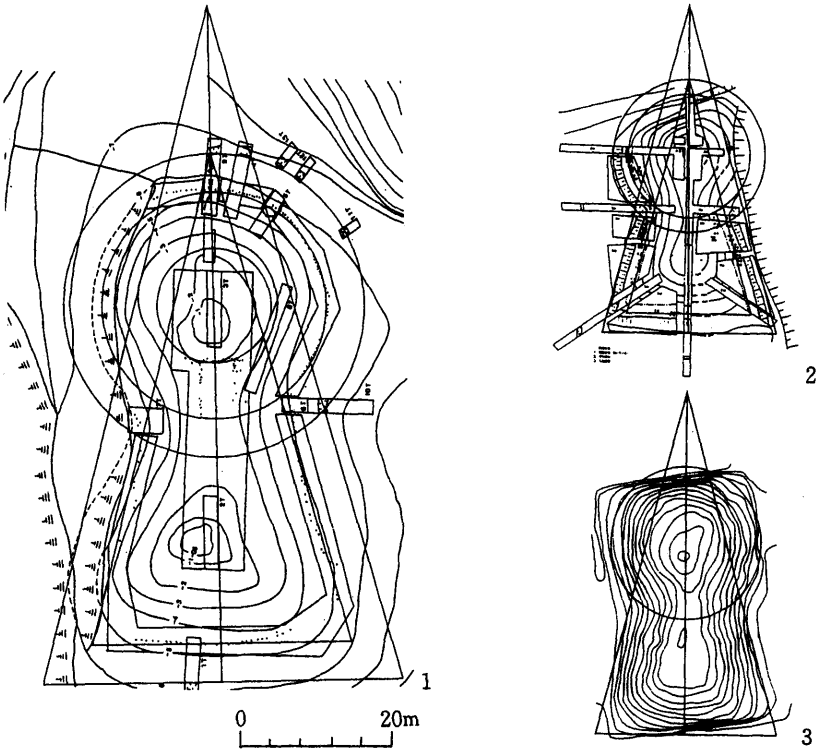


図3　城山類型墳

1.城山1号墳　2.片野23号墳　3.城山4号墳

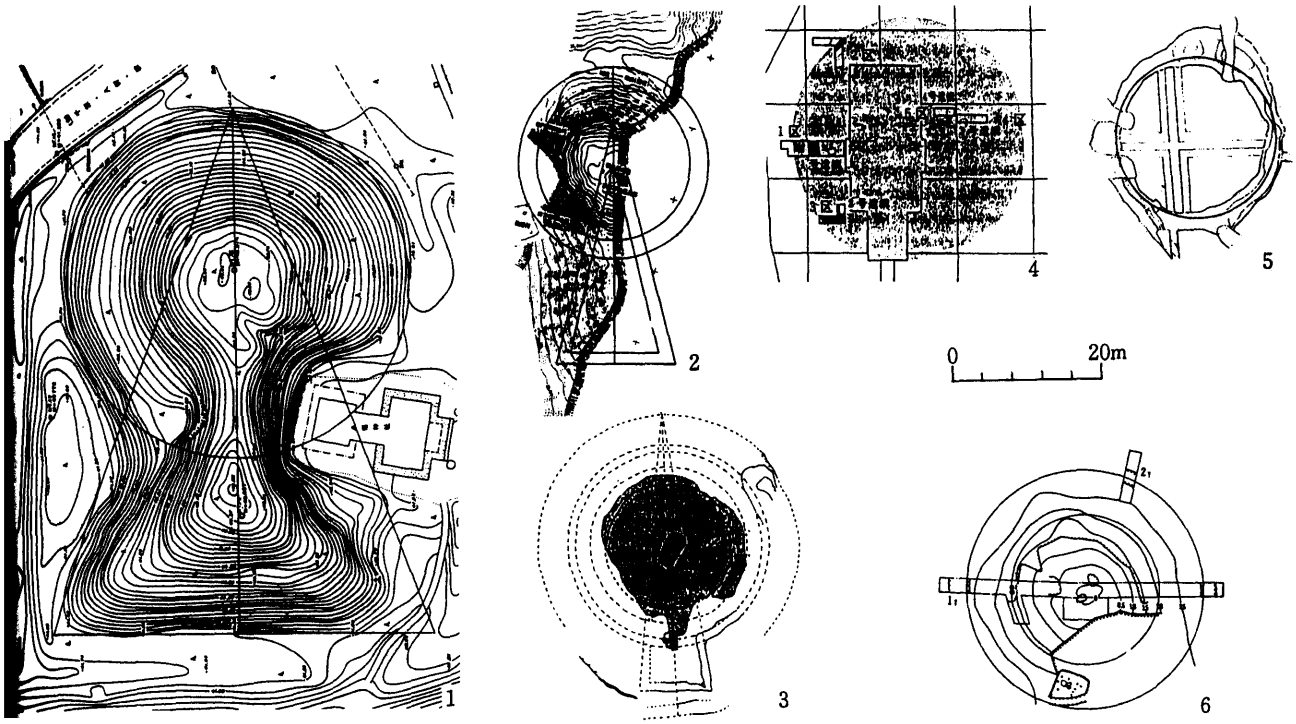


図4　他企画・不明企画の古墳

1.朝日ノ岡古墳　2.小谷1号墳　3.根田130号墳　4.柴又八幡神社古墳

5.長峰17号墳　6.目沼11号墳

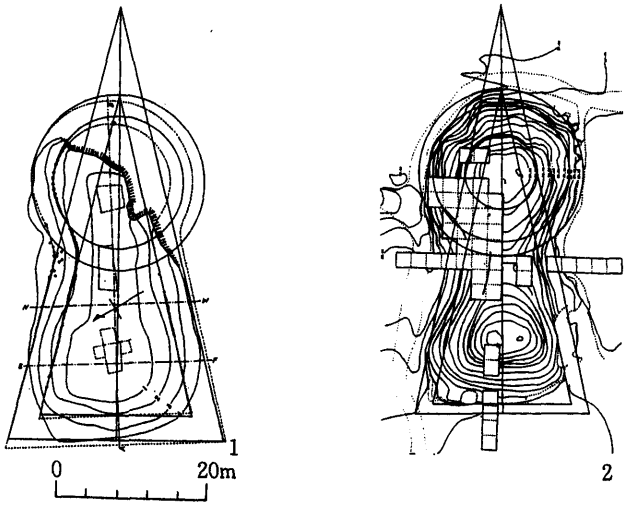


図5　目沼7号墳と日天月天塚古墳の墳丘企画

1.目沼7号墳　2.日天月天塚古墳

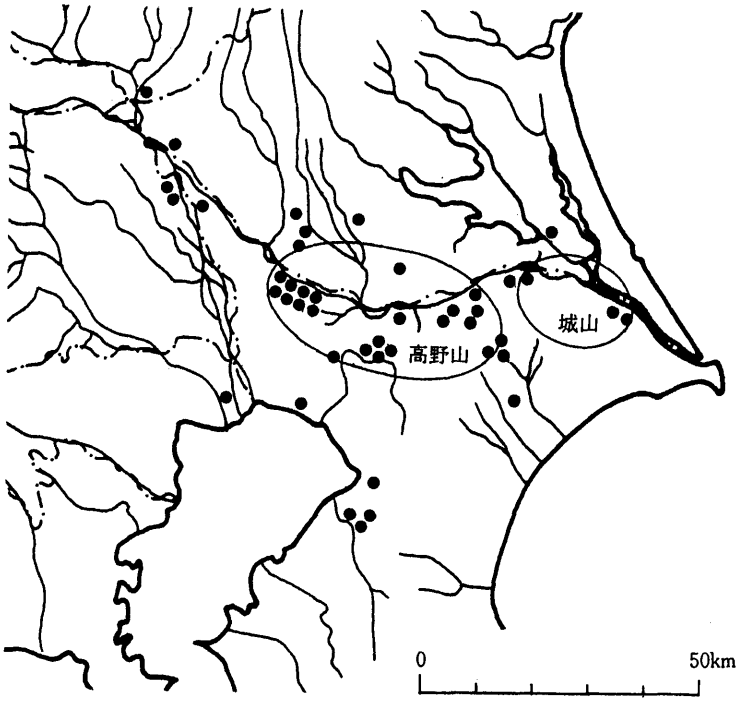


図6　下総型埴輪の出土分布と各類型墳の分布範囲

表１　下総型埴輪出土古墳のデータ一覧

	古 墳 名	墳形	規模	後円部径	円筒列径	くびれ幅	前方部長	前方部幅	胎土	備 考	文献
1	高野山1号墳	方円	35	22.5	17.5	15	12.5	24	Ⅰ		藤本ほか1969
2	高野山2号墳	方円	22.5	17.5	13	6.8,8.5	5	11	Ⅰ		
3	高野山3号墳	円	17.5	17.5	13	—	—	—	Ⅰ		
4	高野山4号墳	方円	27.5	22.5	16	9.8	5	10	Ⅰ		
5	吉高山王古墳	方円	30	22	18	10	8	14	—		印旛村教育委員会1977
6	大木台2号墳	円	18	18	15	—	—	—	Ⅲ		千葉県文化財センター1996
7	油作第Ⅱ号墳	方円	38	24	18.6	15	14	22.2	—		早稲田大学考古学研究室1961
8	荒海15号墳	方円	29	18	?	11	11	17	—		荒海古墳群発掘調査団1975
9	竜角寺112号墳	方円	25.2	21	?	10	4.2	13	Ⅰ		小牧1994
10	片野23号墳	方円	33.5	20	16	14.5	13.5	23	Ⅴ		尾崎ほか1976
11	城山1号墳	方円	70	40	31	29	30	48	—	他系譜埴輪あり	丸子ほか1978
12	城山4号墳	方円	35	20	?	14.5	15	24	—		財団法人香取郡市文化財センター1993
13	宝馬35号墳	方円	35	25	17.5	20,15	10	25	—		浜名ほか1980、財団法人山武郡市文化財センター1996
14	宝馬127号墳	方円	35	22.5	18?	15	12.5	24	—		山田古墳群遺跡調査会1982
15	にわとり塚古墳	方円	40	?	?	?	?	?	Ⅰ	他系譜埴輪あり	山武考古学研究所1989、石倉・安井2000
16	朝日ノ岡古墳	方円	70	47	?	31	23	52.5	—	他系譜埴輪あり	千葉県文化財保護協会1990、城倉2006a
17	小谷1号墳	方円	40	26	20.6	9	14	16.2	Ⅰ		高橋1992
18	根田130号墳	方円	34	27	21	9	7	10	—		田中1981
19	柴又八幡神社古墳	円	20	20	?	—	—	—	—		谷口ほか1992・2009
20	目沼7号墳	方円	45.3	23	17.4	16	22.3	28.7	Ⅰ		埼玉県教育委員会1959
21	目沼11号墳	円	32	32	20	—	—	—	—		杉戸町教育委員会1964
22	長峰17号墳	円	21.6	21.6	?	—	—	—	—	常陸地域	中村ほか1990
23	日天月天塚古墳	方円	42	22	18	13.5	20	23.5	—	常陸地域	茂木ほか1998

凡例…方円―前方後円墳　円―円墳　胎土は三辻利一1994「千葉県内の古墳出土埴輪の蛍光X線分析」
『千葉県文化財センター研究紀要』15　による

第７章　下総型埴輪が樹立された前方後円墳形態

はじめに

前方後円墳が各地域における有力首長の墓である、と認識されるようになって久しい。国土開発に伴う古墳発掘調査が飛躍的に増加し、群集墳や中小古墳の調査成果が数多く報告されるなか、前方後円墳の内部主体や副葬品、そして埴輪類の具体像との比較検討によって、なおさら前方後円墳被葬者の卓越性が強調される結果となった。さらに、前方後円墳の墳丘企画に関する諸研究によって、一定の共通企画を有する古墳の分布域や企画の共有からみた地域間交流などのより具体的な古墳時代像が描かれつつある（倉林 1996、坂本 1996）。

第６章において古墳時代後期の常総地域前方後円墳の墳丘企画をとりあげ、地域的まとまりと埴輪（下総型）と墳丘企画の共通性を論じた。下総型埴輪という同一埴輪製作工人集団の製作品が供給された古墳に、共通する墳丘企画を見出し、墳丘の築造と埴輪供給の密接な関係を示したのである。

古墳の築造には、選（占）地に始まり設計、築造（掘削・盛土）、内部主体構築、埴輪樹立、埋葬など様々な段階が複合的に重なり合っている。それらの諸段階は、それぞれが独立した専門集団によって別箇になされて最終的に一つの墳墓として完成するのだろうか。それとも、一定の規範を有する同一の専門集団として、計画的に作業がなされていたのだろうか。

これらを解くには、古墳の築造における諸段階を複眼的に考察する必要があろう。そこで、本章では常総地域における前方後円墳に対して、墳丘企画・内部主体・埴輪・副葬品の諸要素を抽出し、古墳相互の共通点と非共通点の具体像を提出する。

なお、埴輪については同一埴輪製作工人集団の製作品と認定してよい下総型埴輪（轟 1973、犬木 1995・1996・2005、および第３章参照）を中心として論を進めていく。また、埴輪を樹立しない同時期以降の前方後円墳も考察の対象とする。いわゆる「前方後円形小墳」（岩崎 1992）は、墳丘規模が著しく小さいことや、前方部が極めて短小で造出し状のものが多く、前方後円墳とすることに躊躇を憶えるが、常総地域に広く分布することから若干例をとりあげたい。対象地域は、下総型埴輪が出土している範囲である常陸南部地域も含めることにする。

1. 前方後円墳企画について

1-1 下総型埴輪を樹立する前方後円墳

下総型埴輪を樹立する古墳の墳丘企画①については第 6 章で詳述したので、そちらを参照していただくとして、ここではその結論のみ述べる。前方後円墳の墳丘平面企画は、前方部が後円部半径長を主軸線状に延長した点を交点として設定されている。さらに、円丘部径と埴輪列径が共通性をもつ事例も確認できる（一部円墳を含む）。ただし、前方部埴輪列を後円部方向へ延長した交点が、後円部埴輪列径となる場合と、後円部裾径となる場合の 2 種が存在する。前者を高野山類型（図 1）、後者を城山類型（図 2）と呼ぶ。高野山類型は今の印旛沼・手賀沼周辺に分布しており、城山類型は今の利根川下流域に分布する。前方部埴輪列の設定に違いを見せるものの、前方部の設定については共通することから、これらをあわせて「下総型埴輪類型」と呼称する。なお、茨城県潮来市日天月天塚古墳と埼玉県北葛飾郡杉戸町目沼 7 号墳は、ともに前方部長が他と共通していないが、前方部の設定は後円部半径長を主軸線状に延長した点を交点としている。つまり、同一の設定方法を採用していることになるので、「下総型埴輪類型」に含めてよいと思われる。

この他に、異なる墳丘企画を有する古墳も存在する。上総地域の千葉県山武市朝日ノ岡古墳（木戸川流域）、市原市小谷 1 号墳（村田川流域）、市原市根田 130 号墳（養老川流域）である。朝日ノ岡古墳は山武郡域の古墳であり、下総型人物埴輪を客体的に含むもので、墳形は山武郡域通有のものである②。小谷 1 号墳・根田 130 号墳の類例は、現在までのところ判然としないが、前者は近在する千葉市中原Ⅲ・Ⅳ号墳などと共通すると思われる。後者は未詳である。

1-2 下総地域の埴輪を樹立しない前方後円墳

まず、我孫子古墳群中の千葉県我孫子市我孫子四小古墳、同日立精機 1・2 号墳をとりあげよう。前方後方墳の日立精機 1 号墳は、調査成果を図上で復原する限り、前方部の主軸が後方部の主軸線とずれている。ただし、前方部の設定は後方部長の半分の長さを前方部主軸上に延長した点に求められることから（図 3 - 1）、下総型の墳丘企画と考えてよかろう。他の 2 基はおおむね下総型埴輪類型（高野山類型）と考えられる。

千葉県印旛郡酒々井町狐塚古墳は墳丘が著しく改変されており、前方部前端や前方部側面の墳丘裾は検出されていない。ただし、前方部南東側は当時の墳丘を残していると思わ

れるので、それを積極的に採用すると、おおむね下総型埴輪類型（高野山類型）に復原できる（図 3 - 2)。

千葉県成田市菊水山 2 号墳は 2 段築成の古墳であり、詳細は正式報告をまたざるを得ないものの、確認調査や全面調査の内部主体位置などの成果を活かすならばおおむね城山 1 号墳の 5 分の 3 の企画を有する下総型埴輪類型（城山類型）と考えられる（図 3 - 3）③。

1-3　下総地域の「前方後円形小墳」

下総型埴輪が伴う例としては。千葉県我孫子市高野山 2・4 号墳、印旛郡栄町竜角寺 112 号墳があげられる。いずれも前方部が短くかつあまり開かないという特徴を有し、内部主体は後円部と前方部の境の主軸上あるいは裾部に寄った部分に構築されている。墳丘の中心部に内部主体をもたないという点はいわゆる「変則的古墳」の特徴である（市毛 1963・1973、杉山 1969)。この種の古墳は常総型古墳と呼ぶ研究者もいるように（安藤 1981）④、常総地域に数多く、かつ群集墳として認められるものである。また、近年の発掘調査により前方後円形小墳の類例が増加してきているので、若干例をとりあげてみよう。

とり上げるのは千葉県印旛郡栄町小台 1・2 号墳、佐倉市野中 5 号墳である。いずれも雲母片岩の箱形石棺を墳丘裾近くの地下に構築している。墳丘企画は、前方部幅が後円部径とほぼ同じで、前方部の設定は主軸上の後円部裾を交点とし、前方部長は 2 分の 1 以下、3 分の 1 などと短いものとなっている（図 4)。

前述の高野山 2 号墳などは後円部・円筒列径で下総型類型の他の古墳と共通点がある。小台 1 号墳などの内部主体とは地下埋葬という点で共通するが、いまは墳丘企画の上での共通点は見当たらないという点を指摘しておきたい。

1-4　常陸南部の前方後円墳

下総型埴輪は現在までのところ「下総」以外の地域では、上述の上総の地域に加え栃木県小山市や茨城県つくば市・土浦市・潮来市などからも出土している。境界地域に位置するものが多いが、特に「常陸」南部地域には後期の前方後円墳が数多く築かれている。しかし、墳丘裾確認を経たものは皆無で、企画の検討をするための厳密さに欠けることは否めない。

以前、筆者が常陸南部の前方後円墳を検討した際は測量図の裾線をもとに茨城県つくば市松塚 1 号墳の墳丘復原をおこなった（日高 1998b)。その結果、後円部半径の 1.7 倍の長

さを、主軸線上に延長した点に基準を設けて前方部設定がなされていると考えた。しかし、下総型埴輪類型墳を検討している途上で、本古墳の後円部半径を延長した点から前方部を設定した場合どのようになるか試してみた（図 5)。墳丘測量調査における筆者の裾線認識とは、当然のことながらずれてくる。ただし、下総型埴輪類型（高野山類型）と整数値ではないが相似形に近くなる。発掘調査による裾線未確認の現状ではいずれとも決しがたいが、後述する内部主体の石材との関わりを考えたとき看過できない。

いずれにせよ、今後確認調査などを経て解決すべきものであるから、ひとまず以前考えた墳丘企画をもって「常陸南部類型」とする。ちなみに、同様の墳丘企画をもつものとして茨城県かすみがうら市風返稲荷山古墳、土浦市宍塚 1 号墳、つくば市大井 5 号墳があげられる。潮来市大生西部 1 号墳に関しては、顎鬚を蓄えた人物埴輪を出土したことで著名だが、周辺や山武郡域などの墳形に類例はなく、不明とせざるを得ない。

2．内部主体について（表 1)

2-1　下総型埴輪出土古墳の内部主体

内部主体の内訳は、雲母片岩を用いた箱形石棺(6)・竪穴式石室(1)、砂岩を用いた横穴式石室(1)、房州石を用いた横穴式石室(1)、砂岩切石を用いた横穴式石室(3)・箱形石棺(3)、木棺直葬(5)である。雲母片岩は産出地が筑波山麓にあり、砂岩はそれぞれの古墳の周辺で産出するものと思われる。

雲母片岩の板石・割石を用いた横穴式石室は採用されておらず、箱形石棺・竪穴式石室のみである。これに関しては石橋充の「広い分布圏」に対する「政治的な性格が希薄である」という認識を支持したい（石橋 1995：p.48)。そうすると、他の内部主体は在地の石材（砂岩）を利用した横穴式石室、竪穴式石室、箱形石棺、さらに木棺直葬ということになる。これらの明確な地域的特徴は確認できず、房総北半域で切石石棺・横穴式石室を基本とした中に雲母片岩の箱形石棺がモザイク的に分布するようである。ただし、小谷 1 号墳、根田 130 号墳がともに木棺直葬であったことは、墳丘企画・内部主体が在地のものであるところに、下総型埴輪が供給されたことを示しており、他の下総型埴輪出土古墳とは異なる在り方となろう⑤。

そのような中で、東京都葛飾区柴又八幡神社古墳は特異な存在である。低地に立地することに加え、内部主体は房州石を用いた横穴式石室であった。その詳細な構造は不明なも

のの、東京湾に注ぎ込む今の江戸川・荒川の玄関口に位置している。同古墳の被葬者は武蔵と総の交流の架け橋を担った人物と位置付けられよう（第5章参照）。

さらに、城山1号墳の横穴式石室については先学の指摘どおり、千葉県市川市法皇塚古墳との共通点が認められるものであり（小沢 1989）、石材については自然石を一部加工したものを使用している。なおかつ釘付き木棺を納めているものは、同時期では本古墳と法皇塚古墳のみであることは注意すべきである。

2-2 雲母片岩を用いた内部主体について

千葉県香取市三之分目大塚山古墳の長持形石棺が初現である。同時期の常陸地域については未詳であるが、雲母片岩を用いた石棺の存在する可能性は極めて高い⑥。常陸南部地域では6世紀中葉頃まで雲母片岩を用いた箱形石棺が首長墓(盛土中)で採用されており、その後横穴式石室が導入される。片岩使用横穴式石室は乱石平積みで側壁を構築したものから、部分的に板石を組んだものや板石組へと変遷する。また、単室構造から複室構造へという変化も追え、終末期になると石棺系石室となる（石川 1989、稲村 1991）。横穴式石室が導入された後、箱形石棺は小円墳や墳丘をもたない主体部（地下埋葬）にまでその裾野が広がるとともに、その出土分布域も広範囲になる（石橋 1995）。

雲母片岩板石組横穴式石室は、茨城県かすみがうら市栗村東 10 号墳（板石の上に割石を積む）が参考となる。出土した須恵器はＭＴ85号窯期と考えられ、同粟田石倉古墳は後続する古墳と考えられる。雲母片岩板石のみの横穴式石室に関しては、行方市玉造大日塚古墳⑦で採集される円筒埴輪の特徴が 6 世紀中葉～後葉頃の所産と考えられ、このころから板石組横穴式石室がつくられるようになったと思われる。その後、常陸地域の首長墓では、盛んにこの種の横穴式石室が作られる。

しかし、下総地域では、すぐにこの種の横穴式石室が導入されたわけではなく、おおむね TK209 型式期に袖石や閉塞石などの部分的採用（成田市菊水山 2 号墳や印旛郡酒々井町狐塚古墳および山武市経僧塚古墳など）がなされる。印旛郡栄町浅間山古墳は出土した副葬品や須恵器の特徴は TK217 型式期とせざるを得ない⑧。また、墳丘企画は下総型のそれとはまったく異なり、山武郡域の前方後円墳と共通する可能性がある。同古墳の横穴式石室は玄室がほぼ正方形をなし、常陸地域ではつくば市平沢 4 号墳、石岡市兜塚古墳、かすみがうら市折越十日塚古墳などがあげられる。常陸南部地域では、いわゆる終末期方・円墳にもこの種の横穴式石室が引き続いてつくられており、石棺系石室への変換は TK217

型式期以降と考えられる。下総地域の石棺系石室もおおむね同時期以降の所産と思われる。

3．副葬品と出土土器について（表１）

3-1　副葬品について

まず、馬具を出土した古墳がほとんどないことがあげられる。馬具を副葬していたのは千葉県香取市城山１号墳、東京都葛飾区柴又八幡神社古墳、千葉県市原市根田 130 号墳のみである。他については、墳丘が削平されていたり、主体部が盗掘されたりしているものもあることを考慮しなければならないが、出土している古墳の主体部が前述したように他と著しく異なる点は注意すべきであろう。特に柴又八幡神社古墳の鉄地金銅張馬具の存在は、本古墳が円墳とするには躊躇を覚えるものであり、発掘調査により墳丘裾部の詳細は未詳なものの、墳丘長 20m以上の前方後円墳と推定されている（谷口ほか 2009)。今少し全体像がわかるデータが欲しいものであり、さらなる調査の進展が期待される。

つぎに注目されるのは、武具を副葬していた古墳である。城山１号墳、茨城県潮来市日天月天塚古墳があげられる。前者は衝角付冑と挂甲、後者は挂甲が出土している。武具を出土している古墳が他にないことを考えると、両者の被葬者は他の古墳のそれとは質的に異なる性格をもち合わせていたと解することもできる⑨。ただし、墳丘縁辺に地下埋葬の主体部を設けている千葉県佐倉市野中５号墳は、その第１施設（雲母片岩箱形石棺）から直刀、挂甲、鉄鏃、馬具？、須恵器多数が出土している。築造年代は７世紀中葉頃と思われ、追葬も考慮しなければならないが、前代の同規模下総型埴輪出土古墳の副葬品を凌駕する内容である。

その他の古墳の多くは、直刀、鉄鏃、装身具類という組み合わせであり、いわゆる「変則的古墳」の副葬品と同様の在り方を示している。同時期の砂岩切石積・雲母片岩箱形石棺の被葬者と、下総型埴輪を樹立している古墳のそれとの間に副葬品での優劣はつけにくい。

3-2　出土土器について

下総型埴輪出土古墳に伴う土器類はそれほど多くはないが、須恵器では TK43 型式期ないし TK209 型式期であり、土師器では小沢編年４期ないし５期である（小沢 1995)。これらの土器類は、おおむね６世紀後葉～７世紀前葉頃の所産と考えられる。これらの特徴

は、墳丘上に土器が置かれていることである。すなわち、内部主体の中からはいっさい出土していない。

同時期の上総（富津・木更津周辺）では、須恵器が副葬品の一部をなしていることはごく当たり前であり、山武郡域の古墳でも横芝町姫塚古墳のように埴輪列の内側と横穴式石室内の両方から出土している例もあるが、おおむね石室内から出土している。下総の地域では、その後も横穴式石室内に須恵器を副葬することは稀なようで、菊水山2号墳でも墳丘からまとまって須恵器（TK209型式期）が出土している。内部主体に副葬品として須恵器を納めるのは、TK217型式期になってからと思われる。

4．前方後円墳形態と課題

埴輪の生産と供給、さらには古墳の築造との関係については、今まで不明な点が多かった。というのも、古墳の築造にかかる諸段階についての研究が、それぞれ別箇に進められていたことに起因している。しかし、関東地方の埴輪生産の実体は、他地域のそれに比べて具体像がかなり判明していることから、本章で述べたような検討をしたわけである。

かなり雑駁なものではあるが、下総型埴輪出土古墳の墳丘企画、内部主体、副葬品について共通性と非共通性を検討してきた。その結果、下総型埴輪と墳丘企画に密接な関係があること、内部主体には厳密な共通性は認められず、かつ石材や形態による差異も認められないことを指摘した。また、副葬品の様相などを考慮に入れると、城山1号墳、日天月天塚古墳、柴又八幡神社古墳の被葬者が、他とは異なる性格を有していると考えた。

下総型埴輪が樹立された古墳はおおむね6世紀後葉～末頃と考えられるが、埴輪樹立終了後の前方後円墳についても同一の墳丘企画を有していることも指摘し得た。常陸南部地域の前方後円墳の墳丘企画に関しては、共通する可能性を指摘するにとどまったが、今後の確認調査などを経てから再考したい。

下総型埴輪という限定された資料を用いて古墳築造にかかる相互の関係を素描した。限定された時期・地域であり、これがどこまで普遍化できるかは、今後の課題となる。しかし、埴輪生産と墳丘築造に密接な関係があり、内部主体の石材には明確な共通性が見出せなかったことは、極めて示唆的である[10]。

註

① 墳丘企画研究には戦前から今日まで膨大な研究蓄積が存在する。本章は後円部や墳丘長を基準とする区画論は採用していない。それは、墳丘が完全に削平されている古墳は、墳頂平坦面や立面形態、段築などの検討ができない。このことから、ひとまず墳丘裾を基準とした平面形の異同を論じる。また、尺度に関しても今回は触れない。

② 同古墳以外に、山武市埴谷3号墳出土とされる人物埴輪に下総型のそれが存在する（山武町史編さん委員会 1988)。同古墳のものかどうか確証は得ていないが、墳丘企画は後円部径と前方部幅がほぼ同じで、前方部長がやや短い形態をもち、山武郡域通有のものである。

③ 同古墳の近隣には成田市中台4号墳（墳長 70m）が存在する。測量調査のみであり、墳丘企画の詳細は発掘調査を経てからとせざるを得ないが、前方部が後円部径を凌駕するものと思われる。私案では前方部設定が下総型類型と同様になる。ちなみに成田市中台1号墳（墳形不明）からは下総型埴輪が出土している（下総町史編さん委員会 1990)。

④ ただし岩崎卓也は、栃木県域や茨城県北部域にも同様の古墳が存在することを指摘している（岩崎前掲)。

⑤ 第1章で品物としての埴輪の流通があった可能性を指摘した。

⑥ 石岡市舟塚山古墳が築造された段階での石棺導入については、かつて詳述したことがある（日高 1998a)。

⑦ 本古墳からは衝角付冑、挂甲、十字文楕円形鏡板付轡、素環鏡板付轡、鐙鞍、鹿角装刀子、長頸鏃などが出土したと紹介されているが（長谷川 1976)。その後、東京国立博物館で購入し詳細な観察を行うことができた（日高 2008b)。内山敏行によれば、出土した衝角付冑、挂甲などは6世紀後葉ころのものと考えられるようである（内山 2003)。しかし、十字文楕円形鏡板付轡はいま少し時期が遡るようにも思われる。追葬などを考慮すべきだろうか。

⑧ 茨城県かすみがうら市風返稲荷山古墳出土の須恵器はこれまで TK209 型式期とされてきたが、詳細に観察するとそれより一段階新しい可能性が高い（日高 2000a)。

⑨ 川西宏幸は甲冑の型式とその分布を検討し、6世紀に挂甲が関東に集中している現象に対して、畿内政権が軍事動員基盤を関東に肩代わりさせた結果と捉えている（川西 1986)。

⑩ 『古事記』垂仁段には比婆須比賣命の時のこととして「石祝作」と「土師部」を定めるとある。

図版引用文献

図1　藤本ほか 1969

図2　丸子ほか 1978

図3－1　藤本ほか 1969

　　－2　野中ほか 1976

　　－3　荒井・坂本 1995

図4　千葉県文化財センター1995

図5　日高 1998b

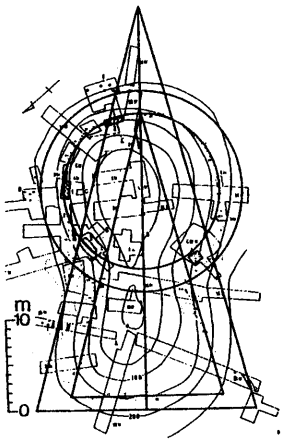


図1　下総型埴輪類型墳（高野山類型）

高野山1号墳

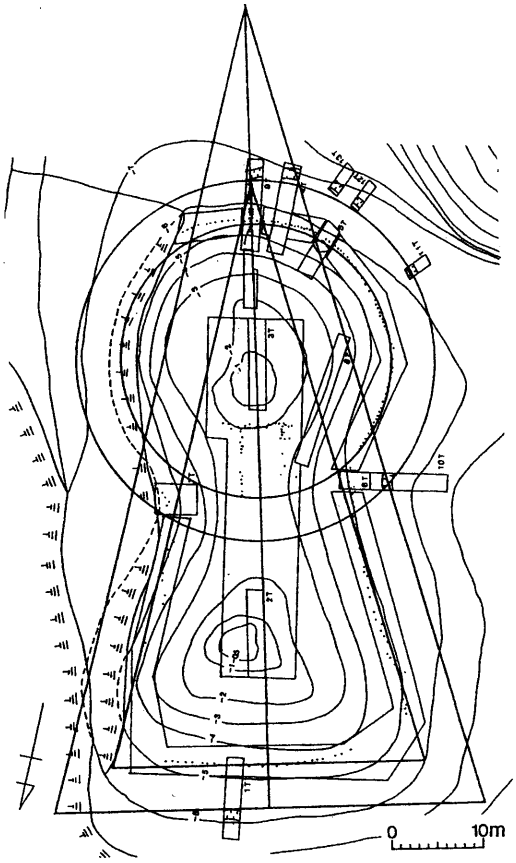


図2　下総型埴輪類型墳（城山類型）

城山1号墳

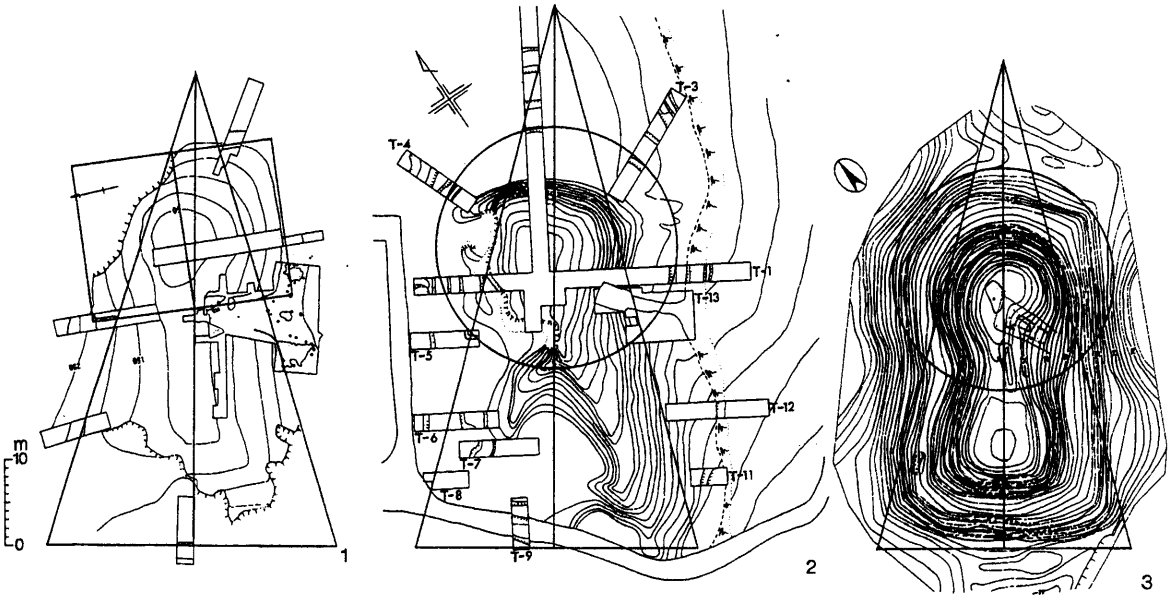


図3　埴輪を樹立しない下総型埴輪類型墳

1.日立精機1号墳（高野山類型）　2.狐塚古墳（高野山類型）　3.菊水山2号墳（城山類型）

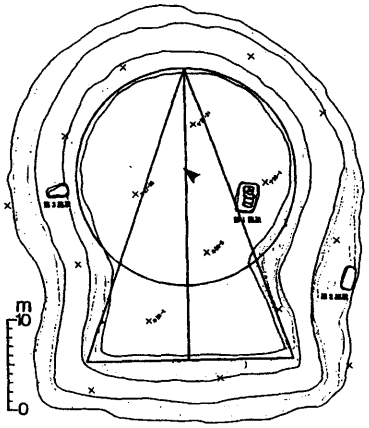


図4　野中5号墳の墳丘企画

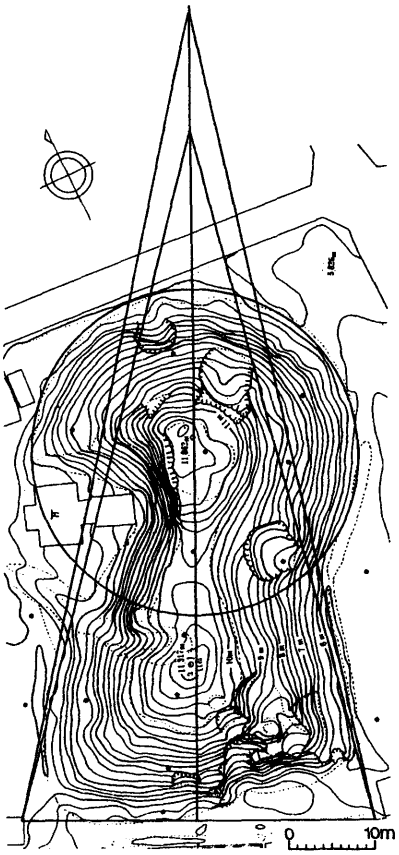


図5　松塚1号墳の墳丘企画

表1　本章で言及する古墳の諸要素

地域	小地域	番号	古墳名	墳形	規模	墳丘企画	埴輪	内部主体	石材	特記すべき副葬品など	文献
下総	北浦沿岸	1	大生西部1号墳	前方後円	71.5	不明	顎飾	箱棺	雲母片岩	直刀、鉄鏃、礫床より冠金具、TK209型式期	大場ほか1971
		2	日天月天塚古墳	前方後円	42	下総型	下総	箱棺	雲母片岩	挂甲、直刀、鉄鏃	茂木ほか1998
	出島地域	3	追越十日塚古墳	前方後円	70	?	なし	複室横室(箱棺1)	雲母片岩	白土、赤彩、朱線	霞ケ浦町教育委員会2000
		4	風返稲荷山古墳	前方後円	77	常陸南部型	なし	複室横室(箱棺3)	雲母片岩	頭椎、銅鈴、馬具、TK217型式期	霞ケ浦町教育委員会2000
		5	太子唐櫃古墳	前方後円	?	?	なし	横室(箱棺1)	雲母片岩	-	大野1896、出島村史編さん委員会1971
	桜川下流	6	松塚1号墳	前方後円	62	常陸南部型	なし	未群	未群	新治周辺須恵器	日高1998b
		7	宍塚1号墳	前方後円	56	常陸南部型	雲母	箱棺、木直	雲母片岩	-	国学院大学宍塚調査団1971
	牛久沼周辺	8	大井5号墳	前方後円	46	常陸南部型	なし	未群	未群	-	大井古墳群発掘調査団1975
	龍ヶ崎	9	長峰17号墳	円	21.6	-	下総(分離)	不明	不明	-	中村ほか1990
下総	利根川下流	10	城山1号墳	前方後円	70	下総型	下総、下野？	片袖横室(鉄釘木棺)	砂岩	鏡、単龍環、武具、冠金具、馬具、TK43型式期	丸子ほか1978
		11	城山4号墳	前方後円	35	下総型	下総	未群	未群	-	財団法人香取郡市文化財センター1993
		12	城山6号墳	前方後円	42	不明	なし	横室・穹窿(鉄釘木棺)	砂岩切石	-	市毛・多宇1974
		13	城山9号墳	前方後円	49	不明	なし	横室	不明	-	丸子ほか1978
		14	片野23号墳	前方後円	33.5	下総型	下総	木直	-	直刀、鉄鏃	尾崎ほか1976
		15	坂ノ上1号墳	前方後円	37	下総型	下総？	不明	不明	-	大和田坂ノ上遺跡調査会1988
		16	滑川坂の上4号墳	前方後円	70	下総型？	なし	横室？	不明	中台1号墳から下総型埴輪出土	下総町史編さん委員会1990
		17	鵜水山2号墳	前方後円	44	下総型	なし	横室(箱棺1)	砂岩割石・雲母片岩	馬具、他に箱棺・木棺あり、TK209型式期	下総町教育委員会1991、荒井・坂本1995
		18	鵜水山4号墳	前方後円	23	下総型？	なし	横室	砂岩切石	-	
	印旛沼周辺	19	吉高山王古墳	前方後円	30	下総型	下総	箱棺	雲母片岩	鞘尻金具、刀子	印旛村教育委員会1977
		20	油作第II号墳	前方後円	38	下総型	下総	未群	未群	-	早稲田大学考古学研究室1961
		21	大木台2号墳	円	18	下総型	下総	木直	-	直刀、刀子、鉄鏃	千葉県文化財センター1996
		22	狐塚古墳	前方後円	49	下総型	なし	片袖？横室	砂岩・片岩	直刀、鉄鏃、TK209型式期	野中ほか1976
		23	野中5号墳	前方後円	32	不明	なし	箱棺、木直2	片岩	直刀、挂甲、馬具？、鉄鏃、TK217型式期	千葉県文化財センター1995
		24	荒海15号墳	前方後円	29	下総型	下総	不明	不明	-	荒海古墳群発掘調査団1975
		25	浅間山古墳	前方後円	78	山武郡？	なし	複室横室(箱棺1)	雲母片岩	白土、冠金具、ねじり環、馬具、TK217型式期	白井ほか2002
		26	竜角寺112号墳	前方後円	25.2	下総型	下総	箱棺	雲母片岩	-	小牧1994
		27	小台1号墳	前方後円	40.4	不明	なし	箱棺	雲母片岩	直刀、刀子、馬具、湖西II-5	安藤ほか1981
		28	小台2号墳	前方後円	40	不明	なし	箱棺	雲母片岩	小沢5期	
		29	道作1号墳	前方後円	48	下総型？	下総	未群	未群	-	飯塚ほか1998
	手賀沼周辺	30	高野山1号墳	前方後円	35	下総型	下総	竪室1、箱棺3	雲母片岩・砂岩切石	直刀、鉄鏃、小沢5期	藤本ほか1969
		31	高野山2号墳	帆方後円	22.5	下総型	下総	箱棺	雲母片岩	直刀、鉄鏃、小沢4期	
		32	高野山3号墳	円	17.5	下総型	下総	複室横室(木棺)	砂岩切石	鉄鏃	
		33	高野山4号墳	前方後円	27.5	下総型	下総	箱棺	雲母片岩	直刀、鉄鏃、小沢5期	
		34	我孫子四小古墳	前方後円	35～40	下総型	なし	複室横室(木棺)	砂岩切石	TK217型式期	
		35	日立精機1号墳	前方後方	46	下総型？	なし	横室(木棺)	砂岩切石	TK217型式期	
		36	日立精機2号墳	前方後円	32	下総型	なし	横室(木棺)	砂岩切石	湖西II-5	
	江戸川流域	37	法皇塚古墳	前方後円	58	?	生出塚	片袖横室(鉄釘木棺)	房州石	衝角付冑、挂甲、ねじり環、馬具、鉄鏃	小林ほか1976
		38	明戸古墳	前方後円	40	?	あり	箱棺2	雲母片岩	甲冑、大刀、鈴など出土の伝承あり	市川市史編纂委員会1971、大村1982
		39	目沼7号墳	前方後円	32	下総型	下総	竪室	砂岩	銅釧	埼玉県教育委員会1959
		40	目沼11号墳	円	28	-	下総	木直？	-	-	杉戸町教育委員会1964
		41	柴又八幡神社古墳	円?	20	-	下総	横室	房州石	鉄刀、馬具、TK43型式期 帆立貝形の可能性あり	谷口ほか2009
上総	木戸川流域	42	朝日ノ岡古墳	前方後円	70	山武郡	下総型客体	横室？	砂岩？	玉類、上器片	千葉県文化財保護協会1990、城倉2006a
		43	宝馬35号墳	前方後円	35	下総型	下総	箱棺、土坑	砂岩切石	鉄鏃、土坑より耳環	財団法人山武郡市文化財センター1996
		44	宝馬127号墳	前方後円	35	下総型	下総	不明	不明	盛土内から小沢3期の坏	武部ほか1982
		45	埴谷3号墳	前方後円	36	山武郡	下総型客体	複室横室、木直	砂岩切石	刀子、鉄鏃、須恵器、木直より直刀、鉄鏃	川戸1957、山武町史編さん委員会1988
	村田川流域	46	小谷1号墳	前方後円	40	不明	下総	木棺直葬？	-	直刀、TK209型式期	高橋1992
	養老川流域	47	根田130号墳	前方後円	34	不明	下総	木棺直葬2	-	銀製金環、直刀、馬具、鉄鏃、TK43型式期	田中1981

凡例　箱棺…箱形石棺　横室…横穴式石室　木直…木棺直葬　竪室…竪穴式石室　須恵器は型式を田辺昭三編年で記述し、湖西産須恵器は後藤健一編年で記述　土師器は小沢洋編

第8章　埴輪の生産と土師部の成立

ー埴輪生産に因んだ地名をめぐってー

はじめに

埴輪は古墳時代の始まりから存在し、古墳時代の代表的な墳形である前方後円墳が築造されなくなる頃に生産を終了することが知られている。つまり、古墳時代の比較的長期にわたってつくり続けられてきた数少ない物質資料の一つである。さらに埴輪は、その製作遺跡が比較的多く確認されている。須恵器もその製作遺跡が各地で確認されているが、これは古墳時代中期以降につくられるようになったものである。土師器は古墳時代を通じてつくり続けられたものであるが、その製作遺跡はあまり知られていない。つまり、製作から利用・廃棄までを知ることができ、かつ古墳時代を通時的にみることのできるものは埴輪以外にないといっても過言ではない。

本章では、文献史料や残存地名（以下土師地名とする）などを視野に入れ、埴輪生産地との関係、土師部（土師氏）の成立を何時に求めるべきなのか、試案を述べようとするものである。

1．埴輪生産の概観

前期の埴輪生産に関しては、詳らかでない。しかし、中期前半に位置付けられる香川県高松市中間西井坪遺跡焼成土坑や奈良県奈良市東院地区窯などが窖窯導入以前の状況を端的に示す例である。両者とも近隣の古墳に埴輪を供給するために設置された埴輪焼成遺構であり、おおむね5世紀前半代に操業していたものと思われる。同様の構造の埴輪焼成土坑は三重県鈴鹿市石塚遺跡でも確認されている。いずれも小規模に埴輪が生産されていたと思われる。古墳時代前期についても同様の構造の平窯であったと想定されるのである。

中期後半代には埴輪生産に窖窯が採用され、同時に全国で生産遺跡が確認されるようになる。ただし、畿内（河内・和泉）を除けば、各地での埴輪生産はまだ小規模であったと推察される。例えば、福岡県八女市立山山窯跡群は5世紀代のものとしては1基のみであるし、同朝倉郡筑前町山隈窯も須恵器併焼で合計4基である。愛知県内の埴輪窯跡はすべて須恵器併焼であり、1～4基ほどのものばかりである。埴輪窯跡が比較的多数発見されて

いる関東地方においても、5世紀代のものは少ない。茨城県ひたちなか市馬渡窯は5世紀後半代ではC区があり、重複した1・2号窯、焼成前に放棄された3号窯があるのみである。操業時は1基であった可能性が高い。千葉県木更津市畑沢窯も1基のみである。群馬県藤岡市本郷窯は2地点の灰原範囲が300mにも及ぶ大規模窯跡群であるが、5世紀後半のものは比較的狭い範囲に限定される。埼玉県鴻巣市生出塚窯は、確認されている窯の大部分が6世紀代のものである。

後期には埴輪生産が全国的に拡大するとともに、関東地方においては大規模生産遺跡が出現する。それは、埴輪の樹立される古墳が多くなることと不可分の関係と理解される。関東地方では前述の馬渡窯、本郷窯、生出塚窯とともに、茨城県東茨城郡茨城町小幡北山窯、埼玉県深谷市割山窯、同熊谷市権現坂窯などが大規模生産遺跡と考えられる。大西智和が示した九州・京都・群馬の埴輪樹立古墳の時期別推移によれば（大西 1993)、畿内は川西宏幸の編年（川西 1978）の4～5期で約6割だが、九州および関東（群馬）は5期で約7割を占めている。埴輪生産が、5期すなわち6世紀に集中するということである。

2．埴輪生産遺跡と土師関連地名・人名

埴輪生産に窖窯が導入されることは、大量生産を可能にし、特に畿内の大王墳が巨大化することと無関係ではあるまい。しかしそれ以外の地域においては、窖窯導入期も画期の1つだが、むしろ6世紀代の各地域における埴輪の大量生産に画期を求めたほうがよいとも思われる。各地での埴輪生産遺跡がすべて発見されているわけではないことも事実だが、ひとまず、現時点での全国の埴輪生産遺跡を集成するとともに①、未確認の遺跡を推定する上で、地名および人名に着目してみたい（表 1)。地名としては主として「土師」「埴」「羽生（埴生)」、「土生」などの良質粘土に因んだもの、人名は「土師」姓を対象とした②。埴輪生産遺跡は管見に触れたもので、北は宮城県、南は熊本県（詳細不明）で、合計 114 遺跡である。周辺の土師地名については、遺跡地に対応する場合と比較的近在する場所に比定できる場合を記入することとし、推定される市町村を併記した。また、別地域と推定される土師地名などは別欄に記入した。また、埴輪生産遺跡が未確認の県についても参考として地名などを示すこととした。

一見して近畿地方において埴輪生産遺跡と土師地名が良好に対応していることがわかる。また関東地方でも、前述の大規模生産遺跡とした遺跡と地名がよく対応している。しかし

唯一、埼玉県に関しては土師地名そのものがほとんどない。周知の通り生出塚窯は埼玉古墳群の埴輪を主として生産していた遺跡であり、その周辺でまったく土師関連の地名を見出すことができないことは、大規模生産遺跡という点からみれば奇異な印象を受ける。ただし強いてあげるならば、生出塚窯がある場所は近世に天神と呼ばれたところである。天神という地名に土師氏との関連を求めるのは強引過ぎるだろうか。また、『日本書紀』神代紀によれば、「天穂日命。此出雲臣。武蔵国造。土師連等遠祖也。」とあり、同様の記述は『古事記』にも認められることから、ここに土師氏－出雲臣（国造・古事記）－武蔵国造の祖が同一の系譜であるという共通点を見出すことができるだろう。なぜ残らなかったのかという疑問点は依然残るが、土師氏と無関係でないことだけは指摘できるだろう。

注目されるのは、愛知県および静岡県（遠江）に土師地名の痕跡をほとんど見出すことができないことである。これら地域の埴輪生産が、須恵器生産と極めて密接に関わっていることは周知の事実である。いずれも須恵器との併焼窯であり、埴輪の製作技術に須恵器の技法が多用されていることが指摘できる。つまり、他の埴輪生産体制とは異なることが指摘できるわけであり、土師地名が残らないこととの相関が指摘できるのではなかろうか。一方、駿河に位置する埴輪専用の静岡市前田通窯の周辺に「埴生」という地名が残っており、駿河の地域には関東系の埴輪が供給されていたことがわかっている③。地域を接する場所において極めて対照的な在り方をすることは、埴輪製作工人集団の有様を解く上で重要である。

以上、窖窯を用いた埴輪生産遺跡と土師地名には相関があることが指摘できた。そしてこの前提から、埴輪生産遺跡未確認地域の土師地名の周辺に、埴輪生産遺跡発見の可能性が極めて高いと思われる。例えば千葉県山武郡地域は、顎鬚を蓄えた人物埴輪を特徴とする埴輪密集地域であり、その只中に位置する山武市埴谷（上総国武射郡埴屋郷）の地に、埴輪生産遺跡が存在する可能性を指摘したい。

3．埴輪生産体制の変革と土師部の成立

窖窯を利用した埴輪生産遺跡の所在地と土師地名に相関があることを指摘した。このことは、ひとり畿内にのみ適応できるわけではなく、列島全域にいえることである。それは、埴輪生産の大規模化、組織化と深く関わって広まっていったと思われる。

埴輪生産においては、大正年間の喜田貞吉に始まり今日に至るまで、文献史学から土師

部との関連を説く見解がなされてきた④。しかし、冒頭に述べたように、一口に埴輪といっても古墳時代の始めから生産され続けられてきたものであり、その最初期から土師部(土部)という集団があったわけではなかろう。ただし、地名との相関から、埴輪生産と土師部(氏)との直接的な関係が認められることは前述の通りである。それでは、4世紀から6世紀末に至る長い埴輪生産史のなかで、いつ集団としての土師部が成立したのだろうか。

『日本書紀』に記された土師氏の活躍の場は米澤康や直木孝次郎が明らかにしたように多岐にわたっている(米澤 1958、直木 1960)。すなわち、土器製作(埴輪製作)、軍事、外交、喪葬などである。特に土師氏の起源を記した垂仁 32 年の条は、埴輪起源説話として夙に知られたものであり、土師氏が天皇の喪葬をつかさどる由縁であるとも記している。天皇の喪葬としては、孝徳天皇の殯宮を掌った機会以降に認められるようになるが、それ以前は雄略 9 年(大将軍紀小弓宿禰)、推古 11 年(征新羅大将軍来目皇子)、皇極 2 年(吉備嶋皇祖母命)という天皇以外の場合があるに過ぎない。ただし、『律令』職員令や喪葬令には土部によって喪葬を執り行う旨が記されていることから、奈良時代には土師氏が広く皇族などの場合に活躍していたことは認められるだろう。喪葬に関わる由縁を記した垂仁紀以降、最初の記録としては上述の雄略 9 年条となる(仁徳 60 年条は陵守を土師連の管下に置くとしたもので、直接喪葬に関わったものではない)。つまり、雄略天皇の時にはじめて喪葬に関わる土師氏が登場するのである。さらに、雄略 17 年条には贄土師部の設定記事が載せられる。雄略朝があらゆる意味で画期であったことは、岸俊男が的確に指摘したところであり(岸 1984)、その画期の時期に土師氏の職掌の主要な部分である喪葬と土器作りの記述がはじめて登場することは無関係とは思えないのである。

土師地名との関わりでは、奈良県奈良市にある菅原東窯と東院地区窯という 2 つの埴輪生産遺跡が重要と思われる。前者は 5 世紀後半にその操業が始まることが知られており、後者は 5 世紀前半に操業が始まる。前者はいうまでもなく土師氏との関連を示す「菅原」の地であり、一方、後者の周辺には土師地名は存在しない。ただし両者は、それほど離れていない場所に位置しているので、後者の周辺には土師地名は存在しないと断言するには強引であるとの謗りは免れまい。しかし筆者には、窯の構造、つまり 5 世紀前半と後半という時期的な違いが残存地名の有無に深く関わっていると考えたい。5 世紀前半に操業していた香川県高松市中間西井坪窯の周辺に、土師関連地名がないこともその補強材料になると思われる。

以上から、畿内における埴輪生産の画期を 5 世紀後半(雄略朝ころ)に求めたい。それ

は、前述した埴輪の大量生産の開始期（窖窯導入期）と合致してくると思われる。雄略朝の時期に埴輪製作工人集団としての土師部の成立を求めたいのである。ただしこの時期に、日本列島全域で一律に土師部として埴輪生産がなされたとはいいきれない。

関東地方で大量生産がはじまるのは、6 世紀中葉以降である。他地域ではなお検討する材料に欠けるが、少なくとも関東地方では 6 世紀中葉に埴輪生産体制の再編がなされ、集団としての土師部の成立をみたと考えたい。それは、舘野和己が明らかにした屯倉制の成立とも深く関わると思われる（館野 1978)。倭王権の各地域における新たな支配体制の確立とともに、部としての新たな生産体制・組織ができたのである。ただし倭王権の支配体制とは、それほど強固なものではなかったと思われる。それは、ほぼ同時期に成立したと思われる国造制について（篠川 1996)、和田萃がいうように埼玉古墳群の中規模前方後円墳を武蔵国造家の墳墓ととらえることができるならば（和田 2001)、国造といえども在地首長の大規模前方後円墳に匹敵する墳墓を築きえなかったことになるからである⑤。

以上のような様々な変革の時期を経て土師部が成立し、その足跡として後世に土師関連地名が残されることになったのであろう。

註

① 埴輪生産遺跡は、筆者の管見に触れたものと、塩野博の集成（塩野 1976)、笠井敏光の集成（笠井 1992）を参照した。ただし特に奈良県内のものは、かつて古墳が存在しないと考えられていた低地で埴輪が出土した遺跡を埴輪生産遺跡と登録しているものが多い。今日、低地で削平古墳が続々と発見されていることから、確実なもののみを採用した。

② 古代地名で主として参照したのは和名類聚抄であり、古代地名大辞典、角川書店も適宜参考とした。中世～近世にかけては、角川日本地名大辞典、角川書店を参照した。人名については佐伯有清『新撰姓氏録の研究』、吉川弘文館および『日本古代人名辞典』、吉川弘文館を参照した。また、土師姓は平安時代に菅原、秋篠、大江に改姓した一族が存在する。特に菅原は後世に天神信仰として各地に広まったものがほとんどで、煩雑となることからひとまず、「土師」に限定することとした。

③ 鈴木敏則氏のご教示による。鈴木氏には東海地域の埴輪生産について多くのご教示を頂いている。

④ 土師部に関する研究は膨大な数にのぼる。紙幅の都合もあり、ここでそのすべてを言及することはできない。序章において、研究史を含めて言及したので参照していただきたい。

⑤ ただし、国造の墓を中規模前方後円墳とするには異論も多い。私自身は埼玉古墳群の大規模前方後円墳の被葬者が国造である可能性が高いと思っている（日高 2011a)。

表1　埴輪生産遺跡と土師関連地名一覧

	県名	埴輪生産遺跡名	周辺の土師関連地名(古代～近世)・人名など	埴輪生産遺跡未確認地域の土師関連地名・人名など
1	宮城県	仙台市富沢窯		
2		色麻町四釜笛林	羽生(中世・大郷町)	
3	山形県	酒田市山谷窯		
4	茨城県	常陸太田市元太田山窯		土師(近世・旧岩間町)，羽生(中世・玉造町)，羽生(近世・旧桜川村)，羽生(近世・旧水海道市)，土師部里麻呂(那珂郡荒蟲郷・正倉院古裂)，土師廣万呂(常陸国仕丁)，土師部與佐賣(下総国相馬郡意布郷戸籍・取手市？・柏市)
5		ひたちなか市馬渡窯	土師小刀良（台渡廃寺瓦・水戸市），はしかべ	
6		茨城町小幡北山窯	土師神主（面山東遺跡墨書），下土師(中世・茨城町)	
7		常総市陣屋窯		
8	栃木県	佐野市唐沢山窯	埴田郷（和名抄・佐野市）	土師郷（和名抄・足利市），埴崎荘(中世・真岡市)，羽生田(中世・壬生町)
9		小山市飯塚窯		
10	群馬県	太田市駒形神社窯		反治郷(和名抄) ←伊勢崎市八寸(中世)
11		太田市金井口窯		
12		太田市成塚住宅団地窯		
13		藤岡市本郷窯	土師郷（和名抄・藤岡市）	
14		藤岡市猿田窯		
15		富岡市下高瀬上之原窯		
16	埼玉県	本庄市赤坂窯		羽生荘(中世・羽生市)，羽尾(近世・滑川市)
17		本庄市宿勝寺裏窯		
18		本庄市八幡山窯		
19		本庄市鮎川窯		
20		美里町宇佐久保窯		
21		深谷市剱山窯		
22		熊谷市姥ヶ沢窯		
23		熊谷市権現坂窯		
24		番居町末野窯		
25		東松山市桜山窯		
26		吉見町和名窯		
27		鴻巣市馬室窯		
28		鴻巣市生出塚窯	天神(近世・鴻巣市)	
29	東京都	大田区下沼部遺跡		土師角麻呂(武蔵国分寺瓦・豊島郡白方郷)，土師部里栖(武蔵国分寺瓦)など，土師部刀自賣(下総国葛飾郡大嶋郷)
30		大田区久ヶ原遺跡		
31	神奈川県	川崎市白井坂窯		
32		横須賀市久里浜窯		
33	千葉県	成田市栗山窯		埴石郷(和名抄・旧長生村または茂原市)，埴谷郷(和名抄・山武市) 埴生郡埴生郷(和名抄・一宮町)，土師宿禰稲守(下総国史生)
34		成田市公津原窯	埴生郡(和名抄・成田市西・南部～栄町)	
35		木更津市畑沢窯		
36	長野県	岡谷市鳥戸窯		埴科郡(和名抄，万葉集)，埴生(近代・旧更埴市)，羽生野村(近世・飯田市)
37		諏訪市手長岡窯		
38	静岡県	静岡市曲田遺窯	埴生郷(和名抄・静岡市)，土師宿禰佐美麻呂(駿河国正税帳)	
39		掛川市星川窯		
40		袋井市衛門坂窯	土師部得末呂(藤原木簡・遠江国長田評佐除里・未詳)	
41		磐田市京見塚窯		
42		湖西市鼎塚窯	土師部小眞木(浜名郡津築郷・旧三ヶ日町)	
43	愛知県	名古屋市東山窯		
44		春日井市下原窯		
45		春日井市桃花園窯		
46		尾張旭市城山窯		
47		尾張旭市卓ヶ洞窯		
48		豊田市上向イ田窯		
49		豊橋市水神窯		
50		豊橋市若宮遺跡		
51	三重県	津市ヲノ坪窯		波敷野(中世・旧阿山町)，土師御園(中世・度会郡)
52		津市藤谷窯		
53		津市法ヶ広窯	贄土師部(書紀・藤方・津市)	
54		久居市久居窯		
55		鈴鹿市石塚遺跡焼成土坑		
56		鈴鹿市橋生窯	土師(中世・鈴鹿市)	
57		四日市市小杉大谷窯		
58		津市安濃町内多窯		
59	福井県	あわら市鎌谷鎌	羽丹生荘(中世・旧美山町)，羽丹生(近世・福井市)	土師宿禰(越前国正税帳)，土師宿禰鷹甘(越前国)，土師竜(平城木簡・若狭国遠敷郡木津郷・高浜町)
60		美浜町興道寺窯	土師安倍(藤原木簡・若狭国三方評耳五十戸・美浜町)	
61	石川県	小松市二ツ梨殿様池窯	埴田(近世・小松市)，能美郡能美郷(和名抄・小松市ほか)	
62	京都府	宇治市西軍上り窯	贄土師部(書紀・宇治市？・八幡市内里？)	土師郷(和名抄・福知山市)，埴見里(条里・綾喜郡)，土師黒庭(山代国班田司史生)，土師連麻呂（山背国愛宕郡大野郷)，丹波の贄土師部(書紀)，大江朝臣(続紀・大江郷・京都市)，土師槇(山背国班田司准判官)，土師部乙山(平城木簡・丹後国竹野郡間人郷・京丹後市)
63		木津川市上人ヶ平窯	吐師(中世・旧木津町)	
64		木津川市音如ヶ谷瓦窯		
65		南丹市園部町德雲寺窯	埴生(中世・旧園部町)	
66		南丹市園部町シマカケ窯		
67	奈良県	奈良市東院地区窯		埴口(古代・新庄町)，埴安池(万葉集・橿原市)，吐田(近世・川西町)，吐田(中世・御所市)，吐田郷(中世・奈良市)，吐田荘(古代・平群町)，贄土師連(姓氏録)
68		奈良市佐保東窯	土師宿禰古人ほか(改姓→菅原，秋篠・続紀)	
69		桜井市能登窯		
70	大阪府	豊中市岩池南畔窯		土師宿禰比良夫(和泉監佑)，土師宿禰廣濱(和泉監主政)，百舌鳥土師連土徳(孝徳天皇殯宮・書紀)
71		豊中市桜塚下原窯		
72		豊中市曽根西町焼成土坑		
73		高槻市新池窯	埴廬(書紀・高槻市)，土室荘(長秋紀・高槻市)，濃味郷(和名抄・高槻市)，式内社野見神社	
74		吹田市吹田37号窯		
75		吹田市松尾池尻		
76		藤井寺市土師の里窯	土師郷(和名抄・河内国志紀郡・藤井寺市)，土師宿禰男成など	
77		羽曳野市栄田白鳥窯	埴生(書紀・羽曳野市)	
78		羽曳野市野々上窯		
79		堺市梅町窯	土師郷(和名抄・和泉国大島郡・堺市)，土塔(土師文字瓦)	
80		堺市赤畑窯		
81		堺市土山窯		
82		堺市日置荘西町窯	土師郷(和名抄・河内国丹比郡・堺市？・松原市？)	
83		堺市日置荘窯		
84	兵庫県	加古川市坂元遺跡		端鹿里(風土記・旧東条町)，波自賀村(風土記・旧神崎町)，埴丘郷(和名抄・旧生野町付近)，土師(近世・旧香寺町)，土田(中世・旧和田山町)，土生(近世・旧香住町，旧南淡町)，但馬の贄土師部(書紀)など
85		相生市那波野丸山3号窯	土師(近世・たつの市)，土師弩美宿禰(風土記・立野・たつの市)	
86	和歌山県	和歌山市森手穂窯	埴崎郷(和名抄・吐前・和歌山市)，埴生里(霊異記・和歌山市・海南市付近)	埴田(中世・旧南部町)，土生(近世・旧川辺町・御坊市，旧吉備町)，吐生(近世・串本町)，波分(近世・岩出市)
87		和歌山市砂羅谷4-Ⅱ号窯		
88		和歌山市鳴神窯		
89	徳島県	鳴門市大谷	土師郷(和名抄・徳島市)，埴土郷(和名抄・石井町～徳島市)	
90		鳴門市長田遺跡		

91	香川県	高松市中間西井坪窯		埴穴(中世・旧大野原町花稲？)
92	愛媛県	松山市谷田窯		垣生(近世・新居浜市，旧三瓶町)，土生(近代・旧弓削町)
93		松山市古鎌山窯		
94		松山市上野窯		
95		松山市西野大池窯		
96		松山市通谷池窯		
97		松山市西野春日谷窯		
98		松山市三本木窯		
99		松山市八幡原窯		
100		松山市大津原窯		
101		松山市生石八幡窯	埴(垣)生郷(和名抄・松山市南西部)	
102	岡山県	鏡野町塚谷遺跡	土生(近世・旧奥津町)	土師方(中世・旧建部町)
103		赤磐市土井窯	土師郷(和名抄・旧長船町)，土師谷村(中世・旧英田町)，土生(近世・旧佐伯町)	
104	山口県	萩市円光寺(大井)窯	垣(埴)田駅(和名抄・萩市)	埴生駅(延喜式・旧山陽町)，土生(近世・岩国市)
105	島根県	松江市平所窯		波子(志)浦(江津市)，野見(風土記・旧赤来町)，土師部小龍(大日本古文書・出雲郷)，土師当麻・嶋足(大日本古文書・都智郡)
106	福岡県	北九州市潤崎遺跡	埴生郷(和名抄・中間市)	蓋村(中世・宗像市武丸字土師上) 土師宿翻開成(続紀・大宰府に遣わされる)
107		八女市立山山窯	土師郷(和名抄・山本郡，福岡県南西部)	
108		筑前町山隈窯		
109		小郡市三沢蓬ヶ浦遺跡		
110		飯塚市下ノ谷窯	土師郷(和名抄・桂川町)	
111		飯塚市目尾窯？	土師郷(和名抄・桂川町)	
112		上毛町下唐原大久保窯		
113	佐賀県	唐津市浜玉町仁田遺跡		土師郷(中世・神崎市)，土生ヶ里村(近世・旧三日月町)，能美郷(和名抄・鹿島市)
114	熊本県	宇木市前田遺跡Ａ地点		土田(中世・小国町)
	福島県	未確認		土町・土津神社(近世・猪苗代町)
	新潟県	未確認		埴生保(中世・柏崎市)，羽二生(中世・旧両津市)，羽生(近世・糸魚川市，羽生(埴生)田(近世・田上町)
	富山県	未確認		土師(万葉集など・越中国遊行女婦)
	岐阜県	未確認		埴生郷(和名抄・富加町)・半布里（正倉院文書)，美濃国には土師部・土師姓が多い(御野国絲間郡春部里)
	鳥取県	未確認		土師郷(和名抄・智頭町埴師)，因幡の贄土師部(書紀)，土師首麻呂・麻呂(正倉院文書・大江里・旧船岡町)，能美郷（和名抄・鳥取市)
	広島県	未確認		土師(中世・旧八千代町)，土生(近世・旧因島市，府中市)，能美郷(和名抄・旧豊栄町)
	長崎県	未確認		土師野尾(近世・諫早市)
	大分県	未確認		埴田名(中世・豊後国直入郡直入郷)，埴坪村(近世・旧挾間町)
	鹿児島県	未確認		土師浦(中世・阿久根市)，土師迫(中世・旧金峰町)，土師宿翻山麻呂(周防正税帳に大隅国の人とある)